

---

# また会える日まで

a n g e l

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

また会える日まで

### 【Zコード】

Z0524F

### 【作者名】

angel

### 【あらすじ】

哀とコナンは組織を壊滅させるため動き出す。しかし平次や蘭たちを巻き込んでしまうことに悩む。そんなコナンが逆に平次、快斗、また、探など、さまざまな人から協力してもらい、組織壊滅のため、動き出す。そんな話です。名探偵コナンのFF、初投稿、読んでみてください！これは新蘭、平和、快青で、少し園真も出できます。

# file1・プロローグ ジンのひがわ（前書き）

初めて書きます！！

週1投稿の予定ですが、不定期になりそつ・・・テス・・  
よかつたら読んでください！！

どんなことでも良いんで、評価・感想お待ちしてます！！

## file1・プロローグ ジンのつぶやき

夜、辺りに誰もいない雪の降る道で、2人は話していた。

「やつと見つけたぜ、ショリー。」

ジンはやつて笑った。

「とうとう見つけたんですねかい、兄貴。」

「ああ、やつとな。だが、正確な位置が把握できない。まあ、今、調べているからそのうち分かるだろ。」

「どれぐらいかかるんですかい？」

「3週間といつていろだらう。ウオッカ、そろそろ行くぞ。」

その言葉を残して2人は車に乗って、行ってしまった。

## file1・プロローグ ジンのつぶやき（後書き）

プロローグどうですか？

短かったですよね・・

次は哀ちゃんとコナン出します！！

（たぶん・・・）

感想ください！！おねがいします！！

## file2・哀の呼び出し

その日、コナンは哀に呼ばれた。  
コナンは不思議だった。哀はめったに人を呼ばないからだ。  
博士に連れられ、部屋に入った瞬間、コナンはその一言を聞いてしまった。

「工藤君、組織が動き出したわ」

「えっ！？」

「コナンは驚いた。哀がそんなことを言つなんて意外だつたからだ。  
「いきなりなんだよ。つていうか何でお前がそんなこと知つてんだ？」

「昨日FBIから報告が入つたの。あなた昨日蘭さんたちと出かけてケータイ出なかつたでしょ」

「わかつた。で、どんな感じなんだ？」

「コナンはコーヒーを飲みながら聞いた。

「くわしこことは後で来て言ひ直しいわ」

「じゃあ、それまで！」と待つぜ

「コナンは、それまでゲームをして待つことにした。この家は結構何でもあるので十分暇はつぶせる。

哀は疑問に思つて「」とを聞くとした。

「何で昨日電話に出なかつたの？」ジョーティ先生5回もかけたらしいわよ」

「ケータイおいてきちまつてな。コナン用のならあつたんだけどよ」

コナンは悪げもなく答えた。

「あなたねえ、あのケータイ見られたら大変なことになるの知つてるでしょ。気をつけなさいよ」

哀はコナンに呆れた。事の重大さがわかつてないからだ。そのとき博士はコナンに話しかけた。

「やうじや、これ君に頼まれてたスケボージャ。強度も上げておいたぞ」

「ありがとな博士。恩にきるぜ」

コナンは再びゲームを始めた。

この日が最後の平和な日になると知らずに・・・

## file2・娘の呼び出し（後編）

早く書けると思ってたんですが・・・  
パソコン触りせてもうえなくて・・・

私昨日運動会だつたんですけど、なんと！  
雨の中でやつたんですよ！ありえないですよね～  
ホントにびっくり（――）  
しかもそのせいでリレー走れなかつたんですよ！  
むかつきますよね～

「ごめんなさい。話違いますね（汗）

次はFBに出します！！  
見てくれるとうれしいです！！

「ハアイ、クールキッド」

ジョディは夕方やつてきた。

「先生遅かったね。で、話つて何なの？」

コナンは單刀直入に聞いた。

「これは、とても重要な問題よ。最初から説明するわ。FBIがまたマジンの車を見つけてつけていたの。でね、そのとき、彼らは『シーリーを見つけた』と言つたわ。幽霊船の事件から、私達はシエリーを哀と判定したわ。だから電話したの」

哀は驚いて声が出なかつた。かわりにコナンが聞いた。

「灰原の場所がばれたのか！？」

「あと3週間つて言つてたらしいわ。だから早く見つけないといけないの。」

2人はとりあえずほつとした。

「つづきをはなすわ。それで私達はあなたたちに協力してもらおうと思ったの。哀は証人保護プログラムは受けてくれなさそうだしね。」

「哀は悩んだ。これを受ければみんなは狙われない。そう思つたから

だ。

その沈黙を破つたのは博士だつた。

「よかつたのぉ、哀君。君はあのじとで悩みすぎてたじゅるへ。それでそんなことはなくなるんじゃないかのぉ」

「わづだぜ。受けたりしたら、探偵団のメンバーも悲しむだり?」

哀は少し悩んだがうなずいた。

「ただ、ひとつだけ聞きたいことがあるの、哀ちゃん」

「なんなの?」

「あなたはシルバーと呼ばれてたの?」

「それは答えられないわ」

この間わずかに沈黙があつた。そして、ジョディは答えた。

「わかつたわ。言いたいときに教えてちょつだい。たぶん明日計画の連絡を入れるわ。じゃあね」

ジョディはそれだけ言って帰つていつた。

3人はただ見ていた。

その沈黙を破るようにコナンが最初に話し始めた。

「いきなりだつたなあ。さすがにびっくりしたぜ。」

「何のんきに言つてるの。組織と戦うのよ。あなたそれがわかつて

るの?」

哀は少し興奮していた。博士は哀をなだめるよつこいつた。

「哀君。チャンスじゃないかの。これで勝てば君たちは元に戻れるのじやろ?」

「博士は何もわかつてないわ。これは命がかかっていの。私はともかく他の人たちに迷惑がかかつたら……」

哀は持つていたコーヒーを落とした。

「灰原、お前逃げる気か? 運命から逃げんなよ」

コナンは静かに有無を言わせずこいつた。哀はその語調に負けたのか、納得したようだった。

「分かったわ。だけど居場所がばれたらおしまいよ」

「分かってる。だから今戦うんじゃないか」

コナンは哀にやつと帰つていった。

哀はまだ不安があつたが、明日からのことを考えていた。希望を持つて・・・

### file3：FBIの来訪（後書き）

どうですか？ 一番考えたのは『運命から逃げんなよ』って感じです。

バスジャック事件から出してきました。 考えた結果あそこに入れることに・・・

次もFBIですね。その後他の登場人物入れていきます。  
訂正や感想お願いします！！！

「言つてたとおり、連絡するわ。」

その日の下校中、電話はいきなりかかってきた。

「ジョディ先生、何が決まったの？」

コナンは待ちきれずに聞いた。

ジョディは落ち着かせるかのように静かに語り始めた。

「まず、開始は20日後に決定したわ。FBIの調査の結果、彼らは東京都にいることまでしか知らないらしいの。だから分かるのは25日前後と踏んでいるわ。後、君は機転も利くし、運動神経もいいから、戦闘班に入つてもらうわ。けど、先陣切つて戦う訳じやないから安心して。で、哀ちゃんのほうは、研究班ね。あの子はあいつたことに長けているようだから・・・」

コナンは探偵団のみんなと別れて、裏道にはいった。

コナンはおとなしく聞いていたが、疑問が残った。それに気づいたのか、ジョディはまた喋り始めた。

「研究班と言つのは、組織の情報を盗んだ戦闘班が、情報を送つて別のところで研究するの。ここにいる人に情報を送ればその場で研究してくれるわ。それ用のケータイも作つてもらつてるし」

「組織のアジトはどうなの？それがわからないとどうしようもないんじゃない？」

「いいところに気づいたわね。私達はCIAと連携を組んで組織のアジトを割り出そうとしたの。だから昨日わざと組織と戦つて末端のメンバーに発信機入りの銃弾を打ち込んだの。これで分かるはずよ。上のほうは末端なんかに興味ないだろ？」

コナンはそこまで聞くと安心した。

「ありがとうございます、ジョディ先生。じゃあ、また連絡入ったら連絡して」「ジョディは急いで一言付け足した。

「CIAと組んだときに本堂瑛祐くんがあなたに会いたいって言つてるの。明日向こうと会つて細かいことを決めるんだけど来ない？」

コナンすこし嬉しくなつた。会つたときに何を瑛祐が話すのか気になつたからだ。コナンはすぐに答えた。

「わかった。行くよ。またねジョディ先生」

コナンはそういうて電話を切つた。コナンの心はクールな外面とは裏腹に、躍つていた。明日の集合ですべてが分かると思うと期待は膨らんだ。そのときは気が付かなかつた。

蘭がコナンの正体に気づき始めたことに・・・・・

## file4 : CIAとの連携（後書き）

やつと書きました。1日に一話は疲れますね( ^ ^ ; )  
次からは新蘭です!!平次たちはどこに行つた!!と思う人も多いで  
しょう。

大丈夫!!この新蘭終わつたら出します。  
評価お願いします。

「何よこれー?」

蘭は驚きを隠せなかつた。コナンが忘れていたと思つていた携帯電話は蘭がコナンに渡そうと思つてもつっていたのだ。

蘭がふと中を見るとロックがかかっていた。それであのときの番号を入れると開き、見てみると中には蘭とのメールや、服部との電話の履歴があつたのだ。

試しにメールを送るとメールはその携帯電話に届いた。これを機に、蘭は疑い始めた。

蘭はコナンに疑問があつた。

新一がいなくなつたとき、コナンがきたときなどいろいろ考えても一つの結論しか思いつかなかつた。

それはコナン＝新一といつ事実。

蘭は決意してコナンに聞くことにした。

コナンが瑛祐と会つ前日の夜、蘭は言つた。

「コナン君は新一なんでしょう?」

「コナンはびつべつした。まさか今日言われるとは思つてなかつたらだ。

「どうしてそんなことこのの?」

コナンは動搖していたが、冷静に返事をした。

それには比べ蘭は素直に言つてくれないコナンに腹立ちを覚えた。

「何も言つてくれないのね。でも、いつかは証拠があるのよ。」

「ナンはドキッとした。あの携帯電話のことを探し出したからだ。動搖が大きくなつた。それでも平静を取り繕つて言つた。

「証拠つて何？」

次の瞬間決定的な、聞きたくない答えが返つてきた。

「ケータイよ。分かってるんでしょーーー！」

「そんな。それは新一兄ちゃんのかもしれないじゃんか

蘭はまだ疑つていたがなんとなく流されてしまつた。  
だからそれ以上追求しなかつた。

「ナンはそんな空氣を読み取つて言つた。

「本当は、今詳しい話をしてあげたいけど出来ないんだ。もう少し  
だけ待つて」

「わかった。けど、そのときになつたら必ず話してね

「絶対に話すよ」

「」の一句で、蘭はいつも通りに戻つた。  
「ナンも少し心が軽くなつた。

## file5・気づく正体（後書き）

ついに新蘭書きました！

蘭だけは先に正体言いたかつたんです！

新一と蘭は特別扱いですから（笑）

次回はまだ考へ中です。大体は決めたんですけど・・・

朝起きると、携帯に1件の着信が入っていた。  
かけなおしてみると「ナンの今の気持ちと正反対のような明るい声  
が聞こえてきた。

「おお、工藤か！」

「ナンは眠そうな声で言い返した。

「なんだんだよ？ 朝っぱらから」

「1時間も前に電話入れたんやで？ 何ででんかつたんや？」

「寝てたんだよ、1時間前は6時だぞ？」

「せうやな、ああ、今そつちいつてるんや。 しづまじへ泊まるで」

「ナンは急な展開にびっくりした。

「ええ！？ なんで来んだよ？」

平次は低い声でつぶやいた。

「詳しい話は後や。 長くなつそつやからな

そんな意味深な発言を残して、平次は電話を切ってしまった。  
コナンは考えた。何で今平次がやってきたのか。 話とは何なのか。  
それはなんとなくわかったが、すべては詳しい話を聞いてから考え

る」とした。

2時間後、平次はやつてきた。蘭はあるでその「」とを知っていたかのように、驚きもせず、平次を3階へ案内した。

平次は入ってきた瞬間、珍しく真剣に、一言だけつぶやいた。

「姉ちやんに正体ばれてるで」  
ねえ

「ええー!？」

コナンは知つてはいたが改めてびっくりした。  
平次はまた話し始めた。

「それでな、俺になんでそなつたか聞いてほしいんやで」

「そついわれても、言えねえよな。教えてやりたいけどな」

平次はコナンを諭す口調で言つた。

「でも、だらだら伸ばしたら言ことくなくなつてへるで」

「せうだよなあ・・・じつよつか・・・」

「理由はつきとひつかるとして、これからどうするんやへ、もつ工藤の正体を知つとる今、今までどおり誤魔化せんぬで」

「じゃあ、やつぱり言つたほつがいいか・・・」

そのとき蘭がお菓子を持って部屋に入ってきた。

「服部君、やつへつしてこつてね」

それだけこつと蘭は帰つていつた。

コナンはそのまま直後平次に決意を話した。

「服部、俺理由ちゃんと書く」

平次は「さなつ」といふたえていた。

「なんでもやつれまでもんなんに悩んだったやないか」

コナンは説明した。

「わの蘭の顔を見たか? ゆく疲れていだら? あのままこつたら病気になる氣があるし・・・」

平次は納得したようだった。

「じやあ、早づ聞こや。でも俺はまだここんたびな」

「用事はこれだけじゃなかつたのか?」

平次は考えをコナンに語した。

「姉ちやんの話によると、ケータイに組織の話がめつせ書いてあつたんやろ? これは手伝わんと」

「ナンは2つのことをどちら話すか迷つたが蘭の事を先にする」とに決めた。

「服部、その話は後でしよう」

これから、起りいろとに不安はあったが、ナンは一瞬の希望を見つめていた。

file6・幽み（後書き）

遅くなりました（汗）

おとどこできたんですねび、投稿できなくて・・・

次は平次です！！

展開予想してみてください！！

（和葉だそつかなと思ひます）

平次が毛利探偵事務所へ行くときのこと・・・

和葉は駅に急いでいた。和葉は珍しく怒っていた。

（おかしいて思つとたんや！－）最近工藤君の話ばっかりするし、滅多に買い物誘つても来ん平次があんな乗り気なんは100%裏があるに決まつてるやん！なんでうち氣づかんかったんやろ？）

和葉はそれを確かめに平次に会いにいこうとしているのだ。  
しかし、行く理由はそれだけではなかつた。

（蘭ちゃんもおかしいんよねー。電話しても声が暗いし、昨日はメール返つてこなかつたし。

平次がしゃべつてたん聞いたら工藤君がかかわつてるっぽいし。これは確かにいかんと。もし蘭ちゃんになんかあつたら工藤君でも許さんから！－）

和葉が怒つてたのはこれだつたのだ！この二つのことが、周りの人  
が和葉に近づけないほどにしていた。

もつすぐ電車が出発してしまつ。和葉は全速力で走つた。

その頃平次はバイクを走らせていた。

平次は和葉が怒つてゐることに気づいてなかつた。

(工藤大丈夫やろか？姉ちゃんが知つてたんやから正体ばれてるんやろしぃなあ。やっぱ俺が助けんと！)

考えているのはコナンのことばかりで他のことは考えていなかつた。  
そういうことを考えていの間に景色は森に変わつていつた。

(何で東京と大阪はこんなに遠いんや……もつと早う出ればよかつた。急がな！)

2人は互いに別々に、また同じ目的地に向かつていた。

この2人の行動は後にコナンに影響を及ぼすことになる。

投稿遅くてごめんなさい。

中間テストだつたんです・・・

明日までなんですけどね。

次回分は書いています！－早ければ明日出せると思います！－！

最近気づいたんですが、私、哀ちゃん最初しか出してませんね・・・  
あらすじと反してるような・・・  
もう少ししたら出しますからね！－！

読んでいただきありがとうございました。

「ナンは服部と話し合つた後、蘭の部屋に行つた。  
「ナンは緊張していたが、蘭の部屋の戸をノックした。

「蘭ねえちゃん? 入つてもいい?」

蘭は戸越しに答えた。

「うん。 入つて」

「ナンは静かに入った。

「蘭ねえちゃん、話があるんだけど」

「ナンは早速本題に入った。そのとき部屋が静まり返つた。

「何なの?」

その口調は小学生に対する口調と「いつも、高校生に対する口調」というよりも、高校生に対する口調に近かつた。

「ナンはそのことには触れず話し始めた。

「俺は・・・工藤新一だ」

「ナンはとうとう正体をばらした。蘭は納得出来ないことがあった。  
それに気づいたのか続きを話し始めた。

「俺が小さくなつたのは、最後に蘭とトロピカルランドに行つたあ

の口だ。よく調べたら、俺は出でないとわかると感づ

蘭は続きを話すように促した。

コナンは続きを話し始めた。

「俺が先に帰つてくれって言つたの覚えてるか?」

蘭はうなずいた。

「実はあの時、取引き現場を見たんだ。それを見ているときに、その仲間のやつに殴られて、変な薬を飲まされて、幼児化した」

コナンはすべてのあらすじを話し終えた。そのとき部屋の時計には、4時と刻まれていた。

蘭はそれ以上は追求してこなかつた。しかし一言だけ言つた。

「何で・・・何で話してくれなかつたの?」

コナンは説明した。

「そいつらは犯罪者で、人を殺すのが平氣なやつらだ。だから誰かに言えばその人は殺されるかもしない。周りの人たちも・・・だから、言えなかつたんだ。」

コナンは続けた。

「ホントはお前をこんなことに巻き込みたくないなかつた。けど、最近は・・・お前と一緒に居たいと思つてる。こんな危険な状況でも・・・一緒に居てくれるか?」

蘭は笑つた。そして答えた。

「うん。居てあげる」

「ありがとな。」

コナンは言った。

この瞬間、一人はうち解けたようだつた。  
コナンはもつと話していたかつたが、平次のことも、瑛祐のことも  
あつたのでコナンは部屋を出た。蘭はそれを眺めていたが、その後  
すぐに、買い物をしにいった。

この日は一人にとってとてもいい日になつた。

## file 8・絆（後書き）

結局投稿おくれでごめんなさい。

今回どうどう正体が！？！

でも話はこれからです。

次は平次とコナンです。途中で何か入るかもしませんが・・・

読んでくださった方ありがとうございました。

## file9・予定変更！？

ちゅうで話しあわったころに電話がかかってきた。

「ハーアイークールギッシュ！」

「あ、ジョディ先生？ 確か今田だよね？」

そのことを話し始めたとたん、ジョディは少しへーーンダウンした。  
どちらかと言えば痛いところをつかれた顔だっただろう。

「あ、そのことなんだけれどね・・・今日はなくなつたの。」

「なんで！？」

コナンは驚かずにはいられなかつた。その様子は遠足がなくなつた子供のようだつた。

「FBIとCIAの予定では今日中に組織の情報が手にはいるハズだつたの。だけど、組織の情報がうまく取れなくて・・・」

納得した顔で聞いていると、ジョディが話しかけてきた。

「それでね、あなたも思つていてるでしょうけど、ジンから情報が洩れるなんて変なのよ。だから相談しに哀ちゃんといたいんだけどいいかしら？」

「聞いてみるね」

「ナンは携帯を取り出した。そしてナンが電話をかけよつとする  
と、ジョディが一旦とめた。

「OKが出たらクールキッドも来て頂戴」

「わかつた。」

「ナンはそういうふたあと、博士の家に電話した。

「もしもし？博士？ジョディ先生が行きたいらしいけどいいか？」

「ああ。けど、なんでじゃ？」

「細かいことはあとでな」

「ナンはそういうふたあと、博士の家に電話を切つた。  
すぐにはジョディは聞いてきた。

「大丈夫だった？」

「うん。大丈夫」

ジョディはほつと一息ついた。そして話し始めた。

「じゃあ今から毛利探偵事務所に行くから」

「うん。待ってるね」

「ナンはそういうふたあと、博士の家に電話を切つた。  
なぜ今頃になつて話すのか、理由がわからなかつたからだ。

「ナンは来るまで帰れる」と云つた。

今はまだ知らない。このわけを・・・

## file9・予定変更！？（後書き）

今回の話は、電話が2つ使われています。

一応言つておきます！

最近不定期です。すいません。

しばらくは早く連載できると思います！

ここまで早くできることはないので注意してください！

まあ、部活で試合も終わつたので、早くになります（たぶん）。

それでは次回まで！

10分ぐらいして、ジョーティは探偵事務所へやつてきた。蘭は急にやつってきたジョーティを見てびっくりしていたようだが、適切に対応した。

「ジョーティ先生、もう夜のにどうかしたんですか？」

「毛利サンね？ コナン君に用事があるの。出してもうえないかしら？」

ジョーティは用件だけを单刀直入にいった。  
蘭はすぐにコナンを呼んだ。

「コナン君、ジョーティ先生が来たわよ」

「すぐ行くよ」

そういうてコナンは3階からすぐにはり降りていった。  
降りたらすぐ出かけることを蘭に伝えた。

「ボク、これからちょっとジョーティ先生と出かけてくるね」

蘭は少し考えていたが、すぐに行つていいと言つた。

「ありがと、じゃあ行つてくるね！」

「じゃあ、またあとでね、毛利サン」

そういうつて2人は出かけていった。

少し経つと、2人は車内で話し始めた。はじめに切り出したのはコナンのほうだった。

「ジョディ先生、何でいまさらこんな話をしようと思つたの？」

「ナンは子供の声だが、有無を言わせぬような語調で切り出した。

「それはちゃんと博士の家に着いたら話すわ。それとも予想が付いてるの？」

ジョディもコナン同様有無を言わせぬ口調だった。コナンはそれに返事した。

「まあね。でも証拠はないよ？」

「じゃあまたあとで聞かせてもらひつわ」

そうこうとまた沈黙が訪れた。

話さない間、窓の外を見ていると、雪が降っていた。

「あ、雪だ」

そつポツッとつぶやいた。ジョディはそれにあわせて返事をした。

「そうね。まあ、博士の家に着いたわ」

気が付くと、そこは博士の家、そして工藤新一の家の前だつた。ナンはしばらく眺め回したあと、阿笠邸に入つていった。

□

file10・回答へ（後書き）

投稿最近早いですね。

基本的に考えてないので、不定期になるのは間違いない感じがします・・・

早く投稿できるようには頑張ります！

読んでくださいありがとうございました

コナンが博士の家の呼び鈴を鳴らした。  
どうやら待ついてくれたようで、すぐ出てきた。

「おお、新……いや、コナン君、待つとたゞ…」

博士は笑顔で迎えてくれた。少し問題はあつたが……  
そしてコナンはそのままリビングに入つて行つた。

「そりや、灰原は？いねーけど」

博士は少し顔が曇つた。

「昨日、実験室に入つたきりなんじゅよ。」  
「飯のときとかは出でぐるがのう」

コナンは状況を理解したようだつた。

「わかつた。博士はどうにかして灰原をここに連れてきてくれ」

「わかつた」

そういうてドスドス音を立てながらも哀を呼びに行つた。  
2人はたわいもない会話をして、時間をつぶした。

10分ほどして、博士と哀が來た。

「ナンが哀に聞いた。

「なんで、お前実験室にいたんだ？」

「別に。悪い？」

そつけない口調で哀は答えた。

そのあと口火を切ったのは、やはりジヨーディだった。

「で、何で私がこのことをここに来たかつて言つと……」

少し間があいてからジヨーディはいった。

「……やつぱつ「ナン君に言つてもいいことあるわ。教えたはずだし」

そうこわれたので「ナンは話し始めた。

「言つたかったのは、何でジンから情報が洩れたかつていうことだ。あの慎重派のジンから漏れるなんておかしいからな」

「「ナン君、そつよ。けど、君たちはなんかあの組織とかかわっている気がするつて言つのもあるのよ」

一息おいてから話しが始めた。

「あの」とこつこつなんだけど、おそらく向ひつかり流したものよ。事情は分からぬいけど、怪しいわ。だから今は計画を少しばらめよ

うと思つた。貴方たちはそれでいいかしら?」

2人はほぼ同時に答えた。

「いいよ(いいわよ)」

「わかつたわ。じゃあその方向でいくわ」

ジョディは去り際にコナンに一言言つて去つていった。

「これから大きなことがおこるかも知れないわ。きをつけとて」

そういつて帰つてしまつた。

「何を話したのかしら?」

「なんでもねーよ」

コナンはそういうたが、心配だつた。ただ、無駄な心配をさせないために、その場は何も言わなかつた。そして、そのあと3人で少し話したあと、コナンは家に帰つていつた。

file11・実状（後書き）

とうとうアベ10000突破することが出来ました!!

正確には11143でPCだと4221、ケータイだと6992です!!

ただユニークは4830でPC2472、ケータイ2358と少ないのに今後はむしろうまく書けるようにします!

最近、ジョディ先生との話ばかりで暗かったのでつぎは明るい話を書いていきます!

subに出てきた平次&和葉で!!

青子と快斗はもう少ししてから出します。

## file12：譲れない気持ち

コナンは帰ったあと、疲れを理由に平次とは話すこともなくすぐ寝てしまった。その後、10時頃まで、ここ3日、特に昨日の疲れがたまっていたせいか、遅くまで起きてこなかつた。ちょうど学校側の用事で連休となつていて都合が良かつた。

しかし起きたとき、聞こえるはずのない声が響いてきた。

「蘭ちゃん、疲れてるや？ウチが作つといたるよーー急に来たんも悪いし」

「いいわよ。私が普段作つてるんだし。和葉ちゃんはゆづくしてて」

そこで、和葉が来たことが分かった。しかし、来る理由がないので、出来事を思い出していると、突然、何もないはずの場所から、声が聞こえてきた。

「和葉は俺を追いかけて來たんや」

「ナンはびづくした。無理もない。いきなり気配を現したのだから。

「なんでそこにはいんだよーー！」

「ナンはそう思つたが、平次は気配を隠してゐる気持ちはなかつたらしく

「せっかからおつたやないか！！」

と言った。コナンも自分の寝不足のせいで、感覚が鈍ってるんだろうと思いつい、それ以上追求しなかった。その後、コナンは聞いた。

「お前、またなんかやらかしたのか？」

コナンはそういうて平次を睨み付けた。  
平次は首を横に振つて答えた。

「ちやうちやう！－俺がちよつと普段どちがつとつたからつて“怪しい”言つて追いかけて來たんや。後姉ちゃんの様子もおかしいつて氣づいたらしいで」

「すげえな。電話だけで氣づくものなのかなよ。それに、服部を追いかけてつてのもす”いな」

コナンはただ感心するばかりだった。

その後へ平次は話を切り出した。

「それで、俺は何を手伝つたらええんや？」

「お前マジで手伝つ気だつたのか？」

「当たり前やないか。親友の一大事やつちゅーのにー。」

平次は強い意思を表した表情を、コナンは少し当惑気味な表情をしていた。

「やめとけ服部。」れをやつてしまつたらお前は死んじまつかもしれないんだ！俺は自分の責任だからいいけど、お前まで身をはる必要はねえよ」

コナンはやつこつて平次をあきらめさせようとした。  
しかし言いつことを簡単には聞いてくれなかつた。

「何言つてさねん！お前がもし俺の立場だつたらどうある？行かへんのか？」

「それは・・・」

コナンは返事に口惑つていた。その隙を見計らつたかのように平次は言つた。

「だから俺も手伝つわ……任せとき……」

「そんなわけにいくかよ……」

「のまま、夜まで2人は対立し続けていた。

file12 : 讓れない気持ち（後書き）

ここ最近、ハロウィンのやつばかり書いてて、こっち投稿してませんでしたね・・・

今後は配分を考えてやりたいと思います^ ^

今回からしばらくは4人の（主に新一＆平次）で書くつもりです。とりあえず後2作はストック作ってあるのでそれは変更はないと思います！！

駄作ですがよかつたら次も読んでくださいーーー！

朝から家でも、でかけている時でもこの話ばかりしていたら、ついに10時間が経ってしまった。それでもまだこの話ばかりしていた。

「だーかーり、お前が手伝わせてくれたら俺やつてこんなしつこい言わへんわ！！」

「お前がおとなしく家に居つちゃーーの話はすぐおわるんだよーーだいたい彼女だつて居て欲しいだろーよ

服部は首をかしげた。

「“彼女”って誰や？..」

「はあ？ 和葉ちゃんのことだよ

コナンは苛立たしそうに言った。

「和葉のことかー。彼女ってイメージやないから気がつかんかったわこんな今関係のない無駄話でまた時間を食つたらかなわないと思いつ、コナンは一つの案を提案した。

「じゃあ、実際にその和葉ちゃんに決めてもうおつか

平次はその提案をしたことに驚いた。  
コナンはクールなので自分に少しでも不利な条件は言わないと思つたからだ。

だからホンネがこぼれた。

「ホンマに聞くんか？」

しかしそういって数十秒後、何か思いついたのか結論を出した。

「ええやろ。じゃあ2人で聞きに行こや。けど、その代わり姉ちゃんにも聞くで！！」

コナンと平次はお互い見つめ合って笑みを交わした。その後、下に下りていった。

真っ先に聞いたのはコナンだった。もちろん聞く相手は和葉だった。

「ねーえ、和葉姉ちゃん」

「なんなん？ コナン君」

和葉の口調は小学生に対する口調だった。蘭は和葉に正体をばらしていないと知つてほつとすると同時に、蘭に感謝するばかりだった。そこから2人にに対する尋問（？）が始まった。

file13・相談（後書き）

11話田とうとう投稿しました！

ストックあれから作つてないんで減つていってしまつてなんか悲しいです・・・

最近続きが思い浮かばなくつて・・・  
特に快斗と青子をどう出すかとか・・・  
思いつき次第書きます！！

ミスばかりですが、良かつたら続きも読んでください！

「ナンは和葉に対する最初の質問をした。

「もし、平次兄ちゃんが危険なことをしようとしてて、和葉姉ちゃんがそれを知つてたらどうする?」

そんな小学生離れした質問にも、和葉は丁寧に答えてくれた。

「やうやなあー、私としてはめつけ止めたくなるやうなあ。平次が居ない生活なんて今までなかつたんやし」

「ナンは一瞬だけ勝ち誇つたよつな顔をした。しかし次の話には続きがあつた。

「けども、ナン君、うちは平次がどうしてもいかなあかんつて言つたらそのときは笑顔で送り出すと思つわ」

「ナンは心底意外だつた。まさかそんな返事が来るのは思わなかつたからだ。

「ナンは続きを聞かずにはいられず、つい、どうしてか聞いた。

和葉は間をおいたあとゆっくりと話し始めた。

「あのな、もしナン君が自分の大事なことをしようと思つるとき、他人に止められるなんて理不尽やて思うやろ?それと一緒にや。結局、他人のことを自分が止めたら迷惑やしその人にしか決められんのや、分かつた?」

「でも、それが“死”に関わってたら?」

すでにコナンの聞いていることは小学生ではないと思つ域まで達していた。

しかしそれに気づいているのかないのか、そのことは気にせず話してくれた。

「それでもうちは送り出すわ。笑つてあげてな。さつきも言つたけどうちに平次を止める権限は無いんや。死んででもいかなあかんつてことはめっちゃ大事なことや。だったら行かせてあげんと一生後悔するかもしれんし・・・」

「そつか

コナンはそれしか言わなかつたが、和葉の謙虚さと考えの深さにはただすごいと思うばかりであつた。そのあと2人から一緒に遊んであげようと言われたが、平次兄ちゃんと遊ぶと言つて断つた。それを見て蘭と和葉は、

「あの2人、兄弟みたいに仲ええなあ」

「そだね」

とつぶやいていた。

## file14・和葉のキモチ（後書き）

やっと1~3話を投稿することができました。

私は一番のお気に入りです!!

和葉の平次に対する純粋なキモチが好きです

シリアルなものを書くのが苦手なのでこんなのが書けませんが、  
楽しんでもらえたら嬉しいな

次は蘭です!! 和葉との違いを見てください!!

コナンは話を終えたあと、すぐに3階へ戻ってきた。そのとき平次に話しかけようとしたが、待っていたはずの平次が、少し汗をかき、ハアハア言いながら座っていた。

「お前、ここで待ってるんじゃなかつたのかよ」

服部は少し黙つていたが、やがてぼそぼそとつぶやいた。

「俺も和葉の答えが知りたくなつたんや」

平次は顔を赤らめていた。コナンはそんな平次に一つ聞いた。

「お前が和葉ちゃんのことが好きなのはよく分かつた。だから最初からなんていふか見当が付いてたんだろ」「

コナンの口つきは鋭かつた。普段能天気な平次が萎縮するほどだつた。

しかし萎縮している割にはほつさりと答えた。

「確かに予想はついた。けど、俺が和葉が好きだからつちゅ一のは間違つとる。それにあそこまで良う言うてくれるとは思つとらんかったなあ」

「ええ！..」

コナンは驚いた。平次はつくり推理でこれまでのことを予想してたと思っていたからだ。そんな心中に気づいたのか平次は話し始め

た。

「やつややつや。これは和葉と長へったからやつただけのことやからな」「みな

「やつか。お前ら入ってます」こな

口ナンは素直に感動した。平次は意外そうに答えた。

「やつか？俺は正体を言つても信頼しないやつのほうがすうじと思つてゐるけどな」

そこままで言つて少しの沈黙があった。その後平次が沈黙を破つた。

「じゃ、次は姉ちゃんに聞いてくるわ」

「おひー、じゃ、俺はいいやで待つてゐるぜ」

そいつつて2人で話した後、蘭に聞きに行つた。

## file15・経過（後書き）

初！ケータイ投稿です

今回は話のつなぎとしてこれを入れました！急いで作ったので出来  
は分かりませんが、話的にはおかしく無いと思います！  
では、また（^\_^）ノ

平次は降りてきた。ちょっとビックリタイミングで蘭が声をかけてきた。

「あら、服部君じゃない。どうしたの？」

平次には会話の流れのなかで聞くといつ高等なテクニックが使えた  
かつたため、単刀直入で聞いた。

「なあ、姉ちゃん、もし工藤がいなくなつてしまもたらどうする？ い  
までも居らへんかつたかもしけんけど、今言つてるのは一生つて  
話や」

蘭は少し戸惑つた。そのことについては今まで散々悩んできたから  
だ。しかし自分なりの答えに余り自信が持てなかつたからだ。蘭は  
和葉が居ないのを確認して言つた。

「和葉ちゃんが聞いたら笑うかもしれないけど、私は新一がいなく  
なつたら耐えられないと思つ。あの時 そうトロピカルランドで  
新一がいなくなつてから、私は悩んだの。あそこで手を離さなけれ  
ばつて。和葉ちゃんみたいに強かつたなら良かつたなつてさつき思  
つた」

そこまでいつて、蘭はお茶を飲んで一息ついた。平次も釣られてテ  
ーブルの上にあつたお茶を入れて飲んだ。

そのときその動作に気をとられて2人とも気づかなかつた。背後の  
人影に・・・

そして、平次が第二の質問をした。

質問といつよりは、やつきの話に疑問をもつたといつ感じだつた。

「でも耐えられたんやないんか？ 実際工藤はしばらく居らんかったんやし」

蘭は少し微笑んで答えた。

「あの時だつて最初はパニックだつたわ。けどじばらく過ごすうちになんとなく新一とコナン君が似てるなつて思つて・・・それから落ち着いたわ。その後、もっと過ごしていくと新一とコナン君は同じ人だつて思つたの。証拠はないけどなんとなくね。もしかしたら幼馴染だつたから気づけたのかもしれない。だから、私は耐えられたのよ」

平次は和葉と全く考への違う蘭に驚いていた。2人の話両方に納得している自分が少し可笑しかつた。

そしてその後、一つだけ聞いた。

「じゃあ、もしなんか言つた後居なくなつてしまたらどうする？」

ここまで言つて平次は後悔した。こんなことを言つたらまるで今から危険なことをしにいくと言つてるようなものだからだ。しかし蘭はそれに気づいているのかいないのかそのまま、すぐに答えた。

「耐えられるかどうかはわからない。でも待つわ。それでダメだったら私はもう限界かもしれない。けど今までこんなことがあって少しあつことを覚えた気がするから」

そこまで言つて蘭は平次に向かつて照れ笑いを浮かべた。そしてそ

のまま立つた。つられて平次も席を立つとしたそのと並んで聞こえた。

「蘭ちゃん、ええ考えやん！ウチは笑つたりせえへんで……」

## file16・蘭のキモチ（後書き）

唐突ですが、次で第1章は終了いたします。

新しく違う小説として書くのではなくて、この中の区切りみたいなものでそんなに気にしなくてかまいません。

前にも言ったとおり蘭と和葉の考え方の違いを見てもらえば嬉しいです！  
でわ（＾＾／”

気が付いて後ろを見ると、和葉がいた。

「和葉ちゃん、何でここに？」

蘭は驚きが隠せない様子だった。同様に平次も驚いていた。和葉は蘭の質問の返事をした。

「さつきつけ、蘭ちゃんと一緒にコンビに行く予定やつたやんか。それを断つて一人で出かけるところまでは良かったんやけど、大丈夫と思つたら全然分からんかつてー。しゃーないから帰つて来たんや。そしたらな、平次と蘭ちゃんが2人で深刻そうな顔してたから気になつてしまつて……」

和葉は照れくわざりにそういった。

「じめんねー。やっぱ付いていけばよかつたね」

「ええつて。うちの買い物なんやし」

そう和葉が行つた後蘭は和葉を近くに引つ張つた。

「もしかして、私と服部君が付き合つとか話してるとと思つた?」

和葉はすぐに言い返した。

「思つてへんよ!…だつて、うちは平次のお姉さん役やからそういうのは知つとかなあかんやん!…」

せつめ言つたが、和葉の顔は真つ赤だつた。蘭はそんな和葉を見て  
ちよつとからかった。

「顔に出しむわよつ。和葉わやんやつは可愛こー。」

そうこつて和葉を抱きしめた。

「ちよつと蘭わやんつーー。」

和葉はちよつと困惑つていた。その後、じぱりくせつわの話題で  
盛り上がつていたが、和葉はふと一言漏らした。

「でも、せつきの平次の質問、『ナン君と回じやつたね？しかもな  
んかりアルに聞こえたことあらぐん？』

そこまで聞くと蘭は急いで、平次を和葉から離して問い詰めた。

「ねえ、服部君、もしかしてあなたたちなんかキケンなことあるつ  
もつじやない？」

「ええつーーそんな」とあるはず無いやないか

平次はそう切り返したが、つむたえよつから見て、それは嘘だと分  
かつた。

「つむたえてるじゃない！ やつはキケンなことするのね！ もし本当に  
あるのなら和葉わやんにすべて話したほつがいいわ

蘭がそこまで言つたとき、真下から声が聞こえた。

「それは止めておいたほうがいい」

その声の主はコナンだった。

「どうしてよ……和葉ちゃんが何も知らなかつたら、服部君のこと  
でこうこう悩むことになるわ……」

そこまで言つたあとつづいた。蘭は自分と和葉を重ね合させて考  
えてくるようだつた。それを感じて、コナンは胸が痛くなつた。そ  
んなコナンの気持ちを察して平次が言つた。

「姉ちゃん、もし俺が言つても和葉は悩むで？それに、姉ちゃんが  
言つて欲しかつたつちゅー気持ちは分かるけど、知ることによつて  
命のキケンにさいされるんや。それでも工藤は言つた方がええて思  
うたから、姉ちゃんに言つたんや」

「でもひ……」

「時がきたらいざれ話さなあかんのや。それやつたらキケンになら  
へん方を選んだほうが賢明やろ？」

それを聞いて、蘭はうなずいた。平次はすべて本音を言つた。だか  
らこそ、それを聞いて納得してくれた事が嬉しかつた。

コナンはそこまで聞いて、言つた。

「俺が言いたかったこともそんな感じだ。だからじばりくは言つた  
よ」

「わかつた。時が来るまでは言わない

そうして3人は和葉の元に戻った。  
和葉は何を話してたのか聞いてきたがコナンを使って何とかごまか  
せた。

## file17・彼らの心境（後書き）

これで1章は終わりとなります！！

それでは2章をお楽しみください

2章ではやつと快斗＆青子が出てきます。

少年探偵団etc…もどんどん出して行け！と思っています！

今回のサブタイトル思いつかなかつたのでこれにしてみましたが、なんかもつといいのを思いついた方がいらっしゃいましたら教えてください！

ジンとウォッカは仕事で東京と少し離れた大阪へ行っていた。  
その日の天気は快晴で、午後から雪や雨が降ると予報されていた。  
その予報通り午後からは雪が降つて來た。

「兄貴、雪ですか？」

「ああ」

ジンはそれだけしか言わず、ただ無意識に運転していた。  
その後、ジンは珍しくタバコを車道に落としてしまった。  
そんな普段の様子と違うジンを見て、ウォッカが声をかけてきた。

「兄貴、どうかしたんですかい？」

ジンは少し黙つていたがやがて口を開いた。

「ああ、昔のことと思ひ出してな

「どんな話なんですかい？」

ウォッカはジンにさらに聞いた。

しかしジンはそのまま沈黙して答えてくれなかつた。  
ウォッカはもつと聞きたそうだったが、状況を察し、これ以上聞かなかつた。

その代わりに違う話を持ち掛けた。

「例のプロジェクトはどうなるんですかい？」

ジンは珍しく丁寧に教えてくれた。

「例のプロジェクトのことか。安心しろ。少しでもスパイの疑いがあるやつには、たいした仕儀とはさせないつもりだ。情報も今回は必要最低限しか流してないからな」

そこまで言つてウォッカはジンをたたえた。

「さすが冗談ですぜー。ここまで考へてるなんてー！」

ジンはその言葉を訂正した。

「これを考えたのはあの方だ。まあ、俺も少しほは考へたがな」

「これで奴らを始末する」とが出来ますぜ

ウォッカのその言葉を聞いて鼻で笑い、独り言を呟いた。

「フン・・・工藤新一・・・か。楽しみに待つてるぜ」

2人を乗せた車　ポルシェ356Aは順調に大阪まで進んで行つた。

## file18・内部作戦部組織（後書き）

ついに第一章作成しました！！

・・・って変にテンション高いですねッ（汗）

2章は1章と違つて気持ちだけじゃなくて、内容もどんどん入れていこうと思つています！

今後もぜひ読んでください！

p.v20.000突破しました！！

次の日、とうとう休日も終わり、蘭は帝丹高校、コナンは帝丹小へ行かなければならなかつた。

「『めんねー。せつかく来てもらつてのに』2人に留守番させちやつて。お父さんもいないから自由にして。ここに入つてお金は好きにしていいからね」

蘭はせつかくきてもらつた平次と和葉に申し訳なさを感じていた。しかし、逆に和葉は困つてしまつた。

「そんな、蘭ちゃんええつて。元々うちのせいなんやから。じゃあ、また後でな。いてらっしゃい！」

そうやつて和葉は蘭を見送つた後蘭の部屋へいった。コナンは今日は蘭のあとに登校する予定だつたので、部屋には平次とコナンだけが残つた。  
まだ、歩美たち少年探偵団は来てなかつたので、しばらく2人で話していた。

「工藤が小学校行くなんてなあ。みんなが知つたら笑えるで……『東の高校生探偵が小学校へ登校したのか！！』みたいな感じで冷やかされるんぢやうか？」

平次はコナンが小学校へ登校するのを見るのは初めてだつた。今のコナンの状況を知つている平次にとつてその光景を見ることが面白くて仕方がなかつた。

そんな平次を見て、コナンはいらだつてきた。

「俺だつて好きでこんな姿になつてるわけじゃねえんだ！…笑うな  
！」

その気持ちをあらわすかのよつて、「コナンから殺氣が漂つっていた。  
平次はそんなコナンを見て一歩後ずさつた。  
そんな風に話していくと下から声が聞こえてきた。

「コナン君…一緒に学校いこ…」

その声は歩美の声だつた。続けて、他の声も聞こえてきた。

「コナン君、早くしないと学校遅刻しちゃいますよー。」

「おっせえなあ。コナン早く降りこよー。」

探偵団のみんなは次々にコナンを呼んだ。コナンはこいつものよつとの  
よつてに対応し、支度をしていた。

「お前つて、意外と慕われとつたんやな」

そんな慕われているよつなるを見て平次はただただ感心してい  
た。

「コナンはそんな平次に当たり前だ、と言つた後、平次だけに聞こえ  
る声で伝えた。

「もしかしたら、もう俺らの居場所がばれてるかも知んねえ。お前  
はしつかり和葉ちゃんを守つてやれよ」

そこまで伝えた後、コナンはそのまま走つて探偵団のよつてまでい

つてしまつた。

平次は部屋に一人残され、

「分かつとる。和葉は俺が守つとくから、お前は蘭ちゃんをしつかり守つてやれや」

と一人つぶやいていた。

## 第一章本編突入！！

これは、題名通りの内容なハズ！…！です！

登校前の様子が描かれています！

それと今週はテストのため、ストックは投稿しますが、新しくは書けません（^\_^）

投稿頻度も金曜までは良くないと思います。  
その後は結構投稿できると思いますけどね

それでは次回まで

場所は帝丹小までの通学路——ちょっと雪が積もると景色がきれいな米化公園のあたりだった。

歩くときはいつものように歩美、元太、光彦が前で、コナン、哀が後ろだった。

前の3人は明日ある、仮面ヤイバーの特番の話をしていた。

「歩美、今日のスペシャル楽しみ！」

「歩美ちゃんもですか！ボクも楽しみです！なんていつたって、今回は仮面ヤイバーの過去が語られるんですから」

光彦も歩美の意見に賛成した。元太も話に加わった。

「ああ、今回は仮面ヤイバーの彼女が出るんだろ？どんなのなのかな気になるよなあ」

こんなに盛り上がっている3人とは反対に、後ろの2人は組織の話をしていた。

コナンは最近になつてずっと悩んでいることを哀に相談した。

「なあ、灰原。お前は大事な人を守れる自信があるか？」

哀はそれを聞いてなぜか心がズキつとした。なぜだかは分からなかつた。しかし、それを聞いて、哀はなぜか悲しくなつたのだ。そうやって自分の中で考えていると、コナンが再び声をかけてきた。

「聞いてんのか？」

「ついわれて、哀は平静を取り戻して、答えた。

「私には無理だわ。だつて私には大事な人がいないもの」

そこまで言って、哀は再び心が揺れた。なぜならさつきの台詞に違和感を感じたからだ。

しかし、今の哀には、それがなんだか分からなかつた。

コナンは哀のそんな異変に気づかなかつた。

それどころかその話に納得してしまつた。

「そつか。俺ももつと割り切つたほうがいいかもしんねえな」

それだけ言つてこの話を打ち切り、今度は組織について話し始めた。哀は結局その心のもやの正体をつかむことが出来ず、この話をしたときのことを見失してしまつた。しかし、哀の心の中のもやは消えなかつた。

2人は自分のことに気をとられすぎて気づかなかつた。  
自分たちの背後にいる怪しい人影に・・・

## file20・登校中の様子（後書き）

「ナン君と哀ちゃん中心で2～3話続きます！」

それで平次と和葉を少し入れて、その次の話（つて言つても関連する話です）が続きます。

そつからあとは考え中です  
大体は決めましたけどね

あとfile4・5はサブタイトル変更をせいでいただきました！

ではでは(\*^\_^\*)ノ

2人はそれぞれに複雑な気持ちで学校に着いた。

ふと前を見ると歩美たちと距離が離れていた。追い付こうと思つて走り出したその時、予想もしていなかつた事件が起こつた。

「キヤー！！」

歩美がそう叫んだ。

そう――その時前では歩美は包丁を突き付けられていたのだ。生徒たちはグラウンドの上で身動きが出来ないようだつた。

そこまでは普通の反応だつた。しかし決定的に違うのはコナンの反応だつた。

コナンが誘拐犯に手を出さなかつたのだ。  
なぜなら、その時歩美を誘拐しようとしていた人は、全身黒いスースで身を固めた男だつたからだ。

その上、バックアップしている仲間が何人かいることも分かつた。  
コナンと哀は顔を見合させた。  
助けるべきか迷つていたからだ。

そうなやんでいる間に、歩美はいなくなつていた。――いや、誘拐犯とその仲間が車に連れていつていた。

「歩美！！」

「歩美ちゃん！！」

元太と光彦は叫んで、歩美を見ていた。

歩美の行動を見るまでは・・・

コナンを初めとする少年探偵団はただ呆然と立ち尽くしていた。帝丹小の子供達はその場で泣いていたり、パニック起こして家の方まで走つていつたりと様々だった。

校庭には生徒しかいなかつたので、コナンが担任である小林先生に報告に行こうとしていたその時、思わぬところから声がした。

「コナン君、ちょっと来て下さい！」

光彦の声だった。

有無を言わせない言い方だったので、すぐにコナンは駆け付けた。コナンがやつて來たとき、2人は小さい声で話していた。

「じゃあ、元太君はこれちゃんと聞いといて下さい！」

光彦は元太にそういつた。コナンはなんの事が分からなかつたが、丁寧に今までの事を話してくれた。

「実はですね・・・歩美ちゃんが誘拐される前、犯人と僕らがすれ違つたの覚えてます？」

「ああ。犯人はなぜかあそこを通つて行つたよな

光彦はその答えを聞いて、空咳を一つしてから次に進めた。

「その時にですね・・・歩美ちゃんは探偵バッジを指差したんですね。

奴らに見えないようになつと・・・それで急いでスイッチを付けました。今情報を探している所です」

コナンは感心していた。光彦が小学1年生にして、冷静さと鋭い観察力を持ち、チームワークを生かすことが出来、指示を的確に行つ事ができていたからだ。

光彦は冷静さと観察力と命令力は劣るもの、チームワーク能力だけはコナンをはるかに越えていた。

それは凄いことだと思っていると、後からやつてきた哀が光彦に話しかけた。

「凄いわ。円谷君、冷静に行動出来てて。本当の探偵みたいよ」

哀にそう褒められ、光彦は嬉しそうだった。だがすぐに気持ちを切り替えたようで、バッジに集中していた。

コナンは少し考えた後、元太に言った。

「おい、元太。小林先生に今までの事言いに行つてくれねえか?」

元太は歩美の様子が気になるらしく、露骨に嫌そうな顔になつた。

「帝丹小のみんなは、今の状況に戸惑つてる。今冷静なのは俺らだけだ。たがら代表してお前に行つて欲しいんだ」

コナンはそう言つて元太をなだめた。

元太はそれで納得したらしく、走つて職員室へ行つた。

## file21・帝丹小での誘拐（後書き）

今回の話はさておきメメントはあつませんねー

しごと書いながら次回で帝丹小編は終わらって事ぐらいですーー！

ではまた（^\_^）ノ

コナンは元太が行つたのを見た後、光彦に聞きとれないほどの声で哀に話しかけた。

「これは組織の犯行だ。」

コナンは断言した。そう断言したことには哀は驚いた。

「なんで？確かに黒いスーツを着てたし、集団で行動はしてたわ。でも組織があんなに目立つ行動をするはずないわ」

哀はそう反論した。そう言つたのも当然だ。今まで人前で殺人をしない組織がいきなり学校に現れたのだから・・・  
コナンはそう考えている哀に言い聞かせた。

「お前は気配を感じなかつたのか？」

「ええ、全く。いたら気づくはずだもの」

哀はそう言つた。コナンはそれを聞いて笑つた。

「なにがおかしいの？」

「いや。それで確証が持てたからつい、な

「コナンはそこで空咳したあと順序よく説明はじめた。

「まず、組織だと分かる理由だけど・・・歩美ちゃんを連れ去つた

奴らの顔を見たか？」

コナンは質問した。

「ええ、でも誰も知らなかつたわ」

コナンは続けてもう一つ質問した。

「その時に田が本堂瑛祐とそつくりな奴が居ただろ？」

哀は一生懸命思い出していた。

「・・・・・いたわ。一番危険そつだつた奴ね。・・・あつ、もしかして！」

コナンはその返事を待つて居たかのように笑つた。そして、言った。

「そう。あれは瑛祐の姉さんだ。テレビに出てた時は水無怜奈つて言われてた」

「彼女はCIAだったのね。スパイつてところかしら」

「察しがいいな。じゃあ2つ田にお前が気が付かなかつた理由なんだけど・・・」

ここで、コナンは哀のほうから光彦のほうに向いた。  
そして、指示を出した。

「それは俺が聞いとくから、お前は元太の様子を見ててくれ。遅すぎるからな」

光彦は元太のときと同様に顔をしかめた。しかし予想より早く返事が来た。

「分かりました。行つてきます」

そして職員室に向かつていった。  
それを見送つた後、コナンは話し始めようとした。しかし、それを哀がさえぎつた。

「円谷君を行かせたのは正解ね」

コナンはそれを聞いて驚いた。まさか質問をしている哀からそんな言葉を聞くとは思わなかつたからだ。

「お前、大体理由が分かんのか？」

哀は答えた。

「さつきのはあまり分からなかつたけど、今回は分かるわ。円谷君を行かせた理由もね。むしろ私のほうが詳しいと思うわ」

哀は一息つくと滑らかに話し始めた。

「まず今回の話なんだけど———氣配を感じなかつたのは使い捨てのメンバーだつたからでしょ。雇つたら働かせて最後に殺す人材の。行かせたのはもし聞こえてたとき私がメンバーだと気づかれる恐れがあるから———あと、あれ以上聞かせないためね。でも話してる間はバッジの内容聞いてないんじゃない？」

「ああ、おそらくそうだ。あと、内容はちゅんと最初から録音してあるから安心しろ」

そこまで話して一段落着くと、2人は光彦と元太の帰りをその場で待っていた。

さすがのコナンも気が付かなかつた――

同時刻の誘拐に――

file22・誘拐後・・・（後書き）

この話異常に長いですね（汗）

けど、とりあえず区切りが付きました。

次はやつと快斗（怪盗キッド）と青子が出でますー！

この話は小学校のほりよつ長くなるかも・・・です。

ではまた

この辺の//スで背景が黒となっていました。よって修正してあります。

平次はコナンを見送った後、なにもすることが無かったので、和葉の所へ行つた。

和葉はドアを開いた瞬間、持っていた紙のよつなものを隠した。平次はそれに敏感に気付いたようだつた。

「なに見てんねん？俺にも見せーや」

そう言つて手を伸ばしてきた。

和葉はそれを決して手から離さなかつた。

「そんなんに見せたくないんか？・・・もしかして好きな奴の写真とかやないか？」

和葉は否定した。しかし顔は赤く染まつていた。

「図星なんやな？ちょっと見せてみい！」

平次は和葉の態度にいらついていた。好きな人がいること、またその写真を大事そうにぎりしめている事がそうさせていた。ただ、本人にはいらついている理由が理解出来ず、いらつきだけがどんどん溜まつていつた。

平次はその相手を探して、殴り込みに行こうと意気込んでいた。和葉の方は平次が奪いとれないようにすることに必死で、他の事を考える余裕は無かつた。

「和葉！後ろ！！」

和葉はそう言われて後ろを向いた。

その僅かな一瞬で、平次はそれを奪い取った。

「あつ・・・」

和葉は声が出ないようだった。その写真を見た平次も同様だった。

「和葉、お前・・・」

しばらく沈黙が続いた。2人はお互い見つめ合っていたが、すぐ和葉の方が目を逸らせた。

「平次なんでもう知らへん！！」

そう行つて出ていってしまった。すぐに平次は後を追つたが、見つからなかつた。

この日から2人は今までのようにはいかなくなつていた。

file23・留守番にて、意外な事実（後書き）

快斗＆青子の予定でしたが平次＆和葉を入れる」としました！  
いつも予告と違つて「ごめんなさい」（Ｔ＿Ｔ）

次こそは快斗たちだしますからね！！

ではまた

その日、快斗と青子は帝丹高校へ向かって歩いていた。

「かつたりいなあ。何で俺がいかなきやなんねえんだよ」

「全員参加でしょー！忘れたの？」

2人はいつものように学校へ行っていた。違うところは目的地が違うところだ。

今日は学校交流会。だからいつもとは違う道を通りていた。

「うーんて案外迷いやさしいね」

「ああ・・・つて青子、迷ったのか？」

しばらく沈黙が続いた。

「うん・・・実はね」

「おーおー、青子裏道知つてるつて言つてたじやねーか！」

「そんな事いつてないわよー！」

快斗は青子の話を聞きながら、時計を見たりして考えていた。

「もうあんまり時間がねえ。ここにいる子に聞くが」

快斗は怪盗キッドの口論にして、その子に近づいていった。

「お嬢さん、帝丹高校ですよね？私たちに道を教えてくれませんか？」

その子は驚いていた。無理もない。いきなり同年代の子に敬語で話しかけられたのだから。しかしその子はすぐに気を取り直し返事してくれた。ケータイを触っていたので前を見ていなかつたが……。その子が発した言葉に快斗は驚くことになる。

「ああ、今日は学校交流会だつたわね。いいわ、一緒に行きましょ。でももう少し待ってくれる？連れがいるから……つて新一君？」

「えつ？！」

快斗は驚いた。まさか新一と間違われるなんて思わなかつたからだ。その子は続けざまに話した。

「新一くん！どこ行つてたのよ……まあいいわ。もうすぐ蘭が来るわ。私相手にそんな他人相手見たいに話さなくて良いのに。そんなことしなくてもわかるわよー！」

快斗は急いで否定した。

「俺、工藤新一じゃありませんよー！」

「えつ……うそよーこんなに似てる人なんているわけないもの」

「本当ですってば。なあ、青子」

返事の代わりに青子はかばんで快斗の頭をたたいた。

「青子、何すんだよー！」

「快斗しゃべり方おかしい！…青子にそんなしゃべり方しないじゃん」

「青子にはそんなしゃべり方は似合わねーよ」

そのときその女の子には始めて青子の顔が見えた。  
その子は話しかけられたときよりびっくりしていた。  
その後、その子は唐突に叫んだ。

「蘭ー？」

「「え？？」」

青子と快斗は同時にびっくりした。まさかいきなり名前を…しかも違う名前で呼ばれるとは思つても見ていないからだ。

逆にその反応にそのままのまづがびっくりした。

「あれ？ 蘭じゃないの？」

青子はすぐ口に答えた。

「私、中森青子と言います」

その後すぐ快斗をつかんで言つた。

「これが黒羽快斗。新一君…でしたつけ。その子ではないです

よ。あなたは？」

その子は納得したようで、さつきと顔が違っていた。しゃべり方も優しくなっていた。

「私は、鈴木園子。よろしくね。」

その後3人は蘭が来るのを待っていた。

## file24・快斗×青子～園子の驚き（後書き）

待ちに待つた快斗君の登場です！  
(私だけかな？)

快斗出したくてたまらなかつたんですね～！  
やつと出せました！！  
出来たら白馬君も出したいです

昨日やつとテスト終わりました！

古典がボロボロ・・・どうしましょ（泣）

12月はテストないので更新いつぱい出来ると思いますー多分ですがね・・・

感想&評価待つてます

ユニーク1万突破しました ありがとうございますー。

蘭は園子の家へ行けなかつた。とこりより、行く勇気がなかつた。なぜならばそこに新一と違う女の子が仲よさそとに園子と話していたのを見たからだ。

しかし、その割には、ショックを感じなかつた。ただ、その風景に違和感を感じていたのだ。蘭は勇気を振り絞つていくことにした。ゆっくり歩いていると、園子が声をかけてきた。

「あ、蘭？今日はこの一人と一緒によ！新一君と蘭みたいでしょ」

蘭は顔をあげてみた。そうしたら驚きの光景が目に入った。

「新一？私？」

蘭はしばらく戸惑つていた。

だが、雰囲気や長年一緒にいたせいか別人だとこいつことに気づいたようで、快斗に質問した。

「新一じゃ無いですよね？」

快斗はそれを聞いてどこか嬉しそうだつた。

「俺、黒羽快斗って言つんだ。分かつてくれたの初めてだよ！君は？」

快斗は聞いてみた。聞かなくても知つてはいるのだが・・・それを知らない蘭は、挨拶した。

「私、毛利蘭つて言います。隣の子はなんて言つんですか？」

蘭は快斗に聞いたつもりだつたが青子が答えた。

「私はね、中森青子つて言います！今日交流会で一緒に！」

その後青子はいきなり大きな声を出して提案した。

「そうだ！！一緒に回りつけ・せつかく知り合つたんだからさー！」

園子もその意見に賛成した。

「いいわね！一緒に回りつけ。蘭もいいよね？」

「あ・・・うん。一緒に行こう！」

蘭はたじろぎながらも返事をした。

蘭は本当はまわりたくなかったのだ。決して2人と居るのが嫌なわけじゃない。むしろテンポのよさが好きだった。しかし嫌だつたのだ。2人を見て、蘭は心が痛んだ。

（何であの2人は私と新一と似てるの？こんなに似てたら快斗君と青子ちゃんを私と新一に重ね合わせちゃうのに・・・今はそつとしておいて欲しかった・・・）

そう――2人は蘭と新一に似すぎていたのだ。それが容姿だけなら良かつた。しかし性格までも似ていたのだ。それは新一がいない・・いや、新一として本人がいないという悩みを持つた蘭の心を痛ませるのには十分だつた。

園子はそのことに気が付いたようでなだめた。

「新一君は新一君、快斗君は快斗君よ。気にしなくていいわ」

そう言われ蘭の心は少し落ち着いた。

そんな風にして4人は登校していった。

file25・快斗×青子～蘭の驚き（後書き）

快青第2弾！！です。

これかいてて新一を思い出す蘭がちょっとかわいそうになりました。  
正体が分かってるからこそその辛さ・・・みたいな？

ぜひ評価・感想お願いします！

正門前にいる生徒にパンフレットをもらい、4人は一緒に正門を通りた。すると交流会のせいかいいつもより人が多く、グラウンドがとても混んでいた。

今日は交流会という肩書きだが、実際は文化祭のような感じで、最初の2時間だけ理数系と文系に分かれて説明会を行うが、これも高校3年生だけで、高校2年生の蘭たちには関係なかった。

「良かつたわね、高3じゃなくて。高3だつたら説明会行かなきやなんなかつたもんね」

園子は思つたまま素直に口にした。すると隣にいた快斗が同意した。

「ああ、説明会なんてかつたりいもん行けねーよな」

2人は永遠に話続けるような勢いで話し続けていた。  
そんな2人の話題を変えるため、蘭は手元のパンフレットを見ながら言った。

「みんな、最初どこに行く？」

「私、ここ行きたい！」

青子はそうじつてパンフレットの右上のほうを指していた。

そこは“魚の生態”について調べられているところで、パンフレットには珍しい魚がたくさんいると書かれていた。

快斗はそれを見て真っ先に否定した。

「じゃなとこに行けるわけねーだろー！」

蘭と園子はその反応を不思議がっていた。

「快斗君どうしたの？かわいい魚だつていつぱいいるわよ？」

蘭がそう聞いたが、快斗は聞く余裕がないようだつた。  
その時青子が手招きして蘭と園子を呼び寄せた。

「実はね、快斗魚嫌いなの。だからパニックになつてるでしょ？」

青子はそつ耳打ちした。蘭はそれを聞いて、良心が痛み、青子に反論した。

「快斗君がかわいそつよー違つといふ行きましょ」

それを聞いて青子は言つた。

「大丈夫よ。それで死ぬ訳じゃないんだからさ」

その意見に園子も同意した。

「そうね。快斗君を連れて行つたほうが面白くなるかも・・・」

「じゃあ2対1だから行く」と決定ーー！

そつ耳づりに向ひ直つて言った。

「快斗ー早く行くよーー！」

「うひせー！行かねーよアホ子！」

「うるさいわね、バ快斗！！」

そういうって始まつた喧嘩をただ2人は眺めるしかなかつた。

知らない間に喧嘩は終わつていた。どうやら青子が勝つたようだつた。快斗はこれで魚を見に行かせられることになつてしまつた。

周りの生徒はこの騒ぎに困惑つていたが、当の本人たちは大して気にする様子もなく進んでいった。

最近事件続きだったので平和な彼らを書いてみました！実はこの後  
その様子を入れるか迷つてるんですが、どちらがいいですか？  
希望を教えてください！それによつて決めますので！  
待つてます！

ついでに評価＆感想もください！

## file27・それどころじゃない！！

交流会も半分を過ぎた頃、その事件は起こつた。

4人は外にある帝丹大学の出し物を見ていた。そのとき黒いポルシェ正門前に止まつた。

「すっげー珍しいぜ、あの車。誰だろ？あれに乗つてくるの」

快斗がその車を見て興奮していると、青子がそれを止めた。

「担当の先生とかじやないの？後から見せてもらえば？」

「そうだな、後から見にいくか！」

そのときだつた。

「どけ！」

「何するんだ！！」こは交流会をする場だ！用がないなら出て行つてくれ！！

それを聞いて2人組のうちの1人は舌打ちした。

「冗貴、こいつどうしますかい。殺しますかい？」

もう一人・・・兄貴といわれた方が言った。

「ああ、サイレンサーをつけておけ」

そういうて子分——ウオッカは言った。

「お前が目的じゃねえんだよ——俺らの目的は毛利蘭だ」

「ウオッカ、余計なことを吐くな」

「はい」

その瞬間、ウオッカはその生徒を撃った。その生徒からは血がドクドクと流れてきた。

「きやーーー！」

生徒は叫んでいた。ウオッカはその生徒らに一喝した。

「お前らは黙つとけ！ そしたら殺したりはしねえよ」

そう言われ生徒たちはみんな黙つた。そして拳銃を持ったまま歩いていきある場所で止まつた。

「そう、お前だ。俺らの狙いはな」

そういうて青子をひつたくつていった。

「何すんのよアンタたちー女の子をさらうなんてー」

園子は勇敢にも2人に突つかかっていった。その瞬間園子の肩を銃弾が掠めた。

「うっ……」

「！」いつさえ差し出せば他のやつらは無事なんだ。黙つておけ

「園子……」

そう言って蘭は園子のところへかけつけた。しかし、それが蘭であるということに2人は気づかなかつた。ジンでさえも——

「俺らの目的は達した。帰るぞ」

「分かりました」

そして彼らは去ってしまった。

その後も生徒たちは恐怖におののいていた。  
3人を除いて・・・

遠くでサイレンの音が聞こえていた。

file27・それじゃござないーー（後書き）

誘拐されましたね・・・

元々はこの設定じゃなかつたんですけど・・・蘭ひやんが固なくなるのは悲しかつたので替えました！

自分勝手ですね・・・

けど蘭ばっかりより良いかも・・・と思つたり・・・

結局意見はなかつたので、抜きました！

蘭、園子、快斗が警視庁に着くと、美和子と渉が出迎えてくれた。

「蘭さん、園子さんと・・・工藤君？黒羽君じゃなかつた？」

渉は快斗を見て、頭がこんがらがつてこらへつた。セレブ風口紹介をした。

「俺、黒羽快斗です。工藤じゃないですよ」

渉は納得しづらかったが、美和子が上手くまともめてくれた。

「蘭ちゃん、園子ちゃん、快斗君、取りあえず上行きましょ。ここじゃ寒いしね」

そつとして美和子を先頭にして進んで行った。

「うん」

やつて来たところは机の数に合わせず、がらんとしていた。

「今日はばしいぶん人が少ないんですね？」

蘭が尋ねた。渉はそれを聞いてため息をついた。

「やうなんだよ。実は帝丹小でも同じ事件が起こつたらしこんだ。

しかも誘拐されたのはの・・・歩美ちゃんなんだ

「歩美ちゃんが！？」

園子と蘭はいつになく驚いていた。まさか帝丹小でーーしかも歩美ちゃんが誘拐されるなんて・・・と感じていたからだ。

「そう・・・これは同一グループの犯行の線が高いんだよ・・・」

そこまで蘭に話した時、美和子が声をかけた。

「高木君！..」

そこまで言つて渉を手招きしてきた。

「一応蘭さんたちは被害者なのー事件の情報をばらさないのー」

「は、はいっ」

そして2人は蘭たちの元へ戻つていった。

「（）めんなさいね、じゃあ、事件のことについて話してもうれるかしら？」

（）からは蘭と園子が協力して話していく。

「黒羽君も話すことはない？」

始まつてからずっと話さない快斗を疑問に思つて聞いた。

「はい・・・特には・・・」

「アリ」

美和子がその態度に疑問を持つていると、園子がこつそり美和子に耳打ちした。

「そのさらわれた子、快斗君の連れなの。雰囲気が幼馴染っぽかつたからショックが大きいのよ」

「そうだったの。じゃああまり聞かないほうが良いかもね」

その後高木が事件のまとめにかかつた。

「ようするに、黒のポルシェが止まって、中の人気が降りてきたら誘拐犯だつた。で、奴等が男の子一人を撃つて、中森青子さんを誘拐したんだね」

「はい、でも帝丹小のはづはどうなったんですか?」

「ああ、あの子達は後から来るわ。ここで待つてみ」

蘭は即答した。

「はい、あの子達のことが心配ですし・・・」

「じゃあ、ここに居て。高木君を置いておくから。私は迎えに行つてくれるわね」

そういうつて美和子は走つていった。

久しぶりの投稿です

次は平次達出します

恐らくですが・・・

明日はクラスマッチです。私のクラスは弱いので一勝目指して頑張ります！

では

和葉はさつきの事にショックを受けて、外を歩いていた。というよりは、蘭がいると思われる帝丹高校へ行つて相談をしようとしていた。

風景がどんどん変わつて行くなか、和葉は勘だけを頼りに、脇道に入つた。

その時にもう2つ先の道からちらつと、衝撃の光景が見えた。

「こ」のガキ、どうする?」

「そのまま組織に連れていきましょ。抵抗する力も無いだろうじ

「分かつた。じゃ、アタシは先に行く」

そして2人組の内の一人は行つてしまつた。

残つた方の車に入れられている子は先程誘拐された歩美だった。

(歩美ちゃんやー)のままやと連れ去られてまうー)

和葉は頭より先に体が動いていた。

合気道2段の実力で犯人に袋を当て、歩美に向かつて走つて行つた。

「大丈夫なん?」

「和葉お姉さん！」

感動の再会もつかの間、和葉は歩美を抱いて急いで逃げようとした。しかし、犯人に頭に銃を突き付けられてしまつた。

「なにやつてゐる？命なくなるわよ？早く乗りなさい。あなたもよ

和葉は精一杯反論した。

「嫌や！連れていくんなならうちだけ連れていき……」の子こんなに怖がつてるやん

犯人はふつと笑うと一言だけ言った。

「今回のプロジェクトにはこの子が必要なのよ。・・・待つて、あなた、毛利探偵のとこの子供と知り合いじゃない？」

「知り合ひやけど・・・あんたらには関係ないんやないん？」

（良かつた。瑛祐の話が役にたつたわ）

和葉にはこの時の間の意味が分からなかつた。

そのすぐ後、その人は声を細めて言った。

「あの子に伝えて！お願い！あなたは解放するから…さすがにこの子は無理だけど」

その時のその人の顔が助けを求めているように見えたので、理由もたいして聞かぬまま言つことを聞いた。

「もう時間がないわ。1回しか言わないからよく聞いて」

その人は周りを気にしながら言った。

「カラスが地上に降り立つ時、血に飢え、それゆえ荒れている。それらの数が100羽を越えると、鷹達さえも召される。高き所にある巣は廃れるも、罠は廃れず。それらを喰うには、知性と行動、冷静さが試される」

それだけ言つと、和葉を置いて去つた。歩美が気になるが、今は言うことが最優先と思い、これを早く伝えるべく、事務所まで戻つていく事にした。

## file29・急に訪れる衝撃（後書き）

今回は予告通り平次たちを書きました！

次も平次たちです！平次たち主体の話にしては結構長いです！

話は変わりますが、前言ったクラスマッチ勝てました！女子はバスクですが2位だつたんですね！

私もシートを2本入れることが出来ました  
感動です！

サッカーは最下位ですが、ソフトは2位でした。  
結構勝てて良かつたです！

雑談（つてか自分の話）ばつかでしたね（汗）  
読んでくださった方、関係ないのにどうもありがとうございます！

では、次話で（笑）

## file30・和葉を見つけた平次

和葉は走っていた。さつき襲われ、早く逃げたかったのもあるが、歩美を助けれなかつた不甲斐なさ、そして、あの犯人を信用してしまつ単純さに心が痛んだから、一刻も早く助けを求めるためだ。

(歩美ちゃん、うちのせいで捕まつたんや！どないしよう・・・あの人もいい人とは限らへんし、あれもよく分からんかつたから・・・)

今平次に相談するのは気まずいが、歩美ちゃんを連れ去つた犯人みたいにきけんな人物がうろついているので単独で行動するより2人で行動したほうがはるかに安全という判断のためだつた。

しばらくして、和葉を呼ぶ声が聞こえた。

「和葉ア！…ビ」おるんや！」

それは紛れもなく平次の声だつた。和葉はそれを見て足が止まつてしまつた。平次は和葉に気づいたようだつた。

「和葉、和葉やな？心配したんやで？勝手に居なくなるもんやから」

和葉はその言葉を聞いてその場に泣き崩れてしまつた。

「か、和葉！大丈夫か？お前無理したんとちやうやうなあ？」

和葉は声を出す代わりに首を振つた。和葉は平次に言われて少し落ち着いたようだつた。

平次は和葉が泣き止むまでずっと隣にいた。和葉が抱き着いても抵抗せず、なにも言わず、和葉の好きにさせた。

「平次、もうええ」

和葉は平次に言つた。平次は和葉を離すと、和葉に聞いた。

「何があつたんや？ 大変な事があつたんやないか？」

和葉はわざまでの事を平次に話した。

「あのな・・・歩美ちゃんが誘拐されてしまへん。うち、助けられへんかつた・・・」

平次は悩んでいる様子の和葉に一言言つた。

「泣くなんてお前らしくあらへん。いつもの和葉やつたらもつとボジティブやないか」

平次にやう言われてはつとした。和葉は言葉が詰まりながらもゆつくつと話した。

「そりやな・・・色々あつたから・・・甘えがあつたんかもしれへん・・・今後はちゃんとせーへんとな」

平次はそんな和葉を見てニカッと笑つた。

「な、平次？ あのな・・・」

「なんや?」

「ハハん、何でもない」

「なんや、和葉腹空いとんか?」

「ちやうわーー。」

結局和葉は聞かなかつた。これ以上平次に聞きたくは無かつた。

今までの関係を保ちたかったから···

file30・和葉を見つけた平次（後書き）

今回は普段と違う平次を書いてみました！

普段と違つて変わって優しい平次。

なんか良いですね・・・（つて私だけ！？）

第13作の映画「漆黒の追跡者」早く見たい！  
劇場版特報とか特に最高ですよね～！！

関係ない話がまた入りましたね・・・  
ではまた次回も見てください！

帝丹小学校で事件が起きて1時間ほどたった頃、学校に千葉がやつて來た。

「君達！大丈夫かい？」

千葉は血相を変えていた。

それを見てコナンが真っ先に駆け出した。

哀も一緒に走った。

元太達は他の子を慰めていたので、気づいてない模様だった。

「うん、僕らは・・・でも歩美ちゃんが・・・」

「やっぱり。その情報を警察も聞いたんだ。服部で言つ少年が電話してきたんだよ」

哀はそれを聞いて怪訝そうな顔をしていた。

「どうしたんですか？灰原さん」

慰め終わって駆け付けて來たばかりで息を切らしていたが、大きな声で光彦は訪ねた。

「なんでもないわ。ただ千葉刑事の表情が気になっただけよ

みんなは一斉に千葉の顔を見た。  
いつもの顔より苦しそうだった。

「千葉刑事、どうかしたんですか？」

光彦は心配そうな顔になっていた。そんな顔をされ、千葉は少し戸惑っているようだった。

「あ、ああ・・・ちょっと撃たれてね・・・」

そう言つて腕の包帯をみんなの方へ向けた。そこからは生々しく血の跡が付着していた。

「大丈夫ですか？」

真剣な表情で聞いた。千葉は笑つて返事した。

「大丈夫だよ！このぐらい！」

コナンはそれを聞いて急いで質問した。

「誰にやられたの？」

その話し方には少し焦りが読み取れた。千葉はそれを怪訝がっていた。

「あっ、ああ・・・これはね、知らない間――いや、1キロぐら  
い遠くから撃たれたんだ。後から目撃証言があつたんだよ」

(多分キャンティとコルンだ)

コナンは思った。そこまで腕のいいスナイパーは2人しかいないと思つていたからだ。

「ナンが推理の迷路に入つていったころ、千葉が話題を変えた。

「ううう。君達を迎えて来たんだよ。つい長話しちゃったね。僕はこんな腕だから由美さんに来て貰つてるから早く行こう。怒つてるかな・・・」

「学校は行かないでいいのか？」

元太は訪ねた。

「ああ。学校側には言つてあるから。今まで、警察に協力した、少年探偵団を連れて行きます、ってね」

そうして「ナン達はパトカーに乗り込んだ。

file31・お待ちかねの・・・（後書き）

最近は投稿頻度が上がりました！  
つていつても二〇日ですけど・・・

それに最近は早寝できてるところがいいですねー！  
カンペキに雑談ですが・・・

今回はちょっと戻って少年探偵団編を書きました！  
忘れてるかも知れませんが・・・

後瑛祐君はもう少ししたら出ますー！

では、またー！

4人は呼ばれるままに、由美さんの待つパトカーへ進んでいった。

「もう！結構待つたんだからね、千葉くん！」

「由美さん、ゴメン。じゃあ、君達乗ってくれるかな？」

「…………」

そうして、みんな乗り込んでいった。

パトカーはすぐ発進した。由美さんは運転しながら話し掛けってきた。

「でも、災難だつたわね。誘拐だなんて」

コナンが返事した。

「一番大変なのは歩美ちゃんさ。で、由美さん、なにか警視庁で大きな事件がほかにあつたんじゃない？」

由美は驚いて後ろを振り返ってしまった。

「え？よく分かつたわね。どうして？」

コナンは推理を話した。

「まず気になつたのは由美さんが來たこと。交通課が來るのはおかしいと思つたんだ。あと、怪我してる千葉刑事が來たこと。わざわざ怪我してゐるのに來るのはおかしいと思つて。一瞬スパイかなと思ったけど、事件の事、話してくれたから違つと推理できたんだ」

由美は感心していた。

「「ナン君凄いわね。——じゃ、ホントは言つつもりなかつたんだけど、役に立つかもしれないし、教えてあげるわ。これはホントに極秘なの。周囲にばらしたらダメよ」

「うん」

由美は分かりやすく説明し始めた。

「実はこれは同一犯なの。手口、荒さ、用意周到さからね。でも今までこんな犯罪グループを見た事がなかつたわ。これは犯人の慎重さもあるんだろ?」

そこで一瞬空気が止まつた。由美はそこで息を整えると言つた。

「警察——しかもかなり上層部の関わりがあるわね。これはかなり真実味がある情報を使つてるから、信じてもらつていわ」

パトカーは警察署前に着いてしまつた。由美は千葉に命令した。  
「千葉君、あなたは先に行つて。私はこのパトカーやろしてから行くから」

「子供達は下ろします?」

「私が連れていくわ。じゃ、後でね」

千葉はパトカーを降りると、歩いて表玄関へ行つた。

それを見届けるとパートカーは違つ道へ進んだ。

「//|パートの姉ちゃん、//ちぢやねえんじやないか？」

「ええ、ここから先は聞かれたら困るからそつしたの。それで、重要なのはここから。警察上層部って言つたけど、正確には、上層部に対して発言力がある人、なの。あと、そういう情報は警視庁に来てから流れる。で、そのスペイと思われる確率の高い人は表向きには3人いるわ——まず、白鳥君、次に松本警視、後、白馬総監よ。みんな権力があるわ」

由美は一息着くと//ラー越しにみて、いつになく真剣な表情になつた。  
そして話した。

「裏向きにはね、2人——千葉君と高木君よ

由美サン&少年探偵団編、もう少しです！

次はどうしようかなー、と考え中です。

文章がなかなか思い浮かばないんで・・・

瑛祐君はこの章（？）が終わること出せません（汗）

出来るだけ早く進めたいんですけど、書きたいことが多くて、行き

ませんね・・・

次は来週までには投稿できると思います！

途中で投稿している部分がありました。すみませんでした。

「えつ！」

みんな驚いていた。

光彦と元太はすぐに否定した。

「そんなはずありません！－あの2人に限つて……」

「そうだぜ、ミニパトの姉ちゃん。あの2人は意氣地ないからな」

由美は少し笑つて言った。

「だといいんだけど……でも高木君だけは敵じゃないといいな……」  
・

光彦は悩んでいる由美に思い切つて聞いてみた。

「どうしてですか？高木刑事も千葉刑事も友達じゃないんですか？」

由美は小さな声ながらも教えてくれた。

「高木君はね、美和子をお父さんや松田君の影から救い出してくれたから・・・私じゃ出来ないわ、でも高木君はやつてくれた。だからあまり敵に回つて欲しくないの」

由美はそのあと、高速でパトカーを運転し、警視庁の前の駐車場に綺麗に車を止めた。

「意外と上手いのね」

灰原が言った。

「一応交通課だからね。じゃ、行くわよ。降りてちょうどいい」

「「はーー」」

そう言いながら車から降りた。

「そういえば千葉君は？あれっきりだけビ」

由美はふとそう発した。

「知らないわ。お菓子でも取りに行つたんじゃないの？」

哀が皮肉を言つたときドスドスと走りながら、千葉がじつに向かってきた。その手にはお菓子は無かつた。

「あら、お菓子は持つてなかつたのね」

千葉は哀のその言葉を聞いて反論した。

「僕だつてそこまで食ひ意地張つてないわ」

そのあとすぐ由美の方に向き直つた。

「そんなことよりも、さつき佐藤さんが、由美さんに予定より遅いつて怒つてましたよ。寒そうだったし、相当怒つてたから僕に八つ当たりされたんですから！一応、怒りを鎮めるために戻つてもらい

ましたよ」

千葉は由美に事のあらましを話し、訴えた。しかしそのことは無視された。

由美は呟いていた。

「しまったわね……どうせやつは……美和子真面目だからな。  
・  
・  
・」

元太は由美を慰めた。

「まあいいじゃねえか!! 理由は適当につかよつせー。」

「やうね。元太君ありがと!」

そしてコナン達は佐藤達のいる所へ向かつて行つた。

とつとう冬休み突入しました！！

嬉しいですね、やつぱり！！宿題がなければ最高なんですが・・・  
投稿もめっちゃ遅いんでもうと早く進められるよう頑張りたいと思  
います！！

これで探偵団編は終わりです！！ちょっとネタバレなんですが次は  
組織です。しばらくします！！

また会える日まで、すこく長くなりそうです。  
それでも読んでくださいわたら嬉しいです！

では

何度もミスばかりで申し訳ありません。

サブタイトルにミスがありました。訂正いたしました。

組織に捕まつた青子と歩美は・・・

「なんで私を誘拐したの？」

歩美は聞いた。犯人は少し話すがどうか悩んでいたようだつたが口を開いた。

「あなた、もしかしてショリーではないの？」

歩美は初めて聞いたその言葉に首をかしげていた。

「・・・やつぱり。おかしいと思つてたのよ。ビーハンよつかしさ。  
まあ、向ひのせこにすれば・・・」

「お姉さん、ビーハンの？」

「ううん、なんでもない。ところであなた、外部と通信する手段あるかしら？」

歩美はワナかも知れないと迷つたが、それはそれで仕方がないと思い、探偵バッジを出した。

「これは？」

「私の友達にかけれるの。コナン君が一番かける回数が多いかな」

その人は少し笑つてそれを盗つた。

(コナン君か。好都合ね。良かつたわ、連れ去つたのがこの子で)

歩美は、

(余計なこと言つちやつた・・・あーあ)

と思つていた。

その人はそれに口元を近づけると、話し始めた。

「コナン君ね。聞いてもらえるかしら。本堂瑛海よ。私達は哀ちゃんの代わりに違う子を誘拐しちゃつたの。仕方がないからこのまま連れて行くけど、ジンに何か言われるかもしないから、その時はコナン君、お願いね。——コナン君に頼むのはちょっと変かな。それで、組織は蘭ちゃんも誘拐してるわ。気をつけて。あと——今、組織は崩壊しかけているわ。それがどうなるかは分からぬけど、アジトを変えるって事だけは知つて。もうすぐ・・・何かが起るわ。じゃないとこんな無謀な賭けには出ないはずだから。じやあ、よろしくね」

そうこつた後、探偵バッジを壊した。

「何してゐの……せつかく通信できるの……」

歩美は言つた。すると瑛海は歩美の口元手を離れて、口ひもをやいた。

「だからよ。もしよめたら、命をなくすかもよ。いつしてゐ方が安全だから。それに、コナン君ならきっと氣づいてくれるわ。ね、安心して。私が守つてあげるから」

「うん、分かった」

2人は車に揺られながら、組織のアジトへ向かっていった。

file34・拉致された歩美（後書き）

今回はすぐ書けました。

今回のは結構前から考えていたのでね  
おまけに近いんですが、組織のことも書きたかったんです。やっぱ  
組織との戦いですから

冬休みは毎日投稿頑張りたいと思います！

結構大変ですけどね（汗）

ではでは！

一方青子のほうは・・・

「兄貴、どうしますかい？」この女。アジトまで行くんですかい？」

ジンは小さく声で答えた。

「工藤新一の彼女だ。おびき寄せるおどりに使える。生かしておけ」

青子は急な展開に戸惑っていた。

（私が有名な工藤君の彼女？ありえない！！だつて会った事もない  
し）

青子はそのことを言いたいのは山々だったが、口にタオルを巻きつけられていて声が出せなかつた。

そうしている間に、ウォッカがジンに質問していた。

「工藤新一は毒薬で殺したはずじゃなかつたんですかい？」

ジンはわざとよつもわざりに不機嫌そうな顔で答えた。

「ああ、あのガキは生きている。あのデータを最後に更新したのは  
シェリーだと分かつたからな。それに、あの方が、その情報をつか  
んだらしく」

「やうなんですか。意外ですねえ。あの方が情報を提供するなんて・  
・」

青子はそれを聞いてさりげなく心配になつて來た。

（なによ……工藤君が殺されたとかされてないとか……の方つて誰？）

ジンはウォッカに最後に一言叫つた。

「あの方が出でくるなんて、かなり重要な件だからな。工藤新一が生きているかどうかで、この件が成功するかどうかが決まるのだろう。ウォッカ、無駄話はここまでだ。その女に聞かれてたら困るからな」

それから車の中は静かになつた。ジンは窓を開けて、一言吐いた。

「工藤新一、お前の居場所をさうぞと突き止めてやる。首を洗つて待つてろ」

そういうつて握つていたタバコを握り潰した。

ウォッカは怖い顔をしているジンを見て心中で後ずさつた。

この車は、アジトに向かつて進んでいく。3人を乗せて——

file35・誘拐された青子（後書き）

毎日投稿頑張るつもりの anche一です

今日は眠いけど頑張りました！

自分でこのもなんですが応援して下さる  
じゃないとめげそう・・・  
では

「ナン達、蘭達、平次達はみんな警視庁に集まっていた。

「新一——「ナン君、大丈夫だった?」

「あ、うん。でも歩美ちゃんが、誘拐されて……」

蘭は一気に顔が暗くなつた。

「あ、私達も青子ちゃんが……」

「青子ちゃんって誰?」

「ナンは初めて聞いたその人の事が分からなかつた。蘭はそれを聞き、答えてあげた。

「『』に居る快斗くんの友達よ」

「ナンは快斗の顔を見て快斗に一つ聞いた。

「僕と会つたことない?見たことある『』がするんだけど」

快斗は急いで否定した。

「いや、ねえよ。『ナン君、ちょっとといいか?』

その急な願いにちょっとびっくりしていたが了承した。

「いいよ、快斗兄ちゃん」

そして2人は部屋から出た。人気が無いところへ行くとコナンが先に切り出した。

「で、キッド、俺になんか用か？」

快斗は観念したように首を竦めた。

「やっぱバレたか。ま、仕方ないな。用件は一つだ。今田探偵事務所行くからな」

コナンは口に出して「いや言わなかつたが、はあ？とその顔が物語つていた。

快斗はそれを無視して、最後に一言だけ言った

「取りあえず言いたいことがあるんだよ。大事な事がな。警察にはスペイイが居るようだし、なあ、名探偵？」

「ああ」

コナンは名探偵と言わても否定しなかつた。それは正体はばれていると薄々感じていたからだ。そんな事を思いながらぼーっとしていると、快斗が声をかけてきた。

「じゃ、戻るか」

そうして、戻つて来ると佐藤が怖い顔をして立つていた。

「コナン君、遅いわ！もつ聞き終わっちゃったわよ

「『』めんなさいー」

「ナンは謝ると元の場所に戻つていった。すると光彦がこいつそり聞いてきた。

「「ナン君、快斗さんとなに話してたんですか？」

「あ、ああ。なんでもないわ」

「ふーん」

歩美は何か納得していないようだが、無理やり納得したようで、元太たちのところへ帰つていった。

それで、氣を抜いていると何者かに持ち上げられ、廊下に出された。

「なにやつてるんだよ！ 服部！ ！」

平次は「ナンが怒つているのに『がつく』と急いで「ナンをおろした。

「すまんすまん。わざわざつたばつかりのやつと何であんな親しげに会話してるのが気になつてなあ」

「ナンは同じことを聞こへくる平次にいわだつてきつていたが、それでも親切に答えた。

「お前は、俺の部屋にいるんだから俺のつけ分かるわ」

「分かったわ。じゃ、今日はずっと居るで……」

「勝手にじる」

そんな風に普段の会話のまま終わった。

この日は特にめまぐるしく事件があった。後は夜に怪盗キッドが来る。それをコナンは待っていた。

昨日は仕返しのX、Massを投稿していたので少しあは投稿できませんでした。

けど、毎日投稿は続いています！！  
割としんどいですけど・・・

今回の警察に裏切り者がいるってのは最近終わったドラマ“ブラッディ・マンデイ”に似せて見ました！！

では、また明日（？）

アクセス4万突破！！  
いちいち細かいです（汗）

とつとう夜になつた。

もつすでに満月が昇つた頃、そこに虹色の鳥が飛んできた。  
その鳥はあいていた窓に止まると、入ってきた。

「待たせたな」

そういうつてそれは入つてきた。

これに最も驚いていたのは平次だ。

「怪盗キッドやないか！」「藤、早う捕まえんと」

平次が慌てふためいてこのをコナンが止めようとしたとき、代わ  
つてキッドが止めた。

「まあ、落ち着け。俺はこんな格好で來たが、キッドとしてじやな  
い。」「藤君と同じ立場に居る高校生として來たんだ」

キッドが衣装を脱ぐと、平次はいろいろ言ひのをやめ、真剣に話を  
聞くことにした。

「で？何があつたんだ？」

「ナンセンスみたいに促した。キッドはやつくつと話し始めた。

「俺は黒羽快斗って言つただけど、8年前に親父を亡くしたんだ。  
そのときの犯人がパンダラって言つただよ。彼らは宝石を搜してゐる。

それで、お前が新聞に載らなくなつたとき、よく調べたんだ。そしたら田撃情報があつたよ。あの日なぞの男2人と接触したのを見たつてな。しかも黒っぽかつたらしい。だから、ちょいと念えたことだし話そうと思つてな

そこまで話すと、「ナンが聞いた。

「何で言い切れるんだ?」ユースではステージドになつたって言つてたけど

快斗はそのときのじとひについて話し始めた。

「あの時、抜け道があるはずだつたんだが、塞がれてたんだ。そのせいで死んだといわれてる。死体がないらしいけどな」

コナンはその話を聞いて考え込んだ。その間平次が話していた。

「何で、宝石を搜してんのやろ?」

そういうわけで快斗は盲点を突かれたようだつた。

「なるほどな、それも調べるか」

そういう話をしているときコナンは話しかけた。

「キッドの行動範囲から見て、東京に住んでんだろ?なんか分かったら教えてやるよ」

「ああ、あと俺、お前ら手伝ってえんだけどいいか?」

「ナンは頷いた。

「ああ、逆にお前が居たほうが良いかもしんねえしな」

そうこうたら、快斗はキッドに変身した。

「じゃ、また」

やつこいつ去つてしまつた。

「お前と回じよつなやつが居たなんてな

平次が言つたのと同時にコナンに電話がかかってきた。

「はいもじもしつ？」

「クールキッド？明日来れるかしら？夜よ。あのときの代わりの会議ね。あと瑛祐君、君に話があるんだって」

その後細かい予定を聞いた後、電話を切つた。  
平次がその後聞いてきた。

「俺も行つてええか？」

「ああ、迷惑かけんじやねえぞ」

「ナンは快斗に電話をかけようかと思つたが、結局かけるのをやめた。

「ナンは明日を待つ。組織撲滅に向けて——

file37・空から現れる鳥（後書き）

知らない間に37話も行つてましたね・・・  
時が経つのは早いなあ・・・

よくよく考えたらコナンたちの一日を私は1ヶ月ぐらいかかつて書いてますね（汗）

それに元々40話ぐらいしか書かない予定がもう40話行つちゃひつへやばいですねー；

下手したら60話越しちゃうかも（・・）；

2つに分けようか最近考えてるんですがどうでしよう？よかつたら新しい話の案と一緒に教えてくださいーいろんな方の話聞きたいので・・・

新しい話については人物を誰出して欲しいかを主に募集していますー！

では

次の日の夜――

コナン、平次はFBIの集まりに来ていた。

「ここで何を話すんだ？」

平次がじつそり聞いてきた。

「計画を立てたりするんだよ」

話していた所に瑛祐がやつってきた。

「待つてたよ、コナン君、いや、工藤君って言つた方がいいかな？」

平次は驚いたが、もう口を挟まなかつた。

コナンは言った。

「どうちども。で、なんで俺に会いたかつたんだ？」

瑛祐は待つていたと言わんばかりの顔をして、話しあじめた。

「これは姉さんが前、言つてたんだけど・・・」

少し間を置いてから話しあじめた。

「組織は表向きのボスと裏のボスの2通りあつて、裏のボスが主權を握つてゐらしいって。後、組織は大きなプロジェクトを始めるつて」

「ナンはそこまで聞くと我慢できなかつた。

「なんで今まで言わなかつたんだよ。」

「ナンの気持ちとは反対に瑛祐は静かだつた。

「今まで、信用できる人がいなかつたんだ。やつと君に詫あつと思つたんだ」

そこまで言われるともう否定出来なかつた。

「分かつた。これでちよつと推理する」

「ナンが推理をしていたら、いきなり博士の隣人の沖矢昂がやつて來た。

その隣にはジョーティもいた。

「聞いて欲しい事があるの。」口を向いてくれる？」

そう言われ、みんなそつちを向いた。

平次は「ナンに聞いた。

「あれ、俺らが前疑つてた奴やんか。FBIの人間やつたんか？」

「ああ。今は仲間に近いな」

「ナンがそこまで言つた」「、ちよつビジョーティが昂の説明をしていた。

「——今回手伝ってくれる事になつた沖矢昂さん。一緒に闘ってくれるそつよ」

他の人は昂の登場に喜んでいたが、コナンは喜べなかつた。それに平次は敏感に気がついた。

「どうしたんや？なんか心配そつな顔やで？」

コナンはそのわけを平次と瑛祐だけに言つた。

「実はあいつから灰原は組織の臭いがするつていつてたからな。一応、信頼してもいいと思つけど、少し心配でな」

瑛祐がそれを周りにいた人に言おうとしたのを急いで止めた

「ダメだ。今、FBIは不信感が高まってるんだから余計な事はするな」

そこまでいわれて、まだ言おうとするほど瑛祐は馬鹿では無かつた。

話が終わつたコナンは一人になつている昂に近づいて行つた。

file38・FBHの談合（後書き）

やつと瑛祐君出せましたよ

遅かつたですね・・・

でも楽しいですよーー！

書いてる時は・・・

もし話でこの人出して欲しいとかあったら教えて下さーー！

出来るだけ入れます

では

「ねえ、ちょっと聞きたい事があるんだけど」

「ナンはもう言って昂を呼んだ。昂は意外にもすぐに来てくれた。

「なんだい、コナン君、話つて」

「ナンは单刀直入に言つた。

「昂さん、赤井さんじゃない？今はバーボンとして組織に居るでしょ」

昂は拍手した。

「さすがコナン君、90%当たつてるよ。理由は？」

昂は訪ねた。

「まず、赤井さんっていう理由は、灰原を殺すチャンスがたくさんあつたのに殺さなかつたことかな。あとは条件が一致したつてのが大きい。バーボンっていうのは聞いてた条件と、赤井さんの能力が一致してるから」

昂は口を開いた。

「なるほど、意外と証拠が少ないね。後、その推理には一つ間違いがある」

そこで息をつくと話しあじめた。

「今、組織にはいない。死んだことになつてゐるからな。ジンは俺の正体が分かつていても、追放出来なかつたんだよ」

すでに昂の口調は赤井の口調になつていた。

そして続きを話した。

「あの方が・・・といつても会つた事はないが、お気に入りらしいくてな、最近まで抜け出せなかつたんだ」

赤井は「ナンだけに耳打ちした。

「組織の中の主要人物はそれぞれ深い関係がある。そこを潰せば、恐らく勝てるはずだ。後はジョディの案次第だな」

そこまで話した時、ちょうど、哀から電話がかかってきた。

「なんだ?」

コナンは少しかつたるこよくな返事をした。哀は逆に危機迫る感じの話しかつた。

「あなた、探偵バッジの録音してあるでしょー今すぐ聞いてーーー」

「なんだ?今忙しいんだけど」

「いいから早くーーー」

哀のあまりの剣幕に押されて急いで録音を聞いた。

聞き終わって哀に再び電話した。

「聞いた。歩美ちゃん取りあえず無事みたいだな」

「ええ、でもそれもいつまで持つか・・・」

「ナンは深刻になつた雰囲気を消すため言つた。

「水無さん、組織の情報言つてたな」

「ええ、それで一番大変なのは、円谷君が聞いているかもしれないといつことよ。あれを聞いてたら危険な真似しかねないわ」

「ああ、じゃ、それについてはまた話そり、じやな」

そう言つて電話を切つた。

その同時間には平次も電話していたのだ。

その電話では・・・

「そういうや、言い忘れたんやけど・・・めつちや大切な事や」

そういつて前言われた暗号を言つた。

平次はそれを聞いてすぐ分かつたようだつた。

「要するに頭だけじゃあかんつちゅー」とやな。武力も人数もいるんやな。後、廃ビルにいるつて事ぐらいやな、わかるんは

平次がそう言つてしばらく話して切りつとすると、和葉が急いで止めた。

「後、一個だけ・・・今日帰つたり話したい事があるんや。早う帰  
つてきーや」

和葉はさつさつと電話を切つてしまつた。

平次はさつきの事よりも和葉のこの言葉が気になつて仕方なかつた。

平次は今日はこの言葉が頭から離れなかつた。

## file39・昴の眞実（後書き）

今回は昴の正体をして、希望があつたので、平和を出しました！進展すると思いますね～（なんて無責任な！…）

今日は家のパソコンが壊れてたので直るまで、ケータイ投稿してました！今はパソコンが直るまで投稿しなかつたらこんな時間に…

一応直りましたがまた壊れるかも…これが心配です…

続きはまだ考えてません…（石を投げないで…）

けど、頑張って完成させたいと思います…！

内容はあまり考えてませんが、言わせたい言葉とかはたくさんあるのでそれをどんどん入れていきたいと思います…！

ではまた次回会いましょう…！

コナンも平次も同時に話し終わったので2人のことまとめで話すことが出来た。

「——ってな訳なんだ」

そしてコナンと平次の話を聞いた昂、いや、赤井は言った。

「要するに組織は弱ってるんだろ。だけビアジトを変えるから手が出せない。嫌な状況だな。今すぐぶつ潰したいんだが」

赤井は今すぐにでもやりかねない雰囲気だった。平次はそれを止めさせるかの様に言った。

「でもよう考へてからやないと失敗するで」

「分かつてゐる。だから手をださなかつたじやないか」

赤井はそんなことは当然だ、というような態度をとつた。その頃瑛祐はいつそりコナンに謝つた。

「話によると君の友達、姉さんに捕まつてるんだろ。ごめんね」

「仕方ないぞ。だつてCIAの諜報員なんだから。ついでやお前はCIAに入るんじゃなかつたのか?」

コナンがそう聞くと瑛祐は強い意志を持つた顔で答えた。

「僕はその組織を倒すのに協力するよ。これは向こうに行くときから決めてあつたんだ。今倒すときならやつぱり知つてゐる人とやりたいから」

コナンが止めをせようとすると瑛祐が言つた。

「君のことだから止めをせるつもりだらつけど、僕はもう決めたから。だから無駄だよ」

その瑛祐の発言からコナンは強い決心を感じ取り、否定することが出来なかつた。

ちよつとその時会議が始まつたよつた。

「決まつたことを発表するわ。突入は10日後に決定よ。今まで何回か試行錯誤してみたけどそれが一番いいわ」

しかしジョディ無念そうな顔で言つた。

「けど、組織はアジトを変えるの。だからそれまでは情報を待つわ。」

それを止めたのは赤井だつた。

「今思い出したんだが・・・組織は移動する場所を言つてたで。暗号になつてたがな」

「秀? その口調は秀なの?」

ジョディはそうこつと喜びのあまり泣き崩れた。

「今までみんな心配してたのよ……じつは帰ってこなかつたのー。」

「それは後からだ。今から俺が解説した答えを書くわ」

赤井は一息つくと書いた。

「米化町二丁目の廃ビルだ」

そのままドザウト部屋がざわつき始めた。

「おこ、黙れ」

赤井のその発言に部屋は静まり返った。  
そしてジニアは残りのこと話をした。

「じゃ、今日は解散。また計画前に集まつてもいいわね

そうしてみんな帰つていった。

平次は特に急いで・・・

今回、結局平和を進展させられませんでした。  
明日になりますね・・・

今回書いて気が付いたんですけどこの話めつたりやまくならないで  
すね・・・困ったなあ・・・

話は進展してますけどねー

リクあれば書ひてくださいー！

希望に添えるように、どんどん話の中に入れてこきますのでー

ではまた次回でー！

平次は急いで探偵事務所へと帰った。  
3階のドアを開けると、和葉が立っていた。

「和葉、話つて何や？」

平次は单刀直入に言つた。和葉は平次を引っ張つて歩きながら言つた。

「（い）は蘭ちゃんもいるし、お（い）ちゃんもいるや（い）。それに（い）すぐコナン君も帰つて来るやん。だから外で話（せ）ひす」

平次は納得したのか抵抗しなかつた。  
それに和葉は戸惑つていた。

（いつもの平次とちやつ。やつぱりうしがやるつとじつる」と分かつ  
とんかなあ。一応あれでも高校生探偵やもんなあ）

そんなことを思いながら歩いていた。しばらくすると平次から声を  
かけてきた。

「手え繫がんでも歩けるわ！」

いつもの平次に戻つて少し安心した。しかし、完全に安心したとは  
言えなかつた。なぜならそれつきり言葉を発さないからだ。  
それに耐えられなくなつた和葉は急いで店を探すとそこに入つてい  
つた。

2人とも席に着くとすぐに話題を切り出そうとした。  
しかし平次は飲み物を頼んでいて、話せなかつた。

「和葉は何も頼まんのか？」

「ええわ……！」

和葉は勇氣を出せりとしたときにもえぎつた平次に腹が立つてゐた。  
その怒りを腹の底に押し込め、もう一回言おうとした。  
しばらくしてもう一度言おうと決心した。  
しかしまたしてもトイレに行くなどといつて止められた。  
和葉はもう我慢できなかつた。

「平次のアホ……！」

席を立つたばかりの平次は驚いて再び座りそつになつた。  
その平次に啖呵を切つた。

「つかがどんな思いで呼んだかわかつてへんやろー今日話すために  
どんだけ不安やつたかわからんやろ……」

そういつた和葉の顔は泣いていた。平次はそれを見てうるたえた。

「分かつた。すぐ話聞くからおとなしくせえ」

そういうても無駄だつた。平次たちは他の客ににらまれていたが、  
それに気が付く余裕はなかつた。和葉は興奮してつい言つてしまつた。

「うちの写真見たから、うちの好きな人知つてんのやろ? ジやあ、

何でいつてくれへんのー。ちからてくれたほうがまだ楽やつたのに・・・」

そして間をおくと言つた。

「ひが好きなんは、平次やつてなあ！」

そこまで言つと、氣を張り詰め過ぎていたのが原因か氣を失つてしまつた。

「和葉、和葉！..」

そつ言つても反応がなかつたので、密のなんとも言つて表せない田線を浴びながら、平次はおぶつて帰つた。

自分の本当の気持ちを考えながら・・・

file41・あなたの気持ちは・・・？（後書き）

待ちに待つた平和書きました！（待つてない？）

次も平和ですね！

その次は・・・どうでしょ？（おにおい）

前も言いましたけどリクアットほうがストーリー作りやすいので、  
もし何かあれば言ってください！

基本的に載せますので！！

部活もとつあえず年末で休みなので、投稿しやすいです！  
それと、新連載、元旦からの話はどうか、とコメントいただきまし  
たが、今はこれで手がいっぱいなのでまた今度。すみません。でも  
また言つてもらえれば書けると思います！

ではー！

## file42・自分の気持ちは・・・？

平次は自分の気持ちについて考えていた。

(俺はどうなんやろ？和葉の事好きなんやろか？)

平次は考えてこせいたが、心の奥底では本当の気持ちは分かっていた。  
だからこそその真実から逃げたかったのだ。

今までの関係を保ちたかったから・・・

平次は和葉に布団をかけると一人部屋にこもって考えた。

(和葉のこと考えるとビデキドキするな。他の奴らとは違った気持ちや。これが好きっちゃーことなんやろか)

平次はこの瞬間、和葉が好きなことを自覚したのだ。

そのまま後ろの和葉の泣いた顔を思い出した。

(さつき泣かしたなあ。俺がもつと早づ言つとけば良かつたんか。  
これ、俺に似るとか言つべきやつたな。2人とも変に距離置こう  
としたからあかんかったんや)

平次はそう思い、自分の行いを反省した。

しかし平次の変なプライドが和葉にその気持ちを伝えるのを許さなかつた。

(でも俺は言えへんなあ。和葉みたいに強うないから)

平次はそんな自分に少し苛立っていた。  
しかしやはり言う決心はつかなかつた。

しかしその瞬間、平次は決心を変えることになる。  
さつき倒れた和葉が起きたのだ。

「平次、さつきば」めん。つい、かつとなつて・・・」

和葉は平次に謝つた。平次は和葉を慰めるように言った。

「そんなこともうええわ。それよりも言いたいことがあるんや」

そつ言われて和葉は不思議そうな顔をしていた。

平次は一息つくと決意を言つた。

「俺、和葉に言われて考えたんや。俺が好きな人は誰やつて考えたら和葉しかおらん。今まで俺は自分の気持ちに氣いついてなかつたわ。今は工藤助けなあかんから無理やけど全て片ついたら付き合つてくれ」

これが平次が考えた精一杯のプロポーズだつた。  
和葉は急な展開に戸惑つていたが、返事を返した。

「うん、ええで」

和葉はとても嬉しかつた。片思いだと思つていた恋が成功したのだから。

(平次・・・今、うちめつちや嬉しいで。自分の思いが伝わったん  
やから)

平次は・・・

(和葉に思いが伝わったんや。俺、嬉しいで。和葉に気持ち伝わっ  
て)

2人とも思いが伝わって嬉しく、ぼーっとしていたが、和葉は、あ  
る一つの事に気がついて言った。

「工藤君が大変って?」

平次は余計な事を言つたと思った。

「それはやなあ・・・工藤が風邪つて事や・・・」

平次はそういしまかしたが、隠せるほど甘くなかった。

「そんな嘘、つかんでええ。それよりなんなん? 工藤君の危機つて

平次はそれをじまかして貰うため、新一に電話した。

「もしもし、工藤か?——」

## file42・自分の気持ちは・・・? (後書き)

あけましておめでとひいがれこます

昨日投稿出来ずじめんなさい

毎日投稿は失敗です・・・

忙しかったんですよ・・・

ま、頑張ります(・・・)

次は予想出来ますね?だから敢えて言いません  
つてか普通言いませんね・・・

では、また

リク待つてます

「ああ、服部か。なんか用か?」

「ナンは冷静な対応をした。平次はできるかぎり真剣な声で言った。  
「実は、和葉が工藤の危機つてなんやつて聞いてくるんだ。だから  
ちょっと代わるな」

そう言って和葉に電話を渡した。

和葉は携帯を受け取ると一言田にていついた。

「工藤君、危機って何なん?あの工藤君の危機なんやからめつちや  
ヤバイ事なんやろ?うちが思うに蘭ちゃんの悩みに関わるんとちや  
うん?」

「ナンはそれを聞いて驚いた。いくら平次といつも一緒に居るとは  
いえ、そこまで鋭い読みができるのだから。

「ナンは変声機を使って工藤新一の声にして聞いてみた。

「どうしてそれが知りたいんだ?」

和葉は間髪入れずに答えた。

「うちはあんなに辛そうにしてる蘭ちゃん見たくないんや。蘭ちゃ  
んはな、笑つとるとき天使見たいに和ませてくれるんやから。だか  
ら、うちはそんな蘭ちゃんを助けたいんや。多分工藤君もなんか関  
わってるんやろ?じゃないと、あそこまで辛そうさせへんし。だ  
からお願ひ。教えてくれへんか」

和葉は自分の気持ちを精一杯伝えた。

新一はそれを聞いて考えを変えた。

「和葉ちゃん、聞いてくれ。俺は最初、適当にこまかして終わらせるつもりだった」

そこまで言った時、和葉が怒り出した。

「やつぱり。工藤君、今まで隠しどうたぐらこやから言へん事やと思つけどな——」

そこまで和葉が言つと耐えられなくなつたのか、コナンは言つた。

「続きがあるんだ。俺は最初はそう思つてたが、さつき和葉ちゃんが言つた事で考えを変えた。純粹な気持ちが分かつた。——和葉ちゃん、蘭の支えになつてくれるか？ 知る事で命がなくなるかもしれないけど良いのか？」

コナンがそう言つと和葉は即答した。

「もちろん……そのために聞いてるんやからー」

「ナンは安心した。多少心配もあつたが、それは気にしない」と云つた。そしてついに言つた。

「やつぱり——俺が今まで言えなかつた事——それは工藤新一は

そこで変声機を外すと言つた。

「江戸川コナンってことだよ」

当たり前だが、和葉は驚いた。

「そんなゲームみたいな事本当にあるわけ・・・」

コナンは諭すよつて言つた。

「でも、本当の事なんだ。理解できないかもしない。それでもいい。それもよく分かるからな。けど、この事が蘭を悩ませているんだ。お願いだ、蘭を支えてやってくれ」

新一の真剣な願いは和葉に届いたようだつた。

「分かつた。まだ、状況がよく掴めんけど、ここにいる平次にでも聞くわ。じゃ、また」

和葉はそう言つて電話を切つた。

和葉はまだ本当の命の危険といつもの知らない。本当の命の危険を知るのはこれからとなる。新一の正体を知ることによつて――

file43・助けるために・・・（後書き）

コナン君、とうとう和葉に正体ばらしちゃいましたね（  
大丈夫かな～、和葉ちゃん（・ー・・）  
ってか私が書いたんですけどね

平次もどうなるのかな・・・  
頑張つてほしいです！！

もしかしたら明日投稿出来ないかもしません・・・  
投稿するかもしませんが・・・

では、また（^ ^）ノ

## file44・聞かないほうがいいの？

和葉は携帯を切ると、平次に突っ掛かった。

「平次、あんた工藤君の事知ってるんちゃうん？」

「そう言われても、意外にも動じず言つた。

「それは俺から聞く事ちやう。それに、深く聞いたらあかん事もあるんぢやうか？どうしても聞きたいなら工藤から聞きや」

和葉はそう言われてはつとした。

「せうやな、うちが聞く事ぢやう。けど、一つだけ気になる事あるから聞かなあかん」

平次は納得したのか一言だけ言つた。

「あんま踏み込みすぎんな」

「分かつてゐわ」

そう言つて和葉は「ナンへ電話をかけた。

「もしもし」

和葉は遠慮がちに話しあじめた。

「二回も」「みんな。今話せるといつてある？聞きたい事あるんやけど」

帰る途中だったコナンは瑛祐と少し話した後言った。

「今、外にいるからまた後で。あんまり外で話せる事じゃないんだ」

和葉は反対しなかった。

「分かった。じゃ、待ってるな」

電話を切った後、瑛祐が言つた。

「君の事についてかい？僕も聞いてみたいな。興味あるんだ」

「ナンはしづらへ考へた後言つた。

「じゃ、来るか？」

「うそ、行かせてもらおうかな」

そうしてしばらぐして探偵事務所に着くと蘭が出迎えてくれた。

「お帰り、新・・・コナン君。あ、瑛祐君、出すものないけどっくつしてって」

「はい」

瑛祐がそう答えた後コナンに耳打ちした。

「名前、まだ慣れてないね」

「ナンもせつと耳打ちした。

「それももうすぐなくなるわ」

コナンはもう言つて上に上がって行ってしまった。

上に上ると和葉と平次がいた。

「工藤、すまんなあ。和葉が聞きたい事があるっていうんや」

平次の「メントを無視したのか、答えず、和葉に話しかけた。

「俺のことが聞きたいんだろ？ちょうどみんな正体知ってるから話すな。つていつても服部は知ってるだろうけどな」

「ああ」

そういつたのを合図に話し始めた。

「まず、俺は、蘭の都大会優勝の祝いにトロピカルランドに行つたんだ。それで事件があつて——」

そういつて全容を話した。

「なるほど、大変だつたんだね」

瑛祐は同情するかのように言った。コナンは意外にも否定した。

「最初は俺もそう思つたさ。けどな、それで、いいこともあつたんだよ。探偵団も面白かったしな。めんどいことも多かつたけどな」

そういうて笑つた。それを見たみんなは、少し安心したようだつた。

「何で命のキケンがあるかつて事は分かつたわ。で、うちほ蘭ちやんに何してあげたらいいん？」

和葉は聞いた。「ナンはゆづくつと答えた。

「俺が出来なことをしてやつてくれ。それだけで良いから」

「分かつた。任せとき。いつかがやれば完璧やー。」

平次がすかさず突っ込んだ。

「ほんまか？ もしそれで出来んかつたら和葉責任重大やで」

「平次は要らん事言わんでええ！」

その普段どおりの様子を見て、コナンは少し嬉しかった。その気持ちを汲み取るかのように瑛祐が言つた。

「よかつたね。あんまりプレッシャー受けてなくて」

「ナンがうなずきながら答えた。

「やうだな。実際はわかんねえけど」

その頃蘭は、

（やつ起き新一、もつすぐ名前間違える」とも無くなるって言つたよ

ね。あれって、キケンなことにまた首突つ込むつてことかな

その心配が消えなかつた。

このことは蘭と新一を縛で結ぶのか、それか亀裂を生むのか。  
それは2人の信頼が関わつてくることになる。

これから彼らは大丈夫なのか。それは誰にもわからない・・・

file44・聞かないほうがいいの?（後書き）

今回は長かったですね（汗）  
量を一定に出来ません。

したいんですが・・・

書きたいことが多くて・・・。

今週コナン無いですね・・・  
悲しいです・・・

明日から部活です。

試合も近いんで頑張りますーー。（つづいて書くとどうじやないですか）

ではー！

事件があつた3日後、警視庁は大変なことになつていた。  
それに気づいたのは田暮だつた。

「君達なんかあつたのかね？勤務時間中だが。もし言いたいことが  
あるんなら遠慮せず言いなさい」

田暮はそういうと周りを見渡した。

そこに白鳥が田暮の元にやつてきた。

「実はですね、例の事件のスパイについてなんですか、金持ちだから僕とか情報が仕入れやすいから警部とかという噂ではなく、最有力の2人が見つかつたんです」

警部は音を立てて椅子から立ちあがつた。

「なんだって！…誰だね、それは」

田暮は早く聞きたそうだった。それに比べて、白鳥は言いたくなさそうだった。

「どうしたんだね？」

田暮が白鳥を真剣に心配し始めたので、白鳥もこれ以上は待てない  
と思い、耳打ちした。

「犯人候補は高木君と千葉君です。優しそうなあの2人が有力なん  
です」

「・・・そうか。分かつた」

田暮は自分が育てたにも等しい刑事が犯人だということが信じられなかつた。しかし理解できないから怒るなどと云う、かつて悪い真似はしなかつた。だから、こういつた返事になつてしまつた。白鳥もこの空氣の中には居づらかつたのか、早々と退散した。

「そうか、あの2人か」

田暮は知らぬ間にそつと言つていた。

その頃、美和子は由美と話していた。

「今日高木君いないのよ、仕事が増えて嫌だわ」

「違うでしょ、美和子が来て欲しいのはただ会いたいからでしょ」

そういつて手に持つた缶ジュースを飲んだ。

「由美……違うって何度も言つたら分かるの……」

そう言つてゐる美和子の顔は赤くほてつてゐた。しかしその後、美和子が聞きたくない話を聞かされることになる。

「そうそう、美和子、実はね……」

そつと言つたきり黙り込んでしまつた。

「なんなの、由美。あなたのキャラに合わないわよ、そういうの」

そう言われて口を開いた。

「ホントに言いくらいなんだけど・・・今回の事件のスパイ、高木君にも容疑の疑いがあるって事になつてるわ」

「嘘よ！高木君にそんなことできる訳がないわ！」

美和子はもう理性を維持できなかつた。

「美和子、落ち着いて！それには訳があるのでーー！」

そういうて美和子を落ち着けた後話し始めた。それまでの間は長かつたが。

「あのね、私の友達のお父さんは偉い役職についてるから教えてもらつたんだけど、ちょうど警察のことが外部に洩れ始めた時期があつたじゃない？あの頃から事件はあつたって言われるんだけど、その中で1回だけ東京都の警察が全員集合することがあつたのよ。その時休んだのが奇跡的に高木君と、千葉君なわけ。分かつた？無罪だつて証明したいんなら私も手伝うわよ」

「うん、後で頼むわね」

そういうて美和子は行つてしまつた。渉にその真偽を確かめるため

――――

こんには。

投稿遅れてしません（汗）

短編書くのに力入れすぎました（笑）

今回はリクにお答えして高佐を書いてます！  
上手いくといいですね！…この2人…

明日も高佐ですので…！

では、今回はあとがき短かつたですが…。  
また…！

美和子は、今日は非番で警視庁にいない渉の下へ走り出した。由美が止めようつと声を出したがそれも届かず、仕事場を抜け出したのだ。  
(また減給だわ。でも今はこっちのほうが大事だもの。急がないと...)

そんな事を思いながら走っていると偶然にも道で渉を発見した。

「高木君!—」

美和子は気づかぬ間に声を張り上げていた。高木は荷物が重いのか気づいていない様子だった。それに気づいた美和子は渉のそばまで行つた。

そばまで行くと渉の肩をたたいた。それでやつと気づいたようだつた。

「あ、佐藤さん、今日の仕事はどうしたんですか?まだ職務時間中ですよ?」

「そんなことどうでもいいのーーそれより今大切なのはあなたよーー」

渉はそういうわれてもよく分からなによつた。

「は・・・はあ

そんなぼーっとしている渉の手を取つて美和子は走り出した。

「さつ、佐藤さん…何してるんですか…！」

涉は手を握られて驚いていた。

「いいからついて来て…！」

そういうつて連れて来られた所、そこはファミレスだった。  
2人は中に入るとすぐに椅子についた。

「「めんね、ほんと。どうしても確かめたかったの。聞いてくれる  
？」

「分かりました。なんですか？」

涉は少し動搖しながらも落ち着いた声で聞いた。  
美和子は周りの人々が自分達の話を聞かないように見回してから言  
つた。

「高木君…今回、警察で起こった事件の…・・・スペイじやない  
よね？お願い…・・・違うって言つてよ…！」

美和子は最初の冷静さの割りに最後のほうはかなり冷静さを失つて  
いた。逆に涉は今まで以上に冷静になっていた。

「落ち着いてください、佐藤さん。何でこんな事聞くんですか？」

美和子はすでに泣きそうになっていた。

「だつて…・・・だつて…・・・スペイの可能性あるの…・・・千葉君と

高木君…・・・あなた達だけなんだもの…・・・」

そう言つた美和子の頬を涙が伝わつた。涉はいわれた事よりも、涙を見て動搖したようだつた。

「佐藤さんー！泣かないでくださいーーお願いですーーそれに・・・

」

美和子は泣くのが本格化して、話を聞けないような状況だつたが、涉がそういうのを聞くと、自然と泣くのをやめた。それを見計らつてか、涉は言った。

「それに、僕達は将来家族と一緒にトロピカルランドに行くんでしょう？今そんなことしたら行けなくなっちゃいますよ。僕は佐藤さんと行きたいです！家族と一緒に・・・」

それを聞いた美和子ははつとした顔をした。

「そうよね。高木君は私の心の闇を払つてくれた人だもの。疑う私が馬鹿だつたわ。トロピカルランド、私だつて一緒に行きたいもの。それには・・・ううん、なんでもないわ。ありがとう高木君」

「いえ。佐藤さんが元に戻つただけで嬉しいです」

そう言つて美和子にキスをした。美和子はとても驚いて、慌てふためいた。涉はそんな佐藤の耳元でささやいた。

「これから大きな事件が起ることとは確かです。それまでは恋人らしいことしたいじゃないですか」

「うん・・・」

- その後2人はしばらくファミレスにいた。この時を実感するために。

## file46・高木の元に・・・(後書き)

今日は新しい話を書いてたのに、次話、投稿できて嬉しいです。

ま、それは熱出して、部活休んだからなんですけど・・・  
まだちょっと頭痛いんですよね・・・  
なのに執筆する矛盾があるんですけどね(笑)

次話は本編に関わる話です！～多分・・・

今はせっかく休んでるんで、戦慄の楽譜と、探偵達の鎮魂歌見てます

## file47：敵からの指名

それからせりに一日経つと、FBIに電話がかかってきた。

「もしもし、なんか情報入ったの？」

電話に出たジョディは聞いた。電話をかけてきた瑛海は言った。

「今日、決まったわ。移動は1週間後。ただ、今の所より、新しい所の方が罠が少ないから、待つた方がいいわね。荷物は同じものを購入してるから、有利なのよ。けどデータは移動日に全てを運ぶらしいわ。紙のやつは少ないか——」

そこで、電話の声が聞こえなくなった。しばらくすると、冷酷な声が聞こえてきた。

「こいつがスパイだという事は前から分かつていた。証拠が無かつただけだ。FBI、お前らは人質を助けるために、江戸川コナンを呼べ。東京都にある廃ビルだ。ヒントは10階建てだな。夜8時に来い。もちろん俺一人で行くから、一人で来させるんだ。分かつたな。1人で来なれば人質の命はないと思え」

そこまで聞いて一方的に電話を切られてしまった。

「みんな、どうする？」

ジョディがそう聞くと色々な意見が出た。しかし、それをまとめたのは赤井の一言だった。

「あの子は頭が切れる。」ヒは一人で行かせる振りをして俺が護衛しよう」

「俺も行きます！」

あちこちからそんな声が飛んだが、赤井は一蹴した。

「人数が多いと逆にダメだ。お前らは来るな。それに相手はジンだ。リスクは少なくするんだ」

そこまで言われて、押し切るものはいなかつた。

決まるど、今が6時だといつこともあり、急いでジョーディが電話した。

「コナン君、本当は民間人である君を巻き込みたくないんだけど、どうしても来てほしいの。ダメかしら？」

ジョーディは出来る限り声を普通にだそつと思っていたが焦りのためか声が上擦ってしまった。それに感づいたコナンは了承した。

しばらく待つてコナンが来ると、さつき話した内容を話した。

「ふーん。なんで僕を選んだか分かんないけど、行くよ」

コナンはこの状況をいいものとは思っていなかった。むしろ、人質がいて、自分が名指しされたことに疑いがあった。

(正体ばれたかもしんねえな。これを灰原に言つ・・・いや、やめといた方がいいのか?)

「ナンはそのことばかり考えていた。

ジョディは赤井に車の鍵を渡した時に言った。

「言われた条件で当てはまつたのはこの廃ビルはここよ。そこまでしか出来なかつたから、後は分からなかつたからあなた達で考えて」

その後、車はすぐ発進した。

「わかるか？」

運転席から、赤井が聞いてきた。助手席に座っていたコナンは地図を見ながら考えを話した。

「IJの条件で街中にあるのを除くとこの3つなんだ。それからが・・・  
・あ、分かつたぜ！－！」

赤井は何も言わず、コナンの推理を待っていた。コナンは話し始めた。

「人質は全部女だ。あまりにもぼろいところだと上がれなくなる。だからもっと楽なところだ。・・・となるところだー！」

そういうて指差したのは今居るところのすぐ近く・・・米化町内だった。

それをチラッと見た赤井は言った。

「米化町が好きなのか、そこばかり選ぶな。なぜだろ？」

(もしかすると・・・)

そんな不安が頭をよぎったが、今はもの前のことに集中した。

それは後から聞いてみると、3人の人質を助けるために・・・

## file47：敵からの指名（後書き）

今回は本編に関わることなんですが、前回よりもなんか調子よくないですね・・・  
何ででしょうね？

次はお待ちかね（つて待つてないかもしません）のジンの登場！  
！本当に一人で来るのか？そんな不安がありますね（笑）  
ジンは敵キャラの中で結構好きです！あのクールさが！

人質が殺されるなんて展開にはなりませんから安心してくださいーー！

行く予定のビルの近くに行くと、赤井が車を止めた。

「ここで降りる。ここからは一人で来いと言われてたんだから、一人で行け。頼んだぞ。俺は、近くにて守つておくからな」

「お願い、赤井さん」

そう言つとすぐに去つてしまつた。それを見送つた後、コナンは歩き始めた。

コナンはさつさつと地図を頼りに進み、ついにビルの近くまで来た。

進んで行くと、不自然に足元に真っ白な紙が置かれていた。

（おかしい。この廃ビルのまわりの紙はもつと黄ばんでいるはず）

そう思つたコナンは紙を拾い上げて読んだ。

“誘拐されたやつらを助けたければ5階まで来ることだ。お前の仲間に連絡すると子供達の命はないと思え。お前の動きは読めているんだからな”

そう書いてあつた。コナンはその紙をポケットの中にしまつと、進んでいった。途中で爆竹や、もつとひどいものは毒矢など、下手すれば命さえ無くすようなワナを乗り越えついに5階へ到着した。しかしそこに居たのは歩美だけだった。歩美は椅子に手足を結び付け

られていた。その上意識を失っていた。

コナンは歩美のそばまで行つてロープをはずし、歩美に声を掛け続けた。しばらくして歩美は気が付いたようだった。

「あ、コナン君。来てくれたんだね。ありがとう」

「そんなことはいいんだ。大丈夫か？」

歩美は立つと言つた。

「うん、全然平氣だよ」

その返事を聞いたコナンは歩美に聞いた。

「歩美、他の人はいねーのか？」

そう聞くと、歩美は泣き始めた。しかし、ちゃんと言つた。

「私が捕まつてどつかの牢屋に入れられてた時にあつた人のこと？  
その人は・・・もつと上に連れてかれたよ。・・・でも、もう一人  
連れてかれてた。歩美を誘拐した人が」

「歩美、落ち着け。上だな。俺が行つて来るからお前はFBIに助  
けてもらえ。すぐ連絡するから」

そういうつて携帯を取り出した時、せつを泣いてたとは思えないほど  
大声で泣くのをやめさせた。

「だめ！！！コナン君、私達を連れてつた人がそれしたら殺すつて言  
つてた。私も上に付いていく！！！」

「ナンも負けないほど大きな声で言つた。

「ダメだ！…それは危険すぎる…」に残つたほうが安全だ…」

歩美は自分を落ち着けると、コナンの前に立ち言つた。それは驚くほど静かな口調だった。

「コナン君、私達少年探偵団だよ。迷惑掛けばっかりだつたけど、歩美だつて一緒に行きたい。さつきのこととかも言っておいたほうがいいしね。それに一緒に行けるだけで満足だもん」

コナンはまだ止めようとしたが、ソリヒーのもキケンだと思い連れて行くことにした。

「しゃーねーな。ちゃんと付いて来いよ。守つてやるから」

それを聞いて歩美は頬を赤らめた。

「うん、お願ひ」

そしてコナンは進んで行つた。残りの人たちを助けるために・・・

## file48・危険に立ち向かう（後書き）

しばらく投稿しませんでしたね。『めんなさい。

今回は歩美ちゃんの話でしたね～（＾＾）

歩美ちゃん、口ナンの邪魔にならないかな？それが心配です（汗）

この話長くなつたうです。でもここ終わつたら結構展開速いと思  
います！取りあえず進み具合の予定です（笑）

あと、せっかく明日誕生日なのに投稿出来ないのが残念です（

）

ではまた（・。・）ノ

歩美を連れて行くことに決めたコナンは歩美と一緒に階段を上つていった。もうすぐ次の階だという時、歩美は何か硬いものを踏んだ。その瞬間、突然機械音が鳴り出した。

「なに？この音？」

歩美は自分が踏んだことが原因だと気が付かずにはそう言った。歩美はその場で立っていたが、音源のほうの壁から、刃物が見えたコナンは急いで歩美を遠ざけようとした。

「歩美……」

そういうて歩美を突き飛ばした。歩美は上の階の床に飛ばされたので、かすり傷程度で済んでいた。

「コナン君、いきなりどうしたの？歩美びっくりした

そういうて後ろを見ると思いもよらない光景が見えた。コナンは階段から落ちた上、足から血が出ていたのだ。

「コナン君……どうしたの？」

そういうとワナを無視してコナンのところまで降りてきた。

「だ……大丈夫だ。歩美……大丈夫か？」

コナンはかなり苦しそうだった。見てみると太ももには刃物が刺さ

つっていたのだ。それはかなり深くまで刺さっていた。

「ほんまひどい怪我なら帰らう。歩美が上に行つて助けてもらつて  
くるから」

そうについて上に行つたときコナンは一生懸命止めた。

「ダメだ、そんなことしたら歩美が死んでしまう!!俺が行く」

そうについてゆくと立ち上がつたが、一歩歩くのも苦労してい  
た。

「やつぱりダメだよ……。」

歩美がそうについて止めた時、後ろから声がした。

「ダメやあらへん

コナンはその声に驚いた。そう言った人物、それは紛れもなく、西  
の高校生探偵と呼ばれる服部平次だった。その隣には怪盗キッドと  
呼ばれる黒羽快斗、さらにつきその隣にロンドン帰りの白馬探もいた。

「服部、黒羽、それに白馬まで……なんでここに?..」

その理由は探が説明してくれた。

「まず服部君が帰つて来ない君のことを心配して、FBIに電話し  
たんだよ。そしたらこのこと聞いたらしくてさ、黒羽君に電話した  
んだ。そしたら僕のところに黒羽君から電話がかかってきたんだよ。  
自分の正体をばらしてまでも僕に助けてもらいたかったみたいだよ。

君を守るために。だから僕は来たんだよ。まあ、君を助けたかったのもあるけどね

「でもよー、紅子連れてきた方がいいって俺言つたぞ？何で連れて来なかつたんだ？」

その顔は本氣でそう訴えた顔だつた。

「だつてか弱い女の子を危険な目に遭わせるのはだめだからね」

それを聞いて快斗は呆れた。

（紅子がか弱い？ありえねえ）

そつ思つたが来てないものは仕方ないと想い、コナンのまゝに向き直つた。

「蘭ちゃん、園子ちゃんに預けたからな。あの子金持つまいし、彼氏は空手強いんだろう？だから大丈夫なはずだ」

コナンは一瞬だけ、微笑んだが、痛みが悪化したらしく、辛そうに呻き声をあげた。そうなつたのを見て、探が駆け寄つた。その病状を見て、顔が青ざめていつた。それを見て平次が焦りながらも聞いた。

「な、なあ、工藤そんなヤバいんか？ちやうやんな？」

そつは言つていたが実際は信じたくないといつ気持ちがあるのは見え見えだった。

「服部君、落ち着いて聞いてください。今の状況は極めて危険です。かなり傷口が深い上、化膿が早くなるようになつていいみたいだ。化膿し始めたらアウトです。それに頭も打つてる見たいですね。後から病院に連れていかないとまずいですよ」

それを聞いて快斗もうろたえ始めた。

「そんな・・・これじゃ不利だ・・・しかも、人質もいるし・・・」

そうつぶやいていると、後ろから声がした。

「遊びはそこまでだ」

file49・意外な援助（後書き）

お久しぶりです！…皆様（笑）

学校行つてるとなかなか投稿できないです（汗）

今回ちよつとだけジンが出てます…あジンはこのあと何を書う  
んでしょうね？

次回はまたいつか投稿するので待つててください…お願いします  
！！

では、また！！

## file50・ビルで出会ったジン／まさかの裏切り

完全にとはいかないにしても少しは安心していたコナン達に大きな不安が押し寄せてきた。そ�ーーージンがいたのだ。ジンの目は冷酷で優しさなど、微塵も感じさせなかつた。

「あんた、もしかして・・・工藤に薬飲ませた奴・・・なんか？」

ジンは不気味な笑いを漏らしながら言つた。

「そうだ、そこにいる工藤新一が生きているなんて思わなかつたがな」

「ジン・・・やつぱり・・・」

コナンは意識が朦朧としながらも、出来る限りの力を振り絞つて言った。

「工藤君、もう話わないで下をこごー！」

そうこうひびきの声も虚しく、コナンはまだ話した。

「お前・・・灰原と・・・なんか関係・・・ある・・・の・・・か？」

コナンはその時、普通なら意識を失つてもおかしくない状態だつた。しかし、コナンの執念がかるひびじて意識を保たせていた。

「ふつ・・・知りたいのなら、自分で調べるのだな」

その時、「コナンはある」とに気が付いた。しかし、その時、意識を失ってしまった。

「おい！――藤大丈夫か？」

服部はそうこうでコナンを抱きあげた。快斗も叫んだ。

「なんでこいつしてくれんだよ！もし、死んじまつたりしたら……」

「それはセイのガキに言つたらどうだ？それに黒羽盗一のよつて死にせしないだら！」

その顔はなにか知つてゐるような顔だった。

「やっぱパンダリヤせてめえらかー！」

ジンは鼻で笑ひと罵つた。

「わあな。・・・長話しあきたよつだ。死んでも「ひつ事」しよう！」

「赤井さんがおるから無理や！撃たれるで！」

ジンは馬鹿にしたように笑いながら罵つた。

「今、あいつは仲間や。前はそつちの仲間だつたらしいがな。だからお前らが撃たれるだけだ。まず、お前からだ！」

そういうつて快斗に銃を向けた。快斗にはジンが歩いてくる足音が大きく聞こえた。しかし、3歩歩いたところでジンは足を止めた。

「いや・・・」  
「殺すのは面白くない。FBI達がなにか企んで  
いるようだからその時に殺す事にしよう。しかし2人の人質は返せ  
ないがな。どうしても返して欲しいならまた来る事だ」

そういうと、ジンは去つていった。しばらくしてからジンを追いか  
けたが、その時はもう去つたあとだった。

「くそつー結局この子しか助かんかったか。もっと早く分かつて  
れば・・・」

快斗がショックを受けていると探が言った。

「今悩んだって仕方ありません。今考えるのは、工藤君の状態と、  
2人の事です。早く工藤君を病院に！それにジンの言葉も気にな  
りますし」

平次は驚いて言った。

「そつやな・・・って、工藤の事知つてたんか？」

探はいかにも当然という顔で答えた。

「それぐらい分かりますよ。僕だつて探偵ですからね。服部君、工  
藤君頼みました。黒羽君は、FBIに行つて下さい。僕は情報もつ  
と集めます」

「とりあえず降りようや。危ないから2人に連れていつてもらつて  
くれや」

そういうと、平次は降りていった。

しばらくして下につくと一言だけ話した。

「任せたで。その子は俺が連れて帰るわ。やること終わったら連絡くれや。頼むで」

「ああ」

「分かりました」

そして3人は別々の道に進んで行つた。そして平次は電話をかけた。

「もしもし、聞きたい事あるんやけどちょっとええか?」

file50・ユルで出会ったジン／まさかの裏切り（後書き）

遅れてしません（汗）

今回はジン結構話しましたね（笑）

平次の行動も気になります^ ^

コナン、大丈夫かな？つてのが心配です。

次回も遅くなるかもしません。  
では！！

平次が電話した相手——それは蘭だった。

「別にいいけど、服部君、急いでる？声が荒っぽくなってる」

平次は真剣さをだして言った。

「走ったからや。しゃーないで。頼みっちゅーのは・・・そいや、  
哀ちゃんや。その子を米化総合病院に連れてきて欲しいんや。頼ん  
だで」

走ってはいなが、その場を「まかすために言つた。すると蘭が聞  
いてきた。

「病院？なんかあつたの？」

沈黙が訪れた。その沈黙を破ったのは、先程まで意識を失っていた、  
コナンだった。

「蘭・・・か？はつと・・・り、・・・代わつて・・・く・・・」

そこまで言つてまた意識を失ってしまった。

「工藤！大丈夫か？」

その声はこの場にそぐわすぎた。それで、蘭にも聞こえてし  
まつた。

「工藤？新一になにがあつたの？」

服部はいつも通りに「まかす事にした。

「へべりこつて言つたんや。今、預かつてゐる子がな」

下を見ると、歩美が頬を膨らませて怒っていた。平次は目をそらせると、電話に耳を傾けた。

「へべりこつて言つたんや。今、預かつてゐる子がな」

「じゃ、その子、哀ちゃん連れていつたついでに預かりつか？園子、だめ？」

これは、蘭の仕掛けた罠だつた。これで、うろたえたら、新一になにかあつたと判断するつもりだつたのだ。しかし、本当にいた場合、預かつてあげたかったので、蘭は園子に聞いた。園子はためらいなく言った。

「いいわよ。でもマセガキだけは勘弁して」

平次が口を開けようとした時、歩美が平次のズボンの裾を引っ張つた。平次は携帯を耳から離すと聞いた。

「なんや？嫌なんか？」

歩美は少し暗い顔で言った。

「蘭お姉さんは好きだよ？けど・・・『ナン君』こんな事になつたの歩美のせいだから、ついてあげたいの。だめ？」

平次は少し悩んだが、その気持ちがよく分かったから、ついていくのを許した。

「しゃーないなあ。迷子になるんやないで」

「うん……」

その顔は周囲の人もつい止まるほどかわいかった。そんなことを考  
えていると、右手のほうから声が聞こえてきた。

「・・・・つとり君、服部君？居るの」

平次は急いで携帯を耳にあてると言つた。

「スマンな、この子、行きとつない言つてるからやつぱりええわ。  
じゃあ、頼んだで？」

そいつ言つと、返事も聞かず切つてしまつた。平次はつぶやいた。

「早づ行かんとな、どんな事になるか分からへんし」

歩美は自分に言われたのだと思い、答えた。

「うふ。コナン君心配だし・・・」

「やうやな

そんな会話が2人には重くのしかかつた。2人は口裏を合わせたよ  
うに同時に走り出すと、病院に向かつて行つた。



## file51・電話での頼み（後書き）

発言と行動が一致しない作者ですみません。

たまたま執筆が早く進んだものですから（笑）

今回は逃げ切った後の様子です！次もそれになりそうかな？？

今まで振り返つてみると病院、前もしましたね。

今回は「ナンの一大事なので仕方ないですけど（笑）

アニメも1時間スペシャル2週連続で嬉しいです！！しかも、新一  
登場だし！！

それと、今回のサンデー読みましたか？（ここからはサンデー読み  
でない方は見ないほうがいいです！！ネタバレなんで）

立ち読みしたんですけど、赤井さん記憶失つてますね。私の話とず  
れが発生してショックです（泣）

では、また＾＾

出せる時に出しますね！！

快斗は決められた役割——つまり、FBIに連絡するところだつた。

取りあえず、盗み聞きされないような道まで行くと、急いでせつきてつてきたコナンの携帯を取り出し、ジョディに電話した。

「大丈夫？ さつき大変だったんでしょ？」

少しの沈黙が訪れ、ジョディは心配になつたようで、もう一度言った。

「ねえ、聞いてる？ 話してくれないと分からないうわ」

快斗は心を落ち着けると、ジョディに話した。

「落ち着いて聞いて下さい。僕、黒羽快斗です。今、コナン君、頭と足に怪我を負つてます。頭はともかく、足はかなり危険な状況です」

「知ってるわ。だつてさつきその情報伝わってきたもの。でも・・・やつぱりコナン君が大怪我負つたなんて信じられなくて・・・」

ジョディは悲しみと、諦めが入り混じつた複雑な心情だつた。しかし、快斗は今の発言に疑問があり、コナンの事を忘れていた。考えていると、ジョディは違う事を話しあじめた。

「でも、コナン君、一人で行くつて言つてたけど、やつぱり他の人

も連れていく事にして良かつたわね。じゃないと死んでたかもしないし」

「えつ？」

快斗はついに疑問の気持ちを言葉にしてしまった。

「なに？ おかしい事言つた？」

快斗は慌てて体裁を取り繕うと聞いた。

「いえ、別に。あの、その事誰に聞きました？」

ジョディはその発言を不思議に思いながらも、答えた。

「確か・・・情報収集員だつたわ。でも・・・口止めされてたみたいでそれ以上は分からなかつたわ。でも情報漏れがないようにいつも口止めしてるから気にしなくていいと思つわ」

「もう一つだけ・・・その時間、自由に動ける人は？」

「いっぱいいたわ。動けなかつたのは、潜入員ぐらいよ。けどたいてい2人とかで行動するわ。1人で動くのは本部に信頼された10人ぐらいよ」

ジョディは、親切に快斗に教えてくれた。

快斗は最後に一つだけ頼んだ。

「那人達の名簿、頂けませんか？」

その発言には少しだけ疑いがあったようだが、一つだけ質問しただけだった。

「分かったわ。でも、一つだけ聞きたいの。君は探偵なの？聞かれると逃げ切れない気迫があるのよね」

快斗はふつゝと笑うと言った。

「いざれ分かりますよ。では」

そう言つて電話を切つた。

「青子、ぜつてえ助けるからなーー待つてろよ」

快斗はせつてぶやいた後、携帯をしまつと病院に急いで向かつていった。この驚きの事実を伝えるためにーー

お久しぶりです、皆さんーー！

今日は快斗君ーー！

コナンのため、青子のために頑張りますねーー！  
快斗君敬語で話しますけど、それは怪盗キッドの口調で話している  
からですーー！

では、次回お会いしましよう（笑）

探は警察方面に協力を要請するため、父である警視総監に連絡をとった。

「もしもし」

これだけで誰か分かつたようだつた。

「探かーめつたに電話して来ないのに急にビビつしたんだ?」

探は簡単に、言える範囲で言つた。

「僕の友達が・・・ある組織に負傷させられたんです。メンバー全員、全身黒ずくめなんですけど・・・そんな奴らの情報あつたら教えてくれませんか?」

探の父は少し悩んだようだつたが、ゆつくりと口を開いていった。

「本当は情報を流すと、重い処罰があるんだが・・・それが分かつてかけてきたんだろ?」

その時の言葉には、普段のおおらかな印象とは打つて変わつて、全てを見透かされるような気迫があつた。探は、それに負けず、答えた。

「はい。どうしても助けたいんです」

探はこんな事だから、しばらく返事はないものだと覚悟していた。

しかし、意外にもすぐ答えてくれた。

「分かった。調べるからその間に来てくれ。一人で来るんだぞ」

その後、電話を切つた探は急いで警視庁へ行つた。出来る限り速く歩いて警視総監の個室までたどり着いた。その部屋のドアをノックすると、秘書らしき人がドアを開け、そのまま立ち去つていった。探の父は、来客用の椅子に掛けていて、探にも、座るよう指示した。探が座り、元々置いてあつた紅茶を飲み始めると、探の父は、おもむろに口を開いた。

「探か？面白い事が分かつたぞ。警察にとつては悲しい・・・事実だな。まず、警察にスパイが居ることだ。これは、すでに流れている情報と見て間違いない。私が流したんだからな。2つ目は・・・あの組織は、何故か宝石を捜すみたいなんだ。なんでも、ビックジュエルの一つに不老不死の効果があるらしいのだよ。これは極秘なのだがな。3つ目に・・・組織は幹部が仕切つていて、という言う情報があつたぞ。しかも、あの組織でまともに戸籍に入つている人があまりいないから、世襲制だろう。これが何かの役に立つといが・・・また情報が入つたら連絡するからな、取りあえず今日は帰つてくれ」

「待つてください！」

探は一生懸命止めた。その勢いは普段以上だった。その発言に総監である父は小声で言った。

「今、2人だけになれる隙を狙つて話し合つてるんだ。だから出来る限り早くな」

探はその言葉通り簡潔に言った。

「なぜわざわざ流す必要があつたんですか？」

その質問をした後、探は父がため息をつくのを見た。

「探なら分かると思つたんだがな・・・あの時、既に警察への不信があつたんだ。そこで私はわざと真実を流したのだよ。そうしたら彼ら警察官が自分で考えてくれるだろうと思つたからね。彼らしか知らない事実もあるだろうし。分かったかい？」

探は感心していた。

父の深い所まで考えた行動は素晴らしいと思った。反対に自分の裏の裏まで考えなかつた浅はかさに腹がたつた。探はその気持ちが、まだ小さいうちに戻るうと思い、言つた。

「では、今日は失礼します。友達と会つ約束があるので」

探はそう言つて立ち上ると、ドアを回した。その時、父は一言言つた。

「私でよければ力になろう、と伝えておいてくれ」

探はその言葉を聞いて、もう腹立しさはおさまつたようだつた。ただ感心するばかりだつた。それを悟られないように、探は何も言わずその部屋を去つた。

## file53・警察の協力を得て（後書き）

やっと53話投稿することができました^ ^  
書いてたんですけど・・・投稿できなくて・・・

今回は、滅多に光を浴びない白馬君を出させていただきました！  
楽しんでもらえたなら嬉しいです！！

明日はアニメですねーー早くみたい

では、また次回（笑）

## file54；誰か倒れてる？

部屋を出て階段を降りていると、探は田暮と出会った。

「君は、白馬総監の息子の探君ではないかねー。今日はこんな所まで来てどうしたんだい？留学してたんじゃなかつたかな？」

探はさつきの事を話す訳にはいかなかつたので、笑つてしまかした。

「何でもないですよ。警部じゃ、どうされたんですか？ずいぶん忙しそうに見えましたが」

田暮は同情を求めるような目で、探に話した。

「いや、白馬総監がわざと私たちの管轄に連絡を入れられたんだ。至急、会いに来てくれとな。用件は何か分からぬが、とても急ぎの用らしいんだ。だけどうちの管轄も忙しいんでな。面倒な事でなければいいんだが・・・すまない。君に話す事ではなかつたな」

「いいですよ。それよりも・・・もしやその内容がこんな話なら、僕に連絡入れてくれませんか？」

「構わないんだが・・・でもどうしてだい？」  
田暮はその内容に驚いていた。

探は真剣な顔をして言った。

「今は言う事は出来ません。けど、連絡しなければならない場合はお話することになると思います。その時はここに連絡してくださいね」

そういうつて連絡先を書いた紙を渡した。日暮は納得出来ないようだつたが、さすがにそれを顔にださなかつた。

「分かつた。その時は必ず連絡をいれよう」

「探は最後に一言だけいった。

「他言してはいけませんよ。人の命に関わる問題なんですから

「分かつてあるよ

日暮がそう言ったのを聞くと、探は日暮と別れ、再び進んで行つた。

そして、ちょうど1階に降り、人々が行き交う玄関ホールを歩いている時にそれは起つた。目の前を歩いていた女の人が倒れたのだ。探はその女人に駆け寄つて声をかけた。

「大丈夫ですか？」

そう呼び掛けたが返事が無い。再び呼び掛けたが、全く反応しなかつた。仕方がないので周りの人には声をかけようとすると、その人は起き上がつた。

「大丈夫ですか？」

「ええ。助けて頂いたんですか？ありがとうございます」

そう言つていたが、顔色は悪かつた。

「本当にですか？顔色悪いですよ。念のため、診てもうつた方がいいと思ひますが」

「仕事が終わつたら行く事にします。この事は絶対に他言しないで下さいね」

そう話していると、新米に見える刑事が駆け寄つて來た。

「佐藤さん、どうしたんですか？いきなり部屋から居なくなつてから心配したんですよ！」

探は黙つて動かなかつた。いや、美和子が心配だつたのだ。

「高木君、部屋から出ただけでしょ……そんな事で心配しないでよ」

探はやつさの事を話そうと思つたが、約束だつたので、黙つておくことにした。その時、渉が声をかけてきた。

「ところで、あなたは誰なんですか？さつき佐藤さんと話してましたよね？」

美和子はさつきの事も見られていたのかと心配していた。それが表情に出ていたので、探が上手く話した。

「知り合いですよ。顔見知り程度のね」

「顔見知り……ですか」

渉は本当か疑つてゐるよつだつた。だから探は去り際に耳元で呴いた。

「高木さん、佐藤さんを幸せにしてあげて下さい。お似合いですよ、お2人」

「えつ……そつ、そんな関係じゃ……」

渉は顔を赤らめた。その態度は、とても分かりやすかつた。

「分かりますよ。本当に幸せにしてあげてください」

「はつ、はい！」

渉は知らぬ間にそう呴いていた。

（ふつ、これであの2人上手く行くといいんだけど。あの2人奥手  
そうだつたからな）

探はそう思つてゐた。その時、美和子と渉も話していた。

「いい人でしたね」

「ええ、本当に……」

2人はそう呴いていた。

file54 ; 誰か倒れてる？（後書き）

探君シリーズ2話に及びましたね～。  
書きすぎかな？

次は忘れ去られているであろう事を書きます。o( ^ - ^ ) o  
少なくとも、私は忘れてた( - - - )

今回、白馬 探、佐藤 美和子、高木 渉と、その人を表す言葉、  
変わつてます！

では、次話でお会いしましょー( ^ ^ )

青子は組織のある部屋へ連れていかると、その中に入れられた。

催眠薬を飲まされていたせいで意識を失っていたが、しばらくして意識を取り戻した。周りを確認して、先程と違う所にいるのに気がついた青子は叫んだ。

「何でこんなところなのよー。」

ジンは至って普通に言った。

「お前を監禁するに決まってるだろ？ 結局あの時、工藤新一はお前を助けられなかつたんだからな。それにお前はいい餌になる。これほど便利なものはないだろ？ もしもの時は殺せるからな」

青子はその言葉に違和感があつた。それは前から聞きたかった事だつたので今のうちに聞いた。

「私をなんで殺さないの？ ううん・・・あの時なんで私を殺さなかつたの？あの時は気づかれなかつたけど、結局あの時は逃げてなかつた。だから、もしかしたら見つかってたかも。そのリスクを知つてて、私を守つてくれたでしょ？ 本当になんで？」

青子は、自分を私と言つ事に苦労しながら言つた。ジンには余裕の表情が消えていた。しかし、それがわかるくらい露骨にするほど馬鹿ではなかつた。

「これからも餌としていてもうつためだ。組織の新しいアジトはこ

」だ。恐らく、工藤新一は来るからな。それだけお前の価値は高まるんだ」

「でも、それだつたら、さつきの男の人……確か、赤井さんだつたかな？その人にでもすれば——うつ

そう——さつきの言葉に耐えられなくなつたジンは青子を殴つた。それは1発ではなかつた。数発殴つて意識をなくした、と確信すると呟いた。

「お前は俺の好きだつた奴に似てるんだよ——結局殺したせいでの今は違うがな

そう言うとその部屋を去つていつた。しかし青子は意識を失つてしまなかつたのだ。

(好きな人つて誰かな？その人が分かつて、外部との連絡手段があれば快斗に伝えられたらいいんだけど……)

青子はこの部屋に防犯カメラがないのを確認すると、部屋を探しはじめた。

すると、コツコツと靴の音が聞こえてきたので、青子は急いで気を失つた振りをした。

「anone、もう演技しなくていいわ

「えつ」

後ろを振り向くと、有名な女優、クリス・ウインヤードが立つていた。

「クリス・ワインヤードさん！？」

「え、ええ。あなたに情報を『えに来たのよ。欲しいでしょ？今探していたようだし』

青子は急に来たクリス・ワインヤード——いや、ベルモットに驚いたようだったが、しばらくすると口を開いた。

「はい。えっと・・・さつきの人的好きだった人って・・・」

ベルモットは少し躊躇つたが、話しあじめた。

「ジンね・・・私が初めて会ったのは、私が20才の時だったわ。あの時、ジンは6才・・・シェリーとよく一緒にいたわ。あの2人は組織では有数の頭脳と言われていたし、外に行けない生活だったから、本当に仲が良さそうだった。あの時新入りだった私でもそう思つたわ。でここからが聞いて欲しい所なんだけど・・・」

ベルモットは少し間を置くと言つた。

青子の様子・・・すっかり忘れてましたね（汗）

けど、本当に私、文章が無駄に長くなつていきますね・・・本当は  
あつむりしたいところもあるんですけど、書きたいことが多すぎて・・・

どうにかなりませんかね？

次の次からは、コナンの様子に戻ります。後1回は青子の話、見て  
ください。

では

「あの2人はね、一緒に外へ出かけたのよ。洋服を見たり、テーマパークにも行ったわ。そして、抜け出すのが3回目になつて、外をうろついていると、富野明美——シェリーの姉を見たの。その瞬間一目惚れしたらしいわ。けどね・・・いる訳には行かなかつた。だつて本当は出てはいけなかつたのだから。その時、ジンは諦めたらしいわ。けど、我慢ができずに泣きそうになつたのよ。あのジンが。その時、シェリーが“また会いに来よう？絶対来れるよ！”って言つたわ。私、あの時、の方に命令されて尾行してたから、見てたの。ここからは想像なんだけど、あの後、ジンはシェリーにも恋してたわね。迷つた末の出来事だつたんじやないかしら。しばらく、あの2人は小さいのに付き合つてたみたいだつたわ。けど、シェリーは留学させられてジンは1人に・・・そんな悲しみに暮れて、何年もたつたある日、そつー——赤井秀一が富野明美と付き合つたのを見たの。その頃にはシェリーも帰つて来てた。あの時からだつたわ。ジンがシェリーを“もう離さない、2度も失敗したくないから”って言いはじめた。最初の方はシェリーも嬉しそうだつた。けど、時が経つにつれ、ジンは仕事に必要だからと連れていく事が増えたわ。シェリーも段々嫌になつたんでしょうね、もう、嫌そうな顔しか見せなかつた。そして、結局は逃げたのよ、姉妹2人共。だからもう・・・だから今、私が付き合つてるけど・・・ジンの慰めにさえもならないわね。あの姉妹とは大違ひだわ。姉は亡くなつたけど、シェリーは18才、まだ生きてる。だからジンはシェリーを探してるのよ」

「あの、ショリーさんは今18才なんですよね。ジンが9才の時、青子はどうしても違和感を感じる所があつた。

「あの、ショリーさんは今18才なんですよね。ジンが9才の時、

生きていたんですか？どう見たって三十才は過ぎてますよ」

ベルモットはやうに青子に寄ると言つた。

「そり。ジンは組織が新開発した、と言われた毒薬を飲んだのよ。組織の幹部になるために・・・そうすればジンの願いが叶うから・・・」

青子は驚いていた。組織には謎の薬があることに・・・また、ジンの願いがとても気になった。

しかし青子がそんなことを考えるより先にさらに衝撃的な事実を知らされる事になる。

「シーリーもその薬を飲んだの。けだジンが飲んだのは成長するための薬。シーリーが飲んだのは若返りの薬なのよ。実は薬は2種類作ってあつたのよ。私データを見に行つた時確認したわ。そう、組織にはその薬が必要なのだから・・・」

しかし、連絡手段が青子にはなかつた。そこでとても困んでいると、ベルモットがケータイを出した。

「これ、あなたのケータイよ。今、同じ機種のとすり替えてるから、伝えるんなら早くね」

青子はベルモットに感謝の気持ちで一杯だつた。青子は精一杯その気持ちを伝えた。

「ありがとうございます。こんな私に教えてくれて・・・」

ベルモットは笑つて答えた。

「いいのよ。もひ、こんな馬鹿げたこと辞めたほうがいいんだから」

しかしその2秒後、険しい顔をして答えた。

「まざい。誰か来るわ……」

そう言つとベルモットは早足で逃げていった。その後入つて来た人——それは、ジンだった。

「お前、さつき誰かと話していただろう。言え」

ジンの手は冷酷だった。その上、青子の頭に銃を突き付けた。青子は快斗に鍛えられた大胆さで、表情一つ変えずに言つた。

「誰も話してくれる人なんて・・・いませんから」

そう言つとジンは妙に納得して言つた。

「やうだな、ここには信用出来る奴しか通してないんだからな」

そう言つて去つていった。青子は安心しながらも心中ではびくびくしていた。しかし、もう慣れてきたようだった。それはベルモットが味方をしてくれた所が大きいかもしない。

これから青子はメールを打つ。この話を伝えるために・・・

## file56・ジンヒシヒローの関係（後書き）

青子バージョン2話にする予定ではなかつたのに・・・と少し悔やんでいるところです！

やつと次からコナン君ですね。あんなに大変なのに、じばらく無視されてかわいです 私のせい

でも、次からはコナン君です。これは絶対なので安心してください！！

ただ・・・長すぎで、せつかく読んでくださった方々が“付き合いで切れねーよー！”つていなくなりそなのがとても心配・・・

そんなことがないよう祈ります！！

ではー！

平次が病院に着き、コナンを医者に見せ、手術が終わったのを見届けると、病院の表に立つた。しばりへじてみると、哀をつれた蘭がやって来た。

「「あん、服部君！－色々用意してたら遅くなつちやつて」

平次は笑つて言つた。

「ええで、別に。」ひちやつてそんなに待つてへんしな」

しかし、次の瞬間、真剣な顔になつた。

「で、哀ちゃん連れて来ててくれたか？」

蘭は少々ためらいながら言つた。

「う、うん、連れてきたけど……こんな夜中にじりつしたの？哀ちゃんも大変だつたでしょ？」

哀は精一杯の皮肉をこめて言つた。

「ええ、とても疲れたわ。こんなに疲れてまでしてこないといけなかつたのかしら？」

平次は頭をかきながら言つた。

「キツイなあ、少しひらご我慢してくれや。ちよつと聞きたこと

があるんや」

「もひ、仕方ないわね、早くしなきことよ」

その2人のやり取りを見て、蘭は不審に感じたようだつた。それにいち早く察知した平次は蘭に言つた。

「ああ、姉ちゃんは帰つてええで！…姉ちゃんどこのまた行くわ！…じや、またな」

「えつ…ひよつ…！」

蘭は焦つた。このままだと、なぜ病院なのか、新一は大丈夫なのか・・など、聞けないからだ。しかし努力もむなしく、平次に無理やり帰らされてしまった。

その頃病院では哀、歩美、平次は3人で討論していた。

「で？蘭さん追い出したってことは、重要な話なんでしょう？」

平次は口を少し上げて、笑いながら言つた。

「ああ、当たりや。工藤が今まで聞かんかったいのんな事聞いたろと思つてな」

哀は一瞬びくつとしたが、それにめげず、言つた。

「あら、あなたが聞く必要はないわ。工藤君なら理由があるかもしれないけどあなたには理由がないもの」

哀は勝ち誇った顔をしていた。しかし平次が言つた一言で、それは崩壊した。

「今、工藤はやばい状態や。命には別状ないけど、かなり熱が出てるしな。もしかしたら後遺症が残る可能性だつて……だから俺らが聞いて、少しでもこの状況を直そうと思つたや」

そういう眼は真剣だった。哀はこれを見て、あっさりと折れた。

「仕方ないわ。言つわ。本当なんじょ？ 荒田やん」

哀は歩美に聞いた。歩美は小さく頷いた。

「じゃあ、荒田さん、少し席を離しててくれる？ あなた達はいないほうがいいの。これから生きていくには・・・」

哀は歩美をいたわりながらも、きつく有無を言わせない声で言つた。しかし今回だけは、歩美も引かなかつた。

「嫌だ！ …歩美だつて聞きたい！ …それに今からする話つて、誘拐してた人のことじょ？ 歩美が居たつていいもん！ …ね？」

そういうて平次に同意を求めてきた。平次は少し悩んでいたが、決めたよつて言つた。

「いや・・・ 今回は聞いてええで。むしろ他のメンバーも呼びたい位やな。今回は夜も遅いし呼ばんけどな。じゃ、話してもうおかそうじつてものす”い威圧感で哀を見た。しかしこれで哀も引き下がることは出来なかつた。

「なんだ？ 吉田さん、いや、少年探偵団のみんなを巻き込むの？」  
「んなの、私と工藤君だけで十分なのに……」

平次は、顔から威圧感を消すと、言った。

「恐らくなんやけじな・・・少年探偵団のメンバーの両親は、組織で働いていたはずや。だから、無関係じゃないんや。決してな・・・」

「

たすがに元まで言われると黙るしかなかつた。

そしてじばりくして話し始めた。丁寧に、細かく話した。哀は話すのにはかなり抵抗があつたようだが、最後まで話してくれた。

「なるほどな、いろんなことがあつたんやな。なんかスマンな。こんなに掘り下げて聞いてしもて」

哀は静かに言った。

「いいのよ。これはいざればなきなれどならなかつたことだもの」

「ナビ、ホントこきなり聞くと匪惑つなあ。つまく整理できへんわ」

平次は本当に心うつ思つていた。しかし一番匪惑つっていたのは歩美だった。

(分かんないよ。歩美のお父さん、お母さんってホントに悪い人?  
どうなの?教えてよ、ロナン君ー)

そう思いながら手術が終わり、眠っているコナンを見た。しかしコナンは何も答えてくれなかつた。

file57：追及（後書き）

2週間ぶりですね～＾＾

この小説を投稿したのは・・・  
停滞です・・・

すみませんね（汗）

今回コナン君一応出てましたよ。気づきましたか？

出す・・・つて程でもないですね。

哀ちゃんの役目があつたので・・・ね。

次話までは書いてあります！

次はもっとはやく投稿しますね

あと、英検昨日あつたんですよ～～  
受かつてたらしいな、と思います（汗）  
英語、壊滅的な成績なんです・・・  
神頼み！？

では、早めに投稿しますね

快斗は重い足取りで病院に向かった。しかし、それはさつきの出来事が恐ろしかったからではなく、コナンの体調を案じてのことだった。

しばらくして、病院に着き、先程言われたとおりの階へ行き、エレベーターから降りると、平次が見えた。

「あ、平次、どうだつた？」

快斗はできる限りの笑顔で言った。期待していたのだ、“なんでもなかつたわ。安心してええで！”と平次が言うのを。しかし、実際にはそんなに上手くいかなかつた。

「・・・快斗、工藤、意識、戻らんのや。下手したら・・・組織と戦えへんかも・・・」

「えつ！..あれば本人がケリつけないと意味ねえじゃん！..そんなのダメだ！！」

快斗は今にも暴れだしそうな雰囲気だった。平次は少し寂しそうな顔をしながら言った。

「快斗・・・実はな、工藤が前から調べてたらしいんやけど、これ見てくれるか？」

そういうて、一枚の手紙を取り出した。快斗は読み進めていくうちに唖然とした。なぜならそこにはこう書かれていたからだ。

“服部、黒羽、そして白馬、これを見てるとさ、俺はこういねえかも知れねえな。これは、それ覚悟で書いた手紙だ。今回ジンと会うなら死んでもおかしくねえからな。

本題は、一つは蘭のことだ。俺がいなくなつても、幸せでいらっしゃるよつにしてやつてくれ。蘭が幸せなら俺はそれでかまわねえ……蘭が幸せならな……”

そこにはたくさん書き直した跡があつた。それをみて、コナンの思いをさらに感じたよつて、その思いに感動すると同時に、気持ちを伝えられないかも……という事実を思い出し、いたたまれなくなつた。

続きを読むにはじめに書いてあつた。

“二つ目は、組織のボスのことだ。いろいろな「ネを使つて調べたところ、あの方は、FBIにいる。おやべりへ俺のこともよく知つてる奴だ。でなかつたらもう俺と服部は殺されてる。ハロウィンの時には……だから気をつけろ。下手に戦うより家に居たほうが安全だ。だから家に居てくれ、これは最後の願いだ。もつこれ以上願わねえから……”

細かいことはお前らにしかわかんないよつてあるといひて隠してあるから探してくれ。たのんだぜ”

やつづられていた。

「さう、工藤君は最初から覚悟していたんですよ。もしものことを・・・僕達と違つてね

「はつ、白馬……なんでお前が?」

快斗はびっくりしていた。背後に立っていた探の存在に・・・しかし、当の本人はそんなこと意に介さなかつた。そして会話を続けた。

「そう、工藤君はとても考えていたんですよ。それこそ僕達の何倍も・・・」

平次はそれに同意した。

「ああ、工藤、本当に凄いわ。死ぬかもと思つてんのに俺らの心配なんかせんでもええのにな」

平次はもうすでに泣きそだつた。それにつられて快斗、探も神妙な顔をした。

ソファで座つていた哀と歩美も同じような顔をしていた。

その日から5人はコナンの看病をした。たとえ雪で外が寒くとも、雨が降つても必ず1日1時間はみんな見に来ていた。

「まだやな。早く意識が戻らんかなー」

「気長に待とうぜ。あせりは禁物ぞ」

「やつですよ。ここは辛抱してください」

「すぐ意識も戻るわ」

「そうだよーだから落ち着いて!」

などと、話をしながら・・・

コナンが意識を失つてから、かなり経った、決戦3日前のある毎下がり、ちょうど、3人が集まつた頃だった。

「・・・今日もダメですか。もうすぐ決戦だといふのに・・・」

探がそういう落ち込んでいると、平次が声を掛けってきた。

「前は白馬が“気長に待とう”って言つてたで。俺らは結局それしか出来んのや。だから落ち着いて待つてようや」

平次がそう諭すと、探は少し笑いながら言つた。

「服部君にそういうわるなんて・・・僕としたことが・・・そりですな。気長に待ちましょうか」

そういうのを聞いて、平次は満足したよつだった。

快斗はケータイを見て深刻な顔をしていた。探、コナン、平次の順に顔を見回しながら・・・

そんな時、普段と違うことが起こつた。

「ん・・・あ・・・」

コナンの声だった。

file58・彼の復活（後書き）

コナンがやつと復活しましたね！

これで組織と戦えますね

嬉しい限りです

それはそういへ、3月7日から前売り発売されますよね？

皆さんは買いますか？

私は友達と一緒に買いに行きます！

前遅かつたせいでファイルもえなかつたんで・・・

そろそろ調子戻ってきた感じします！  
これからはもっと頻度上げたいです！！

では

それは夕陽の光が窓から差し込んで、あやつり一番綺麗に見える時間帯だった。

平次は急いで駆け寄ってコナンに話しかけた。

「工藤か！？」  
「か分かるか？」

コナンは平次の質問を聞いて、一回ベッドに座つてから周りを見渡すと言つた。

「病院……か？ そうこやジンに会つて……その後質問してから……」

「もう一回寝てろ。組織と戦うなら取りあえず体力つけないとな！」

そう言つたのは快斗。快斗は寝たのを確認すると、平次と探に話しかけた。

「で、どうする？」  
「今は闘える状態じゃねえ。足に後遺症が残るかもしれないしな。けどちゃんと闘わせてやりたいんだ……お前らはどうがいいと思う？」

平次は当然かの笑みを見せると言つた。

「闘つた方がええ。工藤が後悔する結果になるんは辛いしな」

しかし、探は全く反対の意見だった。

「僕は反対です。やっぱり周囲の方の悲しみを見たくありませんし・  
・」

そう言つた探の田には過去を思い出させるような雰囲気があつた。  
平次と快斗はそれには触れなかつた。

嫌な沈黙が訪れた。それを敏感に察知した快斗は自分の意見を言つ  
ことにした。

「俺は・・・アイツの思い通りにせせるべきだと思う。聞いといて  
なんだけどな。アイツが止めるんならそれもいいし、やるんならそ  
れもいいと思つてゐる」

快斗の意見を聞いて、2人ははつとした。

「やうやな。俺らが介入することやあらへん」

「僕、最近変ですね。そんな当たり前の事に気がつかないなんて・  
・」

平次と探はお互につぶやいていた。

その後しばらく大人しくしてみると、コナンが再び起きた。

「どうや? 疲れとれたか?」

「ああ、おかげまでな」

「ナンはやう言つて、ベッドから下りようと話を下ろした。

「――――――」

「ナンは足を見ると、あの時を思い出したよつだつた。

「ああ、あの時……」

「ナンは少しの間考えていたが、しばらくして、考えるのを止める  
とベッドの上に座つて3人に話しかけた。

「今日はいつだ？」

快斗はついに来た、と身構えると言つた。

「闘いの3日前だ。どうある?闘えるか?」

「当然。そのために色々やつて来たんだからな。もしかしてそんな  
心配してたのか?」

「ナンは笑いそつになつていた。無駄な事を考えていたであらう3  
人に向かつて……

「まさか。そんな訳ないだろ」

しかし「ナンは笑つのをやめなかつた。それを見ていて普段の日々  
に戻つた気分になつっていた。

「ナンは笑いがおさまると、再び質問した。

「それで、なんか情報集まつたか?」

快斗はそれを言われてすぐ携帯を取り出すと「ナンに見せた。

「青子からだ。色々書いてあんぜ。それ以外にも色々情報は集めといたからな」

その言葉を聞いて、探がパソコンを取り出した。それを立ち上げると文書ファイルをコナンに見せた。

「けどここに書かれた事を知つてるのは僕らと高木刑事、佐藤刑事だけです。それほど大事な話なんですよ」

コナンはそれよりもこじでパソコンを立ち上げた事を気にしていた。それで患者に悪影響を及ぼす事を気にしているのだろう。それに気がついた平次はさらつと言つた。

「これは白馬と快斗と俺が一緒に作つたんや。医療機具には影響を与えず防備が抜群にいいから安心せえ」

「お前らつて凄いな・・・」

そう言いながらその文書を見ていた。

その内容と自分がしか知らない事を組みあわせながら・・・

file59・目覚めた男の子（後書き）

やつとコナン君、まともに動きだしました。

次は平次とコナンの好きな人出します

その後戦う・・・はずです（、 、 、 ）

戦いのところは、文字数だけ増やして、話の数は減らす・・・という予定です。

少なくとも普段の2倍以上は書かれていると思います。  
だから投稿頻度自体は減る・・・という予定です。

皆さんは普段どうりか、やつを書いたほうがどちらがいいですか？  
教えてください！

ちなみに白馬君の過去は第一作で出したいたいと思います

読みたくないかもしませんが、書くので良かつたらよんでもうかい

m（・\_・）m

ではまた（^\_>）ノ

「ナンは長い休養をとったお陰もあり、足は少し痛む程度に回復していました。

担当の医者も看護師も明日には退院できると言つた。

「よかつたなあ！これで組織とも戦えるやないか！もし明日、田覚ましたんやつたら間に合わへんかったかしれんしな」

平次はその事実に素直に喜んだ。しかし快斗と探はいまひとつ納得できていよいよつだつた。

「どうしたんや？」「

平次が聞くと、快斗がためらいがちに話し始めた。

「今回、なんで、こんなに遅く田が覚めたのか気になるんだよ。大体、じいつは撃たれたことがあるんだぜ。そういうことに対する耐性が出来てたっておかしくねえ。そう・・・あまり本人の前では言いたくねえんだけど、何か後を引きずつたことがあの時あったんじゃねえか？」

平次はうなずくと呟いた。

「確かにそうやなあ。藤心当たりないんか？」

平次のがそう聞いた。もちろん、ナンの助けになるように、と考えてのことだった。

「えつ、ああ、あのな・・・」

コナンはとても焦っていた。平次の配慮はよく分かったが、それを教える事はできなかつたのだから・・・  
コナンはそんなことを考えながら、3人を見ると、快斗と探はコナンの気持ちが分かるのか、コナンに深く突つ込まない姿勢でいるようだつたが、平次はイライラしてるのが良く分かつた。

それを見て、手に持つていた缶コーヒーを落としてしまつた。コナンはそれを見て、自分がどれだけ焦つていたかを自覚した。

「あつ、大丈夫か？」

快斗が缶コーヒーを拾つてごみ箱に捨てた。そしてその後、平次に向き直り、言つた。

「お前・・・俺らみたいに組織になんか関わつてるだろ」

さつきまでと打つて変わつたその話にコナンはあるか、探までもが驚いた。

平次も2人ほどではないもののびっくりしていた。

「な、なんやねん、そんないきなり・・・」

快斗は少し間を置き、3人の動搖が収まつてから言つた。

「いきなりじやないぞ、俺らの作ったファイルを見ろ」

そつ言われ、コナンと探は、ベッドに備え付けられている机の上のパソコンを見た。

しばらく2人は考え込んでいたが、何か見つけたのか、同時に頭を

あげた。

そしてコナンが言った。

「ここの一文を見てみる、服部」

そしてある一文を見せた。

“ 1990年、大阪にポルシェ356Aを発見。その車を停めた建物の内部ではボスと呼ばれる人物がいた。 . . . ”

そして探も言った。

「たぶん黒羽君は気づいたんですね . . . 警察にはこんな記録がないことに . . . そうです、こんな普通のこと書いてあるはずがないのですから . . . それに、僕も、黒羽君も、工藤君も、この年には大阪に行つていません。だから分かつたんです。君の思い出だとね . . . 」

平次はそれを聞いて、あきらめたのか、話し始めた。そのときのことを . . .

前回は平次、コナンの好きな人を出す！

と言つておきながら病室での話を出してしまいました（汗）  
次回も・・・と思つている方も多いでしうが、次回は蘭たちです。  
というわけで、平次の過去は短編で出します！

よかつたら読んでくださいね

白馬君のほうは、第2編になつてからしか関係しないのですが、平  
次は第一編に関係します。

が、ここで書かなくてもいいかな、という判断です。

\*ついにPVアクセス10万突破です！

ユニークも3万行きました！

これは読者の皆様のお陰です！  
本当にありがとうございます

「なんで・・・なんで・・・新一は私に言ってくれないの?」

蘭はそう言葉を漏らした。隣に和葉が居るにも関わらずそんなことを言つてるのは訳があった。

それは昨日コナンの見舞いに行つた時だつた・・・

「やつと田代覚ましたで!! 姉ちゃん来てみいやー。」

服部からせう電話を受け、園子と遊ぶのもキャンセルして、急いで病院へ向かつた。そしてコナンの病室へ向かい、ドアを開けようとした時のことだつた。

「まだ、毛利の姉ちゃん来んよな?」

「当たり前じやないですか。さつき電話したばつかつのこ

「そう言ったのが聞こえた。

(服部君と白馬君の声だわ)

そう分かると、蘭は気配を消した。コナンたちは油断していたのか、蘭に気づくことなく続きを話し始めた。しかし小声で話していくたらしく、といひながら途切れき終えた。

「お前は・・・闘つて・・・命を落としたら・・・毛利の姉ちゃんが・・・やないか」

「でも、俺はやらねえと。・・・と新一として会いたい・・・だろ？」

「わづですよ、彼も・・・だし、・・・」

「そやな。分かつたわ。頑張りや！」

「でさ、俺らの分担・・・ねえから・・・」

それからじばらく聞いていたが、「ナンが闘う」と、死ぬかもしけないことを聞くと、蘭は静かに病院を出た。

家に着き、自分の部屋に入ると、今まで耐えていた分、一気に涙が出てきた。

その涙はずつと止まらなかつた。どれだけ泣いても、泣き止まなかつた。

蘭は夕食を作ることも出来ず、蘭を慰めようとした和葉にも“構わないでよ！”と半ばキレ氣味で言つてしまつた。

蘭はその夜、寝ることも出来なかつた。

2人はじばらく氣まずい雰囲気になつていたが、和葉は名案を思いつくと、部屋を出て行つてしまつた。

「新一・・・私はどうでもいい存在なの？大事な話も出来ないよう

な・・・

蘭は夜空を眺めながら言った。眠れば自然と感じられず、ただ、悲しみだけが襲つた。

しばらく黙つとしていると、蘭の部屋のドアが開いた。その主は和葉だつた。

和葉は少し笑つと言った。

「蘭ちゃん、何の助けにもなれへんかもしだへんけど、多分、今必要なんはこの人やと思うで」

やつこいつと和葉の後ろからコナンが出てきた。

「ほな、頑張りや〜〜〜！」

和葉はやつこいつと部屋から出て行つてしまつた。

蘭とコナンは2人きり・・・

自然と、気まずい雰囲気が流れた。

最初に話し始めたのはコナンだつた。

「戻つてきたんだ。まだ少し痛みが残つてゐるけど、安静にしてれば大丈夫」

「やつこいつ・・・よかつたわね・・・」

コナンは心配になつた。その反応はおもいがけなかつたからだ。

「ら、蘭？」

「なに？」

蘭自身は気づいてなかつたが、蘭の目から一粒の涙が流れていった。コナンは蘭の近くへ歩み寄ると、ゆうくつと、落ち着かせるようと言つた。

「どうした？ 大丈夫か？」

「……んで……なんで、私に言つてくれなかつたの？」

コナンは驚いた。まさかこんな日に限つて聞かれるとは思つていなかつたからだ。

「私だつて、新一の力になりたいよ！ 別に一緒に戦えるなんて思つてない。けど・・・けど・・・せめて心配事とかは聞いてあげたい！だから、私にも教えて！」

蘭は涙を流しながら言つた。それは本気でそう思つているからこそ眼だつた。

コナンはそれを見て蘭には言おう、と決意した。

「『めんな、蘭。俺はお前に言えなかつた・・・ホントに勇氣ねえよなあ・・・お前と違つて・・・けど、今なら言える・・・俺、明後日、闘うんだ。組織と・・・お前に言つと無茶しかねないから黙つてたけどな・・・本当は服部とかを巻き込んだことに不安があつたんだ・・・お前がそういうつてくれるだけで少し安心できた。ありがとな』

これが今のコナンに言える最大限の言葉だった。蘭に言つたその言

葉は本当に嘘偽りはなかった。蘭はそれを聞いて笑うと言った。

「うん。これからも心配あつたら何でも言つてよー。新一が安心できるようにしてあげるから・・・」

それから2人の空気は穏やかになつた。

それらをドアのそばで聞いていた和葉は言つた。

「かわいいなあ、蘭ちゃん。工藤君もかつじええわ。けど、今は・・・」

やつこいつと和葉は外に出で行つた。

今日仕上げました！  
早速投稿します

そういや、もうすぐコナンとルパンのアニメ見れますよねー。  
結構楽しみにしてるんですよ、私

では、次回の和葉バージョン楽しんでくださいね！  
出来次第載せます

和葉は蘭たちのもとから去ると、平次が今いるであろう、杯戸ホテルへ行くため、待たせていたタクシーに乗った。

タクシーのドアが開くと、和葉はそれに乗った。

「じゃめんなあ、待たせてしもて」

和葉は申し訳なさそうに言つた。

「いいんだよ、お友達のことが心配だつたんだろ？タクシー代もただでいい。だから自分のことも頑張つてこいや」

運転手は笑つてそついた。それを聞いて和葉は驚いた。

「な、なんでおつちやん、うちの思つてたこと知つてるん？うち一言も言うてないはずや。なのに・・・」

運転手は笑つていた。それには可愛い子どもを見ているような雰囲気があつた。運転手は非科学的な推理を話した。

「君の言動を見てたら分かるよ。僕も同じ経験をしたことがあつたからね。重ねあわせたら、簡単だつたよ、あ、もうすぐ着くね。降りるかい？」

そつとわれ、和葉がお金を取り出そつとすると、運転手は和葉の前に手を置いた。

「君は払わなくてもいいよ。これから人生でもつとも大変な時がある。だから、もしお金が払いたいんだったら、また僕のタクシーに乗ってくれ。それでいいだろ?」

和葉は紳士的な運転手に感動した。都会でこんなにいい人を見つけてのは初めてだつたからだ。

「じああ、おっちゃんまた今度乗るなー!」

運転手は笑いながら頷いた。それを見て和葉はタクシーから降りて、ホテル内に入つていった。和葉が見えなくなると、その運転手はタクシーを降り、言った。

「ありがとよ、うちの蘭を助けてくれて・・・本当に感謝してる・・・

・

和葉は建物の中に入ると、平次が居る10階へ行くため、エレベーターへ乗つた。

すると一緒にに乗つっていた金髪でロングヘアにしている外人の人が声をかけてきた。

「何階に行くの?」

「10階です」

その女人人は10階へのボタンを押した。少し経つとドアが閉まり、エレベーターは上へ昇つていった。

9階まで上つた時、女人人が話しかけてきた。

「JJKのホテルは今は危険よ。あまり来ないほうがいいわ」

「へっ？」

和葉はいきなりの言葉のあまり、間抜けな顔になってしまった。それを見て、女人人は有無を言わさぬ、といった表情で言った。

「これは聞いておいたほうがあなたのためだから」

そこまで言われると言い返すことも出来なかつた。

10階へ着き、和葉が降りると、その女人人は言つた。

「JJKの17階では組織のメンバーが集まつてゐるんだから・・・あの子の友達なら・・・危ないわ」

和葉はエレベータを降り、平次がいる1008号室へ向かつた。

(平次・・・平次・・・お願いやからおつて・・・)

そう思つて部屋に着くと、平次は居なかつた。

「平次・・・おらん・・・なんでなん?」ひの気持ちぐらいで聞いてくれてもええやん!」

そう言つた時、和葉の目から一粒の涙が零れ落ちた。その時、後ろから声がした。

「あつ！..和葉やないか！」

そう――その声は平次だった。平次はたまたま外出から戻つてき  
たところだったのだ。

「ぐ、平次？」

和葉の顔を見て平次の態度はいきなり変わった。

「か、和葉！？泣いてんのか？とりあえず俺の部屋に入りや  
そして和葉に聞いた。

平次はそうじつて和葉を部屋の中まで連れて行つた。  
そして和葉に聞いた。

「なんであんなとこにおつたんや？」

和葉は黙つていた。半ば意地にもなつていた。そのまま和葉がすつ  
と反応しないで居ると、平次は和葉に抱きついた。それはほんの一  
瞬のことだった。

和葉はその瞬間心拍数が上がり、顔も赤くなつていた。  
しばらくして、平次のほうから話し始めた。

「『めんな・・・俺んとこ来たんは俺が危険な』ことするから・・・  
なんやろ？俺がお前とどんだけおつたと思つてんねん。そんぐらい  
気付くわ。俺はな・・・どうしてもその組織と戦う必要があるんや。  
危険やと分かつてる・・・けどな、俺は行く。でもこれだけは言え  
る。俺は死なへん。生きて和葉の元へ帰つてくる。それは約束や」

「こやや――うち、前、平次を笑つて送るとか言つたけど、実際そ

んなことでできへん……つちは平次がおらんとやつていけへんもん  
！…お願いやから平次、そんな危険なこと止めて！…」

和葉の言葉を聞いて平次は行くのを止めようと一瞬思つてしまつた。  
しかし再び思い直すと、和葉を今までよりも強く抱きしめ、言つた。

「和葉・・・俺を信じじろや。俺は絶対に和葉との約束を破らへん。  
な？だから安心しいや」

平次は和葉を抱きしめていた手を離した。その時和葉は平次の顔を見た。その顔は“きらきらしてゐる時の平次”そのものだつた。それを見て、和葉は言つた。

「うん。それでこそ平次や！…」

そういうて和葉は笑つた。その顔を見ると平次も朗らかな気分になつてきた。その後、平次は言つた。

「和葉、眼え閉じろ」

「えつ？」

和葉は戸惑つた。脈絡のないその発言に。しかし、和葉は平次に言われたとおり、眼を閉じた。

平次はそれを確認すると、和葉の唇にキスをした。

和葉は顔が赤くなつた。しかし、平次も赤くなつていた。  
しばらくすると、キスを止め、言つた。

「これは約束のしるしや」

平次はかなりテレながら言った。今日は、和葉も喧嘩を売らなかつた。

「うん・・・」

その日はこの2人にとって思い出の一日となつた。絶対忘れることがない一日に・・・

file62・和葉の想い～平次に向けて（後書き）

今回は長かったです。ハイ（汗）  
けど、結構私としては気に入ってるんですよ！

平次君・・・大胆でしたね（\*）▼

あ、そういう、和葉が前言つてたことはfile14・和葉の気持  
ち、に書いてありますので、確認したい方は読んでください！  
次から本当に組織編！！

書く私も楽しみにします。+・（ 、 、 、 ）。+・  
後もう少しです！

ついてきてくれますか（笑）

では、また次回お会いしましょう（\*、・、・）  
”（・、・、\*）

\* file60修正いたしました。1985年 1990年です。

今日は長い間待ち望んだ、組織と決着をつける口・・・そのせいか、コナン、快斗のみならず、平次、探までが緊張していた。4人はFBIの借りているビルで、話していた。

「やつと来たつて感じやなあ」

平次が言った。

「ああ、色々あつて結局先になつたからな。今日はやつと・・・本當に・・・」

コナンがそうしみじみと思つていると、隣から快斗が口を挟んできた。

「けど、これでやつと因縁が断ち切れるんだ。今日はその記念すべき口だと思おうぜ」

そこまでもう言つた時、ジョナイトがコナンたちを呼びに来た。

「行くわよー白馬君、コナン君はここに居て・・・いや、白馬君だけでいいわ。君は行きたいんでしょ? どうせ止めても同じなんだか

「ら

「分かってるなら最初から言つてよ。ね?」

そつ言つと、白馬を除く3人は出でいった。

「頑張つてくださいよ、快斗君、平次君・・・そして工藤君・・・」

「けど、赤井さん迷惑じゃなかつた？僕達を車に乗せて。ジヨーティ先生の車でもよかつたのに」

コナンは言つた。――そう、ここは赤井秀一の車。赤井はコナン達を組織のアジトへ連れて行こうとしていた。

「いいや。君たちはかなり頭がいいみたいだからな。怪盗キッド、西の高校生探偵、東の高校生探偵の3人なんだから・・・」

「えつ？」

コナンをはじめ、平次、快斗の3人は、驚いていた。無理もない。一度も赤井には正体をばらしたことはなかつたのだから。それを読み取つたのか赤井は言つたつて普通に言つた。

「分からぬいはずがないだろ。怪盗キッドは黒羽盜一がなくなつてから再び現れた。そして組織の求めている宝石ばかりを狙うなんて偶然とは言ひがたいだろ？ただ、工藤君がコナン君だと気づくのには時間がかかつたな。まさか、幼児化なんてそんなことあるかと思つていたのが間違いだつた。そう・・・あの子に会つまでは・・・あの子を見たら、幼児化のことを認めるしかなかつた。そこからは簡単だつたよ。毛利探偵が出てきたのが、君が探偵としてテレビに出てこなくなつたちょうどその時なんだから・・・それさえ分かれば十分さ。だから分からぬいはずがないと言つたんだ」

コナンは赤井の話を聞いて聞き返した。

「あの子つて言つのは灰原のことですよね。やっぱり赤井さんは知つてたんですね。まあ予想はしましたけど」

赤井はそれを聞いて言つた。

「まあな。あの子の薬の話は聞いた事があつたからな。髪の色もそつくりだつたし間違いないと思つてね」

赤井がそれを言つて以降誰も話さうとはしなかつた。  
その代わりみんな物思いにふけつっていた。

コナンは蘭に出かける前にもらつたお守りを強く握つていた。

(絶対・・・絶対戻つてくるからな・・・蘭・・・)

平次は和葉との思い出の品でもある、鉄の鎖が入つたお守りを付けた携帯を眺めていた。

(和葉・・・お前に言つたことは必ず実現させなあかん。やから今死ぬわけにはいかへんのや。待つとけよ、和葉。必ず生きて戻つて来たるから・・・)

快斗は青子のことを思つていた。

(青子・・・俺がちゃんと守つてやれなくてごめんな。代わりに今助けてやるから・・・こんな俺でも出来ることはあることだけ分かつて欲しいんだ。お願ひだから生きててくれ。頼むから・・・)

さらに、赤井も明美のことを思つていた。

(俺も明美が好きだ……お前が泣いた時は本当にずっと一緒にいたいと思った。だが……結局お前は俺のせいでのんで死んでしまった。その敵を今、討ちに行く。だから……安心して眠つてくれ、明美……)

彼らは今からそれぞれの思いを抱えながら戦いの場へ踏み込んでいく。それぞれの大好きな人を守るために……

file63・待ち望んだ日（後書き）

ついに決戦！！

まだ組織のアジトへは入っていません（汗）

けど、やつぱり決戦のプロローグ的なものが必要ですからね。

今回は書きました！

今日は作品を書けそうです！

まあ、最近はそんなに投稿できていません・・・（・・・・・）  
だから頑張りますね！！

やっぱ決戦となると深く考えないといけない・・・

それは結構大変ですね・・・

あともう少しです！

誰か私にやる気を出させてくださいー！

最近なんかやる気が低下して・・・

お願いします！

それではまた ^ (\* · · · )ノ

コナン達はついに組織のアジトまで来た。そつはいつても3キロ以上離れた街の中からぼんやりとしか、今は見るのは出来なかつた。

「あれが組織のいる場所・・・」

コナンはそう言つた。しかし、一同は驚いても無理はないと思つた。それもそのはず。彼らの使つてゐるビルは廃ビルといつては新しく、また、広々、高さ共に普通のものを越してゐた。

「こんな東京都内に銃声も聞こえない場所があるとはな・・・」

赤井は素直に驚きを表した。平次はそれを聞いて何回も頷いた。

「俺もそう思うたわ！あんな排気ガス充満しとるよつた地域ににこんな静かな場所があるなんてなあ」

しかし、快斗はそれよりも違う事で頭が一杯だつた。それを見た平次が快斗を心配したようだつた。

「どうしたんや？めっちゃ凄い顔しどつたで？そりやあ、青子ちやん心配なんやううけど余計な事考えたら失敗してしまつかもしれへんで？」

それを聞いて快斗は返事した。しかし、それは平次が思つていた返事とは違つものだつた。

「確かに青子は心配だけど、あいつは大丈夫な気がする・・・それ

より俺は鳥取にあつたアジトをここまで持つてくる必要性があつたのか、それが気になるんだ。それが今回の重要なポイントになる気がしてな」

そう言つた快斗に続き、コナンも言つた。

「俺も・・・それは気になつてたんだ・・・けど古い方は任せようぜ・・・恐らく関連性だけがカギだ・・・そう踏んだからお前らはこちらに来た。・・・だろ?」

平次を始め、快斗、赤井もが首を横に振つた。そして平次がコナンに語りかけるように言つた。

「いや、確かにそれもあるけどな、俺らは全員組織の被害者や。な？」

そう言つて平次は快斗や赤井を見た。2人はそれに感づいたのか言った。

「そうだよ。俺も父さんの敵討ちたいし」

「それに俺だつて明美のことが・・・な」

その後、間髪いれず、快斗と赤井は言つた。

「せういや、体調大丈夫か?さつきからやばいんじやないか?」

二人は同時に言つた。それがハモつていたので、平次は笑つたが、快斗と赤井はそれどころではなかつた。

「今日はやめとくか？今ならばれないから引くのも手だ」

赤井はさらに言った。それを見て、平次はスポーツバッグを持ち、赤井の横に割り込んだ。

「ほら、早う着替えてこいや。もうすぐジヨーデイ先生来んで！」

平次の荷物を受け取るとコナンは叫んだ。

「ああ・・・行つてくる・・・」

そう言つてコナンは座りこんでしまった。平次はそれを見るとコナンを抱き抱え、バッグを肩に掛けると言つた。

「効き目早いなー。しゃーないわ。俺が連れてつたるーあと何分ぐらーや？」

「ナンはとても苦しそうだつたがはつきりと言つた。

「あと・・・3分ぐらいだな・・・」

「分かつた。それやつたら間に合つわ」

そういうと平次は全速力で走つていってしまった。平次は焦つていたので何があるのかさえも聞かされず取り残された快斗と赤井は呆気にとられていたが、快斗が何か気づいたようだった。快斗はふつと笑うと、車の中から何か取り出した。それを見た赤井は快斗に聞いた。

「何をしているのか分かつたのか？」

赤井のその質問に快斗は丁寧に答えた。

「はい。赤井さん、あいつの正体知ってるんでしょ？…だったら考えてみてください。意外と簡単に分かりますよ。まあ、待つてれば分かりますが」

それを聞いて赤井は何をするのか悟ったようだつた。そして再び快斗に話かけた。

「あれか。しかし…・・本当にあるとはな・・・驚きだ。俺の言つた話は理論上の話だつたからな・・・本当に見るのはないと思つてたんだ」

そつ言つたきり赤井は話さなかつた。快斗もムードに呑まれたのか、話すことはなかつた。しばらくすると、平次達が帰つてきた。2人の予想通り、平次の隣にいたのは“江戸川コナン”という小学1年生ではなく、“工藤新一”といつ高校2年生だつた。

「ほら、工藤やで！」

平次がそつこうと新一は快斗と赤井の方に向き直り、話しあじめた。

「俺、この姿で組織と鬪おうと思つんだ。やつぱり小をこと不利だしな」

そつ言つてニカッと笑つた。それを見て快斗はとても喜んだ。

「うん…それがいい…やつぱ真剣にやりたいしな…あつ、やつやつ、これやるよ…」

そう言つて快斗はバッグから銃を取り出し、新一に渡した。

「それの中身は実弾だ。父さんの部屋で見つけたんだ。今渡したのは2つだけだけど、銃弾は一杯ある。だから持つとけよ」

そう言つてバッグも投げた。新一はそれを受け取つたが、戸惑いがあるよう言つた。

「俺、外したらどうすんだ？ 昔やつたきりだから自信ねえぞ？ キッドのお前が持てばいいんじやねえか？」

新一の発言は最もなものだつた。赤井もその意見に同意した。

「確かに。君は凄いがプロが持つたほうがいいかもしない。やはり、銃は危険が付き物だからな」

その発言を聞き、快斗が思いつきり笑いはじめた。

「まさか！ あいつの方が俺より銃の扱い方は上手なんだぜ？ それに世間にござわせた時計台の事件あんただろ？ あん時、あいつが撃つてきたんだ。俺、あれを見て、捕まつちまうかと思つたもんなー。だから安心しな。多分赤井さんには敵わねえだろうが、俺よりはうめえよ！」

それを聞いた平次は新一の肩の上に手を置くと言つた。

「本当、俺の見込んだライバルやわ！ 俺はやっぱ刀やる！」

そう言つて腰に刺した2本の刀を見せた。

「成る程。真剣か。これは期待出来そうだな。君が負けたって悔しそうに言つてた沖田君はジュー・ア・チャンピオンらしいからな。君はこういつことがあるだろ？と思つた時から習つているんだろう？君の父に」

「まあな。少ししゃくやつたんやけどな」

平次は照れながらも言つた。平次は話題を変えるため、新一に話しかけた。

「そういえば阿笠のジイさんに頼んで作つて貰つたんやろ？・サッカーボール。結構凄いんやろ？」

新一は頷いた。そしてポケットから小さな箱を取り出すと言つた。

「これや。ピンを抜くとサッカーボールになるらしきぜ。30個あるからどうにかなんだろ」

それを見て快斗は驚いた。

「どうやつて作つたんだ？こんなもん見たことねえ。その博士に会つてみてえ！」

快斗はかなりテンションが上がつていた。手の付けられない程だったので、新一はさらに話題を変えることにした。

「で、黒羽は何を持つて行くんだ？」

そう聞かれ、我に戻つた快斗は照れながら言つた。

「いけねえ。すっかりテンション上がつちまつたぜ」

そう言つたあとキリッとした顔になつた。

「俺は怪盗キッド用の道具さ。まあ改良とか、装備品を増やすのかはじこちゃんに頼んでしたんだけどな」

そう言つた後、快斗は後ろに指を指した。

「FBIと CIAだぜ！俺らもそろそろ行くか！」

そう言つてみんなは車に乗ると、組織のアジトに向かつていつた。  
しばらくして組織のアジトに着くと赤井が言つた。

「先に入った部隊がある。だから今出てもばれないはずだ。行くぞ」

その言葉を聞いて、3人は車を出ると、中へ進んでいった。  
楽しい未来を守るために・・・

すみません・・・  
余計なものばっかり・・・  
そういうのを書くのだけは発達してしまったよつで・・・  
馬鹿です、ハイ；；

あ、今回の「ナン対ルパン見ましたか？  
私、最後のほう結構気に入ってるんですよ！  
もう一回みようかなー。

本当に次からちゃんと組織の中かきますので！  
本当だめですね・・・書きたいこと自制しないと・・・  
では！

## file65・どうどう突入！！

中に入ると、そこではFBI、CIAの人々が、組織の人間と戦っていた。

新一達は今日のために持ってきた道具を使いながら上に登つていった。

快斗は10階に来た時、その状況を見て小さい声でつぶやいた。

「これ、ヤバイな。マジで俺ら死ぬかも・・・」

それは新一も平次も思っていたことだった。赤井はこういう状況になつたことがよくあるからか、あまり反応はしなかつたが、高校生三人組の思いは本物だった。

しかし、真っ先に立ち直つたのは、平次だった。

「ここである方が絶対ヤバイで！！取りあえず上あがりつつや」

その案を赤井は否定した。

「いや・・・今は劣勢だ。だから俺がここに残る。片付けたら行く！だからお前らは先に進め！」

赤井はそれが最善策だと判断していた。もちろん、それは半分賭けだつた。戦闘経験がない人間を先に進ませる事に抵抗があつたからだ。しかし、今回だけはこの3人に賭けたのだ。3人はこのフロアの広さを見て判断し、言つた。

「赤井さん、お願いします！任せますね！」

「いつまでも上り下りで走り回って行ってしまった。

「頑張れよ。君達なら出来るはずだから・・・」

13階まで登った時、小さな物体が快斗の所にやつてきた。

「なんだ？それ」

新一はその物体を持ち上げた。快斗は新一の手から物体を取り返すとその物体をなでながら囁いた。

「これはグランパパだよ。警部からもひつたのを改良したんだ。これで青子の居場所が分かつたぜ！」

そう言つと快斗はケータイ型をしたものを取り出し、ある映像を映し出した。早送りしながら快斗は素早く確認していき、青子が写つたところで停止ボタンを押した。

「青子は18階だ。騒ぎに乗じてじゃないとグランパパは壊されるかも知れなかつたからな。良かつたぜ、壊されなくて。じゃ、俺は青子を助けに行く！後はよろしくな」

快斗はいつもと上に行つてしまつた。新一と平次は危険の及ばない物陰に隠れると、

「行つたぜ、あいつ・・・でも妙だ。なんでここは地下がねえんだ？ここは例えれば城だ。いくら広いからつて逃げ道を用意しないのはもしもの時ヤバイだろ？それに、俺の予想では機密は地下にあると踏んでたのに・・・」

新一はかなり深刻な顔で言った。それに加えて平次も疑問を口に出了した。

「あんな、俺も気になる事があるんや。それはここの人數や。新設したんなら、もっと人數少ないはずや。そう踏んだからFBIらの人数が少ないんやろ?で、苦戦した・・・と。もしかしたら鳥取の方は人があんまおらんかもしれへんなあ」

新一と平次はしばらく考え、上に登る事に決めたようだつた。しかし、次の瞬間、2人の考えは180度変わつた。

そう、新一のケータイに電話がかかってきたのだ。新一はそのケータイを平次に渡し、護衛に回つた。

『工藤君と服部君ですね?快斗君は恐らく君達とはいないんですね?助けに行つたでしそうから・・・』

探は一息つき、深刻な口調で話しあじめた。

『実は・・・鳥取の方はあまり人がいないうです。というかしたつぱしか居ないみたいで・・・もしかしたら狙いはこれだったのかもしれませんね。僕、そっちに行きますね。さつき変わつてもらいました』

平次はそこまで聞いて、やっと口を開いた。

「なるほどなあ。よく考えてんで。感心するわ

平次はそこからすつと真剣な表情になると、探を諭すよつて言った。

「いや・・・あんたはあのガキ達を見てて欲しいんや。このままやつたらあのガキにまで危険が及ぶからな。得に灰原つて子をな」

探が不満なのは電話越しに分かった。しかし、冷静に情勢を判断した探は了承したようだつた。

『分かりました。気をつけて下さい。あの子達はちゃんと守りますんで』

その一言を聞き、平次は電話を切ると新一に返した。

「ヤバイな。今、監視をつけてないんやつたら・・・つて工藤？」

そう――平次が話している間に正面には敵が現れていたのだ。その相手は新一が小さくなつた元凶の人物、ウォッカだつた。ウォッカと新一達は15メートルほど離れた、柱の端と端に立つていた。

「お前らの相手は俺だよ。の方はスピリタスと戦うのを楽しみにしていらっしゃるようだが・・・ここで殺した方が早いだろ?」

そう言って銃口を新一に向けると撃つてきた。新一は避けたり銃を撃つて相殺したりしながら応戦していた。新一は隙を伺い、ウォッカに聞いた。

「赤井さんは味方なんですか?」

ウォッカは手を止めると怪しげな笑みを漏らした。サングラスをつけているせいか、その笑みはかなり不気味だつた。

ウォッカは銃口を新一の方に向けると、口を開いた。

「まさか、仲間な訳ないだろ?。これで本当にやらばだ。工藤新一」

ウォッカはそう言つと、引き金を引いた。新一はさつきまで銃を下ろしていたので、反応が遅れてしまった。新一は死を覚悟し、目をつむると動かなかつた。しかし、新一カン、と音が鳴り、銃弾が自分を貫かなかつたのが分かると新一はマヌケな声を出していた。

「あれ？」

新一が目を開けると、正面にに剣を構え、銃弾を跳ね返した平次が居たのだつた。

「工藤、お前マヌケやなあ。避けれるはずやで？　あいつはお前が倒しゃ。そうしたいやう？」

平次は全てを見透かしている——新一はそう思つた。そして新一は左手をポケットの中に突つ込むと、小さい物体を3つほど出し、地面にばらまいた。

ウォッカはそれを見て油断したようだつた。

「勝つたな」

ウォッカがそう呟くと同時にそれはどんどん大きくなつていつた。ウォッカは反応が遅れたせいで2つしか打ち返せなかつた。

新一は残つた一つを思いつきり蹴つた。それはウォッカの顔面に衝突し、ウォッカは意識を失つたようだつた。

それを確認すると、ウォッカの所持していた銃を全て取り出すと、離れた所に投げ捨てた。

そして、手足を縛り付け、動けないようにした後、新一は言った。

「お前のお陰で助かつた。ありがとな」

平次は照れ臭いのか、頭をかいた。

「改まつてええて。取りあえず薬の『データ探さな

その時、平次は柱にぶつかった。するとその柱は回転し、平次は落ちていった。それを見た新一は自分もその中に飛び込んだ。落ちていく流れに乗りながら平次は新一に聞いた。

「なんでお前まで落ちて来たんや？ アホちゃうか？」

それを聞いて新一は頷いた。しかしそれは肯定の意味だけではなかった。

「確かにバカかもな、俺。けどな・・・探偵の勘で何となく落ちた方がいい、と思つたんだよ」

「探偵の勘・・・なあ」

平次は何となくだが納得出来る気がした。だからか、それを呟いていた。

新一は平次と落ちている間に蘭に呼ばれた気がした。そう――東都タワーの事件の時のように・・・

それは新一と蘭の絆がそつさせたのかもしれない。古くからの切つても切れない絆が・・・

## file65・どうどう突入！！（後書き）

前の更新から2週間以上たったんじゃないでしょうか（汗）  
さまざまな理由により投稿が遅れました。

春休みの宿題が終わらないってのと、テストがあつたのが関係して  
ます。

でも！…じつはもう一話書てるんですよ  
それは何日かしたら投稿します^\_^

あ、平次の中学生の時の組織との思い出について、投稿しました。  
まだ1話しか書いていませんがよかつたら読んでみてください！！

では！！

蘭は園子の家に向かつて走っていた。

蘭はかなり焦つていたので、蘭は誰かとぶつかってしまった。

「すみません。急いでて・・・」

その人は優しく微笑んで答えた。

「いいですよ。つて蘭さんじゃないですか！どうしたんですか？」

そう――ぶつかつたのは涉だつたのだ。周りには美和子、千葉、白鳥といった捜査一課のメンバーが集まつていた。

蘭は時計を見て時間を確認した後、少し早口で聞いた。

「今日はどうしたんですか？確かに今日は非番つて聞きましたけど」

蘭の問い掛けに美和子は深刻な顔付きになつた。そして、蘭の耳元で小さい声で囁いた。

「あのね・・・ある事件が署内で起つたの。それを調べるために私達特別に派遣されたの。それでお願いなんだけど・・・毛利さんにも協力を頼めないかしら。全て話すから・・・ね？」

そう言われ、蘭には思い当たる節があつた。

「それつてもしかして・・・」

そう思い、美和子に自分の思つたことを簡潔に話した。すると美和

子の顔が驚きの表情に変わつていった。

「えつ？どこからそれを？」

「昨日園子に聞いたことと私の知つてることです。もし、本当なら危険だと思ってたんですが・・・本当だったみたいですね」

蘭は再び時計を確認すると4人に向かつて提案した。

「あの・・・今から園子ん家に行きませんか？私が頼んで情報を前々から集めてもらつてたんです。多分役に立つと思いますから・・・」

最後の方は小さい声になつてしまつたが、4人は聞き逃さなかつた。

「分かりました！行きましょう！」

涉は言つた。他の3人も頷いた。それを確認した蘭はすぐに走り出した。しかし、小五郎に伝えることは、みんなすっかり忘れていた。

しばらく走つて園子の家に着くと、園子が直々に迎えてくれた。

「京極さんも居るけどいいよね？ってなんで後ろに刑事が一杯いんの？」

園子はそう聞き返した。蘭は少し申し訳なさそうな顔をしながら言った。

「成り行きで・・・ね。じゃ、入つていい？」

「じゃ、詳しく述べは私の部屋で」

園子はそう言つと2階へ登つていった。

園子についてこき、部屋に入った涉は驚きの声をあげていた。

「広いー園子さん、凄いですねえ。僕なんて、自分の部屋なかつたんですよー羨ましいなあ」

園子は普段は見せない寂しげな顔をすると言つた。

「けどあまり友達は来ないわ。蘭ぐらいかしら、来てくれるのはね。なんか厭味に見えるみたいよ。ま、仕方ないけどね」

そう言つたのを聞いた真は園子の田の前に立ち、言つた。

「僕はそう思いませんよ。」( )は園子さんが住んでる家。それ以外の何物でもないです。だから・・・そんなこと言わないで下さい。そつ思わくなれば他の人も来てくれると思います」

最初蘭は冷やかすつもりだつたが、それは出来なかつた。

園子の生まれながらにして持つてしまつたその「コンプレックスクスに気付いてあげられなかつた・・・それが辛かつた。

周りにいた刑事達もそういうモードに引き込まれていつた。

それにいち早く気付いた園子は、両手を何回か叩き、言つた。

「あ、しんみりモードになつちゃつたわね。気にしないで。私、蘭も真さんもいるし、幸せだと感じてるもの。それで充分よ

そう言つた後、机の周りにみんなを座らせると、園子は鞄から、あるレポートを取り出した。

「これを見て。鈴木財閥で調べた事よ。やつぱり表向きではあまり調べられなかつたわ。だから裏ルートで調べたの。かなりヤバイ組織よ、警察にまで入り込めるんだから・・・」

そう言つと、蘭に見せたあと、渉に渡した。

「かなり調べたね。もしかしたらこれは鈴木財閥にとつても危険なんじやないのかな？」

白鳥は冷静に、しかしあつさりと聞いた。園子もあつさりと答えた。

「まあ、リスクは元から負うつもりだつたしね。つていうか、大体この話を蘭が知つてて、組織について分かつてきた時点で気づいたの。何もしなくとも殺されるつてことにな。これは佐藤刑事達にあげるわ。使つて。ただ・・・私の言つこと聞いてもらひわよ」

そういうと、封筒を手渡した。美和子はここで開けていいと確認すると、ゆっくりと封を開けた。中を見て、美和子のみならず、脇で見ていた渉、白鳥、千葉も反対した。しかし、園子は反論した。

「最初は私達だけでやるつと思つてたの。けどなんかあつたら頼もうと思つて書いておいたのよ。これには蘭も、真さんも了承した。だから・・・ね？お願いします」

3人の真剣な表情を見ると、折れてしまいそうだった。美和子達は警察官として了承する訳にはかなかつた。しかし、このまま放つて置くと無茶するのは目に見えていたし、蘭と真がいるなら、監禁しようひと無駄だと思い、美和子は決意を固めると言った。

「いいわ。仕方ないわね。けど、無茶はしないのよー。」

3人はその発言を聞いて深く頷いた。

しかし、この時はだれも気付いていなかつた。園子が秘密のレポートを隠していることに・・・

今回の話を見て、期待はずれと思つた方も多くですよね（汗）確かにこれだけはちょっと・・・ですよね。

けど、これは蘭や哀のよひなメインキャラが出てくる重要なつなぎなんですね！

だから安心してくださいーーーーーー

今回の話、ちょっとぴり園子×真で好きなんですよねーでも、余計つていつたら余計かなー。

私、シリアルス系より恋愛が好きなんで。（）。

恋愛にすぐ結び付けるねって(笑)

あ、漆黒のチエイサーいつ見に行きますか？

今回はいつも以上に楽しみです^ ^

じやあまた（＊へ　へ＊）／園子大活躍ですよへへ

(けどこれは70話余裕で行きそうですね。予定の2倍!?)



園子たちはすぐ行動に移した。

いざという時のために、警察の上層部に伝えておいたと思つたからだ。

蘭、園子を始めた7人は、すぐ日暮警部のところへ行つたのだった。

7人は日暮のいる、捜査一課に行つた。そこは普段と違つてがらんとしていた。それを好機と美和子はすぐ日暮のところへいくと、用件を簡潔に話した。

「日暮警部、お話があります。この件のことなんですが・・・」

そう言つて、プリントの一枚目を見せた。

その瞬間、日暮の顔つきは一瞬にして変わつた。そして美和子、涉、白鳥、千葉だけを別の部屋に呼び出し、蘭と園子、真を外に出した後、言つた。

「この件に介入してはならない。それは分かつていたはずだらう?」

白鳥君

その時、みんなの視線が白鳥に降り注いだ。白鳥はそれを見て、観念したようで、言つた。

「もちろん知つていました。だつて警部以上なら全員知つているんですから。でも、僕、昔、ある女の子にこう言われたことがあるんですよ。『桜は警察の人があんなつけるマークだよ!強くて優しくてかっこいい正義の花なんだから!』ってね。それに感動して入った警察です。だから私はこっちはつきます」

それを聞いた田暮は冷たい一言を発した。

「君達はしばらく監禁状態下に居てもらひ。私だつてしたくはないのだが・・・な」

そういうと田暮は出て行つてしまつた。白鳥は急いで追いかけたが、扉が閉まつてしまい、どれだけ力を入れても開くことはなかつた。しばらく経つて、みんな状況を理解し、落ち着いた頃、千葉が話し始めた。

「でも、僕達、かなりヤバイ状況ですよね・・・もしかしたら・・・僕達は警察を・・・」

それを聞いたとき、白鳥が首を振つた。そして上を向き、見渡した後、再び千葉に向き直つた。

「いや、それはないです。なぜなら、僕達が知つてしまつたのは警察上層部に関係があること・・・しかも白馬警視総監に探られても理由を付けられるほどない・・・だから大丈夫です。ただ僕の勘ですが・・・毛利さんこの件に関わっている気がします」

「ちよつとつ・・!そんな事言つて聞こえたらどうするのよ・・・」

白鳥はそう言わると美和子に向かつて笑い、そして言った。

「大丈夫。絶対に聞こえません。上の監視カメラ、実は映像しか撮れないんです。だから音は入らないはずですよ。取りあえず状況を整理しましょうか」

そつ語りのを聞いて、美和子がすかさず警察手帳を開き、ポケットからペンを取り出した後、見取り図を書き出した。その見取り図は単純だが、はつきりと分かりやすかつた。

「よし、と

そつ語りて美和子はペンを置いた。それを見た渉はそこに書かれていの内容をまとめるように話した。

「ちよつと怪しいですよね・・・『知らないのがテーブルの所なんて・・・』

「まあいいじゃない！..幸運と思いましょ！」

美和子は明るくそつ語りと、カバンの中に入っていたミニノートパソコンを出した。

それを千葉に渡し、頼んだ。

「千葉君、お願ひ。あなたパソコン得意でしょ？たしかそういうことも出来るつて・・・だからこれでこここの部屋のパスワード調べてほしいの。頼れるのはあなただけなのよ！」

そう美和子に言われ断れる人間がいるわけない———そう思つていた渉と白鳥にとつて意外な返事が返つて來た。が、それは正論だつた。

「無理です。前撃たれた所、先週の犯人逮捕の時、痛めてて・・・タイプもかなり遅いんです」

その時、白鳥が椅子から降り、千葉のほうを向くと地面に正座した。それだけでも、すでに美和子と涉は驚いていた。しかし、次の瞬間、もつと驚くことになる。やう——頭を下げるのだ。あの白鳥が・・・

・  
それを見て驚いている美和子と涉は放つて、白鳥は話し始めた。頭を下げる状態で。

「お願いします。そういうことに詳しいのは君だけなんですよ！君の今の調子がよくないのも知っています。けど、これは国に関わる問題なんです！お願いだからやつてくださいーーー」

白鳥が頭を下げるのを見た千葉は断らなかつた。確かに白鳥はエリートで少し鼻につく奴だ、とは思つていたがこういうことを冗談でする奴ではないと知つていたからだ。その返事を聞いた瞬間から4人はここから脱出するために分担して作業を始めた。

「田暮警部ーーなんか言つてくださいーーー」

4人が四苦八苦している頃、こちらも騒動が起きていた。刑事はほぼ出払うという奇妙な状態に元々違和感を覚えていたが、4人に対する警察の動きを見て、何がある、と判断したのだった。だから、今、田暮に追及しているのだ。しばらくお互に黙つていたが、田暮はゆっくり口を開き、言つた。

「Need not to know（知る必要のないことだ）」

目暮がそう言つた瞬間、蘭は左回し蹴りをした。それを見て、園子は口をぽつかり開けたまま黙り、目暮も目を瞑つた。しかし、蹴り

を田暮の田の前で止めたのだった。

田暮がゆっくりと田を開けると、蘭はきつめの口調でこう言った。

「田暮警部、この事件が国に関係あるのは分かっています。だから、警察が黙っているのも。けど、私……いや、私達には関係ないんです。ただ、大事な人を助けたい——それだけです。迷惑はかけないようにします！だから4人を助けてあげてください……」

蘭の言葉はむなしく部屋に響いた。人がいない部屋に——  
田暮は首を横に振った。それを見て、園子がけんか腰で言った。

「なんですよー！助けるぐらい！いいじゃない！」

田暮はもう一度首を振ると言った。

「いや、あれは4人のためだ。あの組織にはもう国では歯向かえない。実質あの組織に操られているのだ。君たちは家に帰りなさい。あの組織に殺されたくないのなら……ね」

田暮の口は訴えるような口だった。それを見て、これ以上言い返すことは出来なかつた。それに、もともと関係のない4人を巻き込むのはどうか、という結論に達し、建前上は帰る、ということに決めたようだつた。

「分かりました。迷惑かけました。私達は家に帰ります」

蘭たちはそいつて警視庁を後にした。

3人を見送つた後、田暮は無線機に向かつて言った。

「あの3人を尾ける。もしもの時は監禁しても構わない」



10日ぶりですね（汗）  
かなり執筆ペースが落ちた、と思います。

てな暗い話は置いといて・・・

今回はサンデーに連載されていた、白鳥警部の思い出を織り込んで  
みました！

白鳥×小林のやつです！

今度短編書きたいなって思つてます！

あ、こっちも書きますよー！

そういうや、前やつた全国学力テスト、めんどかつたですね（汗）  
授業が無くなつたから、それなりに良かつたですが・・・  
しかもあの時執筆できたし^\_^  
そんなことしたの私だけかな？

あつ・・・

私、まだ漆黒のチョイサー見てないんですよ

早く行きたいのにー！

学校に身代わりでも置いて、行きたい気分です。  
つて、全部自分の話でしたね・・・

皆さんに質問ですが、この作者の作品はいいーーとかありますか?  
私文章能力低いんで、参考にしたいんです！  
たとえば泣ける作品とか・・・  
文がめっちゃ上手いものとか・・・  
教えてください！勉強しますーー！

では！…よろしくお願いします！  
良かつたら次回も見てください

蘭達は取りあえず園子の家に戻ることにした。園子はタクシーを呼んだ。真は後ろで尾けている警察の気配を察知していた。蘭も薄々察知していたが誰かは判定出来なかつた。2人は自然と園子を守る体制に入つていた。それに違和感を覚えた園子は言つた。

「ねえ・・・2人ともピリピリしてるわよ。もしかして誰か尾けてるとか?」

園子がそういつた瞬間、2人は行動に移つた。それは園子の発言で氣付いたと感じたからだ。蘭と真は走り始めた。園子はその時真に抱き抱えられた。

「ね、ちょっと、真さん!？」

園子の顔は赤くなつていた。しかし、真はそれよりも後ろの追っ手の方に気がいっていた。

「すみません、園子さん。僕に捕まつて下さいね！」

真にそう言われ、園子は自然と“はい”と答えていた。  
それからの2人の行動は素早かつた。

蘭がたまたま停まつていたタクシーを捕まえると素早く乗つた。そして、走つていた警官を撒いたのだった。  
撒かれてしまつた警官の一人は呟いた。

「せつかく千葉を使って警察を荒らしたのに・・・あの子に逃げられたら全てが台なしだわ。早くあの方に連絡しないと・・・後、目

暮をどうつか・・・

その頃、4人はパスワード解明作業に取り組んでいた。それは千葉でも時間がかかる程だった。

「千葉君、調子はどう?」

美和子が聞くと、千葉はパソコン画面を向いたまま答えた。

「iJのパソコン、性能がいいので、どうにかなりそつです。もし、ロック解除が出来たらやつて欲しいことがあります」

それを聞いて全員耳を澄ました。みんなが千葉の方に顔を向けると、口を開いた。

「それは・・・」

千葉の提案に全員頷いた。そしてまた4人は個別の作業に取り掛かつたのだった。

園子は自分の部屋まで来ると、ケータイをかばんから出して次郎吉に電話をかけた。

「もしもし、次郎吉おじ様ですか?・・・」

それからしばらく話し込んでいたが、話し終わつたのか、蘭の方を

向き、言つた。

「安心しな。あんたの旦那のところに今から行けるから！ 2人共ちょっと待つて！」

そう言つて出て行つてしまつた。蘭と真は顔を見合させ、首を傾げている。それを見て、園子は一人、ニヤつと笑つていた。

10分程経つて園子は動きやすそうだが、ゴージャスな服に着替えて来たようだつた。それを見て、蘭が気付いたようだつた。

「なるほど、私達2人はSPに化けるのね！」

真もあることに気付いたようだつた。

「園子さん、まさか・・・」

真が驚きの表情をしたのも無理はない。それは以前2人で話していきた、危険、かつ難易度の高い計画なのだから・・・それが分かっていた園子は話を続けた。

「そうよ。それに和葉ちゃんはもう行つてるみたいだし。だから不可能じゃないわ」

「けどっ！ そしたら僕達の約束が・・・」

園子は真をなだめるように、諭すように言つた。

「真さん、私だつてあの約束はちゃんと覚えてる。けど・・・親友の大事な人の危機なのに指を加えて見てるなんていやだもの！」

真は落ちついたようで、もう普段の真と変わりなかつた。そして、園子の方を見て言つた。

「そうですね。僕は分かつてたはずだつたんです。けど園子さんのことを考えるといつゝ・・・もう大丈夫。園子さんは僕が守ります。それならいいです」

「分かつた。お願ひ

園子は時計を見て、まくし立てるようになつた。

「時間がない！早く着替えて！真さんはあっちの部屋使つて！」

そつしているうちに慌ただしく時間は過ぎていつた。

しばらくして、鈴木財閥のヘリが降りてきた。3人はそれに乗ると、それぞれが決意を固めていた。

30分後、新一達が集まつていた場所にヘリを降ろしてもらつと園子はパイロットに言つた。

「おじ様、ありがとうございます。事情はまた今度話します。後はよろしくお願ひします」

それを聞くとヘリは飛んで行つてしまつた。

それを見送つた3人は和葉に会つと、平次の話をこつそり立ち聞きして聞いた話と、3人の持つている情報を元に、組織のアジトに潜りこんでいった。



file68・彼を追つて・・・（後書き）

今回はなんとなく園真が濃かつた気がしますね（汗）

次回はなんと！…ほぼすべてのカップルがアクションを起こします  
！！

忘れ去られていたであろう新一君と平次君登場！…  
覚えてました？

漆黒のチェイサーにも行けました！！

ジン最高！！

最後とか特にカッコよかったです！！  
後、新一×平次の電話かな？  
なんか良かつたです^\_^

GWに出せなくてすみません（汗）

次話は半分書きました！

あとはあの2人・・・

では！…また！！

新一と平次はしばらく落下していた。意外なことに二人全く恐怖を感じなかつた。

「なあ、死ぬ前つてこんな感じなのか？」

新一は普通にやつ言つたが、平次は思つたよりも怒つていた。

「なに言つとんねん！助かる方法考ええや！」

平次にそう言われ、新一ははつとした。そしてそのせいかその時何か思い付いたようだつた。

新一は腰に巻いているベルトからサッカーボールを作ると、それをクッションにして、着地によるショックを和らげた。それを見て平次は純粋に感心していた。

「さすがやな。あとはここから抜け出せばえんやけど・・・」

そう言つて壁にもたれると壁は脆く崩れ去つた。平次は一やつと笑うと持つていた剣で崩していった。

「もうこの剣使えへんわ。しゃあない、これは置いてこか」

そういうつて平次は剣を置いていった。そして、新一に行こうと言おうとした時、新一の異変に気付いた。

「工藤、薬切れたんか？」

しかし新一は口を開かなかつた。しかし、指がゆっくり動いて正面を指した。それを見た平次が正面を見るとそこには蘭、和葉、園子、真が立つていた。

（俺らが一番恐れてた展開やな・・・）

そう平次が心で呴いていたとき、蘭が呴いた。それははつきりしていって、響く声だつた。

「やつとあえたね、新一。これからはずつと一緒にいて。私が少しでも新一の助けになるなら居たいの」

新一はショックから立ち直ると蘭の首と腰に腕を回して優しく抱くと、言った。

「分かつた。ずっと一緒に。もうここまで来ちゃったんだろ。俺から離れんじやねえよ」

「うん」

それを聞くと、新一は蘭から離れ、進んでいった。  
それを見た平次は和葉に言った。

「俺から一生離れるんじゃないで。お前は俺しか守れへんからな」

「えつー?あつ、うんー」

和葉は平次の発言にビックリし、マヌケな反応をしてしまつた。しかし、平次はツツコまず、和葉の手を繋いだ。和葉は顔を赤らめながら進んでいった。

園子と真もそういうことはなかったものの、しつかり手を繋いでいた。強く、優しく・・・

6人共自分達に気をとられ氣付いてなかつた。4人の子供達の氣配に・・・

快斗は青子のいる階に行くと、持ち前の早業で鍵を開けた。青子は快斗を見た瞬間、今までの緊張が解け、安心したのか泣いていた。

「かつ・・・快斗！－怖かつたよ！－でも助けに来てくれてよかつた・・・」

そういうのが精一杯だった。青子を急いで抱きかかえると、青子はさらに安心したようだつた。快斗がそれを見て氣を緩めたその瞬間・・・快斗の肩を銃弾が掠めた。

快斗はその時、逃げられない、と肌で感じ取つた。そう、その相手は・・・ベルモット。

そんな強敵に立ち向かうこと・・・それは死を意味するに等しかつた。もうすでに銃口は青子を狙つていた。それでもなお戦おう、といふ考えをもてたのは“青子を守りたい。たとえどんな危険になつても・・・”という意思があつたからだつた。その一心で快斗は勇気を振り絞つて、ベルモットに話しかけた。

「お前が俺の父さんを恨んでたことは知つてゐる。父さんは組織の内部を知り、ジンとベルモットが薬を使って若返つたり、年をとらせたりしたことを突き止めた唯一の人間だからな。だけど青子は関係ない。俺は殺されても構わない。だけど、青子だけは・・・アイツだけは、無事に帰してやつてくれ。それだけだ、頼む！－」

快斗は真剣に訴えた。するとベルモットはしばらく黙り込んだ。そして不敵な笑みを浮かべると、言った。

「その子は助けてあげる。けど・・・シエリーを私達のところへ持つてくる、それが条件。悪くないでしょ？」「？」

快斗は考えた。仲間を人質として渡すことと愛する人を守ること、どちらが重要か、と。それを考えた末に、快斗は首を縦に振った。ある一つの条件をつけて。

「分かった、連れて来る。その代わり、組織が作った薬である子のお姉さんを生き返らせてくれないか。恐らくそれをすることが出来る。だからだ」

ベルモットは頷いた。

「いいわよ。じゃあ、sheerryをよろしくね！…」

そういつてベルモットは青子を再び部屋の中に閉じ込めた。しかし、その時のベルモットは深い顔をしていた。まるでこの騒動の終わりを知っているかのように・・・

今回かなり支離滅裂ですね（汗）

焦りですかね・・・

投稿速度は激遅ですが・・・

今回は宣言どおり、各カツフル書きました！

高佐は書けてませんが・・・

そういうや、雨の中の運動会つてやつたことがあります？

私の学校、運動会今年から6月になつたんですが、かわいそつなこ

とに2年連続雨です・・・

しかも次の日快晴なんて・・・

絶対祟られてますね・・・

では、後書きまで支離滅裂でしたが・・・

また！！

次は・・・哀ちゃん！！出でますよーー！  
つてゆーかメインですね

哀を探すため、快斗は急いで下へと降りていった。しかし、その顔には未だに迷いが見られていた。

(あの子がいくら組織の手下だったことがあるからといって、あの子を売つていいことにはならない。それは分かつてる。ナゾッ!! 青子の身になんかあつたら俺はもう・・・)

そして苛立ちのあまり、壁を叩いた。すると、そこには新一達が落ちていった穴があった。

「へっ?」

そしてまつやかさまに落ちていったのだった。

(何だこれは!! ヤバいんじゃねえか?)

そんな危機迫つた状況になつた時、下から声がした。

「元太君、灰原さんを早く見つけて帰りましょ~!! ジョー!! こんな危険なところに長居するなんて危険すぎます!! だからとつあえず、動いてください!!」

「やうだよ、元太君、お菓子食べてる場合じやないって!!」

(ああ、俺は死ぬんだな、だからこんな幻聴が聞こえるんだ)

そう思つた刹那、何かやわらかいものにて、快斗はぶつかつた。

それと同時に下からはうめき声が洩れた。

なんだらか、そう思つた時、見覚えのある女の子が言った。

「あの時のお兄さん！！助けて欲しいの！！哀ちゃんがつ、哀ちゃんが！！」

そう、歩美は泣いていた。自分が危険な目にあつているからではない、ただ自分の友達が危険な目にあつてているかもしれない、その一心で。

その涙を見て、快斗の心は決まった。

「そつか、俺が間違つてたんだな」

そうつぶやくと、快斗は歩美達に話しかけた。

「3人とも、危険なのは良く分かるだろ？ 正直な話、この事件は君たちも無関係とは言いにくいが・・・君たち自身が悪いわけではないんだから、帰つたほうがいい。俺は俺でちゃんとケリをつけなきやいけないから残るが、君たちを安全などこまでは連れて行ける。だから、君たちの友達の為にも、無事に帰ろ？、な？」

快斗はそういうて3人をつまみあげた。しかし、3人は快斗の手から逃れ、快斗に言った。

「俺らは友達を見捨てたりなんかしねえよ！..」

元太はそう言った。それに続き、光彦、歩美も言った。

「そうです、灰原さんは大切な友達ですから！..」

「お兄さんは正しいと思ひ。けどね・・・やつぱ帰れないよ」

快斗はその発言を聞いた後、考えた。この3人を連れ去る時のリスク、確率などを。

その結果、たどり着く答えは一つだった。

「お前らは安全なこに隠れとけ。で、危険が去つたら探すんだ。その判断力はお前らにはある。ちゃんとカタをつけたら君らの友達と一緒に帰れるように。それでいいか？」

もちろん、3人は馬鹿ではなかつた。それに同意すると、3人は完全なところに隠れていった。

哀はさつき快斗が落ちた穴の前に立つていた。

哀は少年探偵団の気配に気が付かないほど、ここへ来るのには一つの大きな目標——いや、すでにそれは賭けに等しかつた。  
そう——すべてにカタをつけ、ジンかベルモットに殺される……  
そのことだったのだから……

快斗の今の心境を察すると、その決意はさらに強くなつた。

(私が誰かの役に立てるなら、嬉しい。工藤君の助けにはなれなかつたけど……)

そんな想いを胸にベルモットの居る部屋へと入つていった。  
ベルモットは突然の来訪者にびっくりしていた。しかし、すぐに中へ呼び、話し始めた。

「あら、あなた自身が出向いてくれるなんて、凄く嬉しいわ。その理由でも聞こうかしら？」

哀はベルモットになぜか恐怖を抱かなかつた。それが何を表しているか、哀には分かつてゐた。そう、決意が固まつたからだ。それが分かるからこそ、哀は本心をベルモットに言つことが出来たのだ。

「今までのしがらみを断ち切りたかったのよ。私が居なくなれば、あなたはすべての人々から手を引いてくれるんでしょ？それに、もう私の周りの人が傷ついてしまつのは嫌なのー私のせいで・・・」

ベルモットは頷くと、銃を取り出しながら言つた。

「ええ、その通りよ。私はジンがあなたにぞつこんなのが氣に入らない、だから、あなたを組織から消す方法を考えてた。一度は喜んだわ。あなたが地下牢に入れられた時はね。けど、あなたが組織から消えた時、幼児化したつて気づいたわ。そして、再び、あなたを憎み始めた。でも、手は出せなかつた。有紀子の息子と仲良くなつたからね。だからこのチャンスを狙つてたの、組織崩壊のときならあなたは必ず駆けつける。それなら必ず私はあなたを殺れる。私の目的はこれだけだもの。ずっと待ち望んだことなのよ」

そして銃を取り出すと、引き金に手をかけて、哀に着々と近づいていき、5メートルほど離れた位置で止まつた。

「じゃあね、シェリー」

その言葉を発すと共に、ベルモットは引き金を引いた。その時、銃声が部屋いっぱいに響き渡つた。

## file70・哀の決意（後書き）

哀ちゃん、とうとうベルモットの元へ！！

ベルモット、引き金を引いたやいましたね（汗）

哀ちゃん、どうなるの？と心配な angle です（バカ）

今回の投稿・・・ほほ一ヶ用ぶりです。

まず、それを謝りたいと思います。

テストが中3になつてバカみたいに増え、ここに来れなくなつてしまつた。

ただ、最近は少し要領をつかみはじめたのでなんとなかりそうです

！！

頑張ります！！

次回も哀ちゃん結構メインですよー！

## file71・ベルモットの想い（前書き）

だいぶ遅れてしません！！

多分忘れ去られてると思いますが、思い出して読んでいただけた方が  
がいれば大変嬉しいです！！

## file71・ベルモットの想い

その瞬間、銃声は部屋全体に鳴り響いた。銃からでた銃弾は哀の肩を貫通した。しかし哀は決して動かなかつた。ベルモットはそれに驚いていた。

「あら、動こうとしないのね。私、驚いたわ」

哀は肩に熱さと痛みを感じながらも言った。

「だつて動いたら死を覚悟してるのでありますからないでしょ？」

滑らかに言つたが哀はかなりの苦しさを感じていた。しかし、みんなを守るためにその苦しみにさえ耐えられた。

ベルモットはそれを聞いてせらりと口を開いた。

「なるほど。だからあの子と違つて解毒剤を飲まなかつたのね。最初に組織との戦いに参加するはずだつたのにしなかつたのもあの子に黙つてここに来るため……」

「な、なんでそれを？」

哀は驚いた。それはジョナディと話したことだつたからだ。そして一つの可能性を見出だした時、哀の顔から血の氣が消えた。ベルモットは口元で笑いながら言つた。

「そう、あの時は私の変装よ。そこで貴方達に組織の情報を回したの。全てを終わらせないといけないしね」

ベルモットは一息ついた。それは一瞬だつたがとても長く感じられた。

そしてベルモットはマジメな表情になり銃をもちあげると言った。

「無駄話は終わり。じゃ、貴方には死んでもううわね・・・。バイバイ、ショリー・・・」

ベルモットは静かに引き金に手をかけた。哀はそれを見たあと、目を瞑り、死を覚悟した。

（工藤君・・・最後にもう一度、一瞬でいいから・・・会いたかったな・・・）

哀が、後悔ともこれることなことを考えたのと同じタイミングで、ベルモットは静かに、かつ、冷酷に引き金を引いた。  
しかしその瞬間、哀の体は誰かの手によつて、左に押し倒された。哀は驚きで一杯だった。なぜなら・・・押し倒した相手は、今わの際に思つていた工藤新一だったからだ。

「へへ、工藤君？何でここに？」

本当は他にも言つたことが山ほどあった。しかし、この時、この場所では、これしかこうことは出来なかつた。そんな哀をよそに、新一は哀に耳打ちした。

「灰原・・・怪我、大丈夫か？あとから処置してやるから俺の後ろに居て」

哀は、新一がそう言つてくれたことが嬉しかつた。出来ることならそうしてみたい、そう思った。しかし、哀はそうするわけにはいか

なかつた。なぜなら、この1年間で出会つた人たちを危険な目にさらすことは哀のなかで最も許されざる行為に等しかつたからだ。だから、無言で哀は新一の前に出た。

「ごめんなさい、工藤君。あなたは優しい人だから……みんなを助けたいと思うのも分かるわ。けど……これが最もいい方法なのよ。分かつてね」

哀がそれを言つたのを聞き、新一がなにか言おうとするのと同時に、ベルモットが言つた。

「そう、良く分かつてるわね。貴方が死んでくれさえすれば、私はこの決戦なんてどうでもいいの。そう……貴方さえいなければ……ジンだつて、私のほうを向いたのにっ……！」

最初は冷徹そのものだつたベルモットの口調は、いつの間にか感情的になつていて。それは、ベルモットのこの気持ちこそが、哀を恨んだ理由だということを明確にあらわしていた。

新一はその態度を見ると、ベルモットに言つた。強い口調ながらも包みこむような声色だつた。

「今までなにがあつたかなんて、俺は知らないし、これ以上知ることもないと思う。けど……恨みがあるからつて人に当たるのは許されざる行為だ。それに、この件に関しては、誰も悪くない。そんな事、分かつてるだろ？ 貴方ほどの能力があれば……ただ、それを抑えられなかつた、そう、それだけだ。だから……灰原を狙うのはやめてくれないか？ 俺を殺してもいい。だから……」

それを言つた新一の顔には決意の色がはつきり見えていた。それを見たベルモットは銃を降ろし、そして言つた。

「さすが有紀子の子ね。この私でさえ、少し動搖したわ。けどね・・・やつぱりそれでも考え直すことは出来ないの。それほど、このことをずっと考え、恨みをためてきただもの。だから・・・私はシリーを殺さなければならないのよ」

そういうと降ろしていた銃を上げ、新一の前に立っていた哀をめがけて撃つた。

しかし、新一も準備を怠つていなかつた。

持つていた銃でその弾を打ち落とすと、ベルモットの両足、腹部をめがけて撃つた。ベルモットは感情的になつていたせいもあり、普段の実力を出せなかつたのか。腹部の銃弾をよけることが出来なかつた。

しかしそれに当たつた瞬間、ベルモットは真剣、かつ、冷酷な普段の状態を取り戻した。それは、哀を殺す、その指令を遂行する狼のように見えた。新一は哀を守り続けた。しかし、銃弾が切れ、新しい銃に変えるその一瞬をベルモットは逃さなかつた。

(やいれるー?)

そう思つた瞬間、何かがベルモットの手に当たり、銃がベルモットの手から落ちたのだった。

## file71・ベルモットの想い（後書き）

前回書いたのからいつと、ずいぶんお久しぶりになりますね  
むしろ初めての人のはうが多いかもしません

これなかつた理由・・・は、中3になつて、現実の問題が多くなつた、とか、一時期バスを忘れてた、とか色々です。

これからはちゃんと書くつもりですので、読んでくださいね  
お願ひします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0524f/>

---

また会える日まで

2010年10月10日23時08分発行